喜寿の東海道五十三次漫遊録

日本橋から京都三条大橋まで

（２００９・２・１１～２００９・１１・１９）

佐薙　恭　鈴木克夫　高崎治郎　松尾寛二　宮川次夫　石和田四郎

目　　次

１　日本橋　品川宿、川崎宿、神奈川宿・横浜・・・・・・・　2頁
２　神奈川宿・横浜、保土ヶ谷宿、戸塚宿、藤沢宿・茅ヶ崎・　5頁
３　藤沢宿・茅ヶ崎、平塚宿、大磯宿、小田原宿・・・・・・　6頁
４　小田原宿、箱根宿　・・・・・・・・・　9頁
５　箱根宿、三島宿、沼津宿、原宿　・・・・・・・・・　12頁
６　原宿、吉原宿、蒲原宿、由比宿　・・・・・・・・・　15頁
７　由比宿、興津宿、江尻宿、府中宿（静岡）・・・・・・　19頁
８　府中宿（静岡）、丸子宿、岡部宿、藤枝宿　・・・・・・　23頁
９　藤枝宿、島田宿、金谷宿、日坂宿、掛川宿　・・・・・　25頁
１０　掛川宿、袋井宿、見付宿、浜松宿　・・・・・・・　27頁
１１　浜松宿、舞坂宿、新居宿、白須賀宿、二川宿　・・・・・　29頁
１２　二川宿、吉田宿（豊橋）、御油宿、赤坂宿　・・・・・・　31頁
１３　赤坂宿、藤川宿、岡崎宿、池鯉鮒（知立）宿・（安城）・・　35頁
１４　池鯉鮒宿（安城）、鳴海宿・笠寺　・・・・・・・・・　38頁
１５　鳴海宿・笠寺、宮宿（熱田）、桑名宿、四日市宿　・・・　41頁
１６　四日市宿、石薬師宿、庄野宿　・・・・・・・・・・・・　42頁
１７　庄野宿、亀山宿、関宿　・・・・・・・・・・・・・　53頁
１８　関宿、坂下宿、土山宿、水口宿　・・・・・・・・・・・　54頁
１９　水口宿、石部宿、草津宿　・・・・・・・・・・・・・　55頁
２０　草津宿、大津宿、京都三条大橋　・・・・・・・・・・　56頁
２１　データ総括（距離、時間、歩数）、参考資料、補記・・・・　61頁

＜添付＞

１［最終版］東海道ウオークの歩行記録・佐薙　・・・・・・　63頁
２　東海道歩き・思いつくまま（その1）・佐薙・・・・・・　66頁
３　転倒始末記・石和田　・・・・・・　70頁
４　東海道写真その1～その7（抜粋）・・・・・・・・・・・75頁

喜寿の東海道五十三次漫遊録

喜寿を目の前にして、山男が山から丘へ、丘から平地へと活動の舞台を下げてきた。

日本橋・日本国道路元標
＜2009 年 2 月 11 日＞

昨年、アフリカのキリマンジャロ登頂をピークの直下まで行きながら「高山病？」にやられ　**「人生のキリマンジャロは他にもある」**と潔く断念した御仁が言い出し、早速高崎君、宮川君などが賛同して、てきぱきと計画が練られ、実行に及んだものだ。鈴木君と松尾君は共に家庭の事情もあり、フル出場は無理、小生は何よりも「五体不満足」､とても人並みには歩けない。また迷惑をかけては,と控めに眺めてきたが　兎に角、都会を歩くのだし、駄目なら電車もバスもあり最悪の場合は「救急車の世話」にもなれようかと、随分虫のいい話だが仲間に入れてもらう事にした。

お江戸日本橋から京都三条大橋まで１２６里６町１間（１里３，９００米換算、４９３Km）を日帰り３日、３泊４日を４回、合計１９日、１日平均２５Km～３０Km で歩く計画だ。
何故歩くのか？歩いて何になる？・・。
「この道に刻まれた有名・無名の人々の人生とその時代を想像しながら、それと自分の人生を重ね合わせてみる」ということか。出来るだけ現在から遠ざかりつつ歩いてみたい。

＜参加メンバーの素描・全て敬称略＞

５７年前、薩摩、肥前（佐賀)、尾張、信濃、江戸、上総、など（下野、会津など独特の体臭をつけた仲間は既に亡き人となり寂しい)、夫々の土地の匂いを背負って集まってきた山仲間達。今もその名残を濃厚に残しながら極く気楽に“やろう“と相なった。

高崎：種子島最大の芋焼酎造りや・高崎酒造の御曹司で鹿児島鶴丸高校のエース、世話好きで現役引退後も町内会、OB 会等で多忙、スケジュール表は真っ黒、吾ら山仲間（オーション会）では話題の提供者としてなくてはならぬ存在。ダウン？しても不思議と蘇生、その秘密は一体何処にあるのか。良薬は？薩摩おとこ（隼人）の矜持か？

松尾：戦乱を潜り抜けて朝鮮から引き上げてきたところは「葉隠れ」の国、佐賀。身についたこの苦労性は社会人になってからも尾を引いたか？

何故か「古典？」や「宗教的なもの？」に造詣が深く、同時に写真やスケッチなどにも良

いセンスを見せる。膝に少々の弱点を抱え下りが苦手（その最たる男・春日井はもういないが)、最愛の奥さんを独りにしておくことが出来ず、今回の五十三次は宿泊しての連続歩行は無理で飛び飛びの「つまみ食い参加」を宣言。

鈴木：卒業するとすぐ尾張で家業を継ぎ,東海道は自分の庭先同然。かなりの「グルメ？」で、各地の名物、名産、うまいものに詳しく土地にまつわる物語も豊富。

彼もまた奥さんを独りに出来ない事情を抱え、折々の日帰り参加、「全課程修了の卒業証書は初めから狙わず聴講生」を宣言。心身は相変わらず健全だ。

宮川：信濃の国、長野を故郷とする。長い間の喫煙がたたり？肺活量の低下を来したがウオーキング、週一ゴルフに励み、次第に復活、自信も回復中。今回の五十三次には異常なほどの思い入れを見せ、得意のPCネットやその他の資料に当たり、街道の迷いやすい箇所などを事前にチェック、リーダー佐薙をよろしく補佐する。

行く先々での人情に触れ地酒を愛でるのが何よりの楽しみと、その狙いは明白。

佐薙：その祖先は江戸ではないが当人はその名も高き教育大付属、大学では凡人には全くちんぷんかんぷんの「現代数学」、頭脳の冴えも足腰の衰えも見せず。五十三次・全行程の緻密、詳細なプランを作成、足手まといの我らを我慢しながらリードせざるを得ない宿命に耐える覚悟？。鳥、花、樹木などやたらと学究的に研究、そして最近では富士山検定２級をやすやすと突破（この秋には１級挑戦とか)、若者のような好奇心で、民俗、歴史、地理、博物、宗教、・・の勉強にと常に前向きで尽きるところがない。

小生：０５年８月、北ア・雲の平登攀中転倒、頚椎損傷、四肢の運動機能障害、平衡感覚の喪失、加えて０７年８月、心臓冠動脈狭窄により２ケ所にステント挿入。まさに「五体不満足」、十人並みの歩行は到底不可能。子供の頃、往復１６Km の山道を通学して得た唯一の宝？足腰の強さも今や消え失せ、全くの弱卒。同僚に迷惑をかけるのではと大いに気がかりだが。

（さて、これらが織り成す「喜寿の道中・膝栗毛」は、どうなることやら？）

[1] 第１日　２００９年２月１１日　日本橋から神奈川宿・横浜まで

佐薙、高崎、宮川、松尾、石和田（距離２７・３Km　時間８H50m（８H10m）歩数 47.000）

７：４５、**日本橋・日本道路元標地点出発**　増上寺、西郷・勝会見の碑、泉岳寺、品川八ツ山橋から旧東海道・品川宿、土蔵相模（高杉，久坂、等がイギリス公使館焼き討ちの謀議)・沢庵和尚の東海寺遠望等々、「涙橋」を渡って鈴ケ森刑場跡、

１２：１５～５０、昼食、六郷（多摩川）の渡し、川崎宿、芭蕉の句碑、生麦事件の碑、神奈川宿・本覚寺（横浜開港時米国領事館）浄瀧寺（イギリス〃）慶運寺（フランス〃）等々、(奇しくも横浜開港１５０周年にあたる。由緒ある事跡多々)、広重画く神奈川宿の風景と重ね合わせつつ、台町の丘を登る。旧「さくらや」の田中屋（１８６３年～）を宮川が覗く。完全踏破したら打ち上げはこの店、５万円/１人とか。

１６：３０、横浜着　（但し高崎、松尾は早々に京急・神奈川新町駅から電車を活用、天理ビル２４階・「北海道」で合流・反省会）

＜草鞋と籠と自動車と＞

旧東海道に沿って第１京浜国道（横浜で国道１号）が走る。品川宿の八ツ山橋から鈴ケ森、六郷橋から生麦付近まで以外はほぼトラックが排気ガスを撒き散らしながら疾走する国道沿いだ。所々に立つ石碑や説明板が僅かに往時を忍ばせてくれる。

＜時代転換の舞台となった品川宿と神奈川宿＞

徳川家康によって本格的に整備された東海道（１６０１年開始、それ以前にも幾筋かの古道があり、源頼朝による鎌倉道もあった）は数知れぬ歴史の興亡を見てきたであろうが、「江戸無血開城の西郷-勝の会談の碑」や「長州の高杉や久坂等が謀議を重ねた旅籠・土蔵相模跡」などを目の当たりにすると．歴史の歯車を大きく転換させた維新の志士達の命がけの思い・鼓動が伝わってくる。

また、神奈川宿手前の生麦事件の碑（１８６２年）や外国領事館などに使われた寺々の集まる横浜の台町を通ると（奇しくも今年は開港１５０周年）国を開くことへと転換した人たちの先見性や勇気に頭が下がる。

＜早速キセル発生・補講・追試の要＞

川崎宿を過ぎた辺りから、高崎の歩行姿勢が何故か（船会社出身の御仁らしく）右舷へ傾斜するようになる。立派な靴を新調したがどうも合わない・・というのが本人の解説？

松尾も薬局を探して大型のバンドエイドを足にはる。入った薬局では「京都まで行く・・」なんて大見得を切って薬局のお嬢さんをびっくりさせていたようだが・・。まだ始まったばかりというのにさ。

両者誠に賢明。京急・神奈川新町駅から電車で反省会場へ。早くも補講、発生だ。

＜横浜の客は紳士ばかりだ＞

反省会のあと、横浜駅で大事な大事なカード入り財布を紛失したことに気づいた宮川君、大慌てに反省会場まで戻ってみると大枚〇〇万円相当の彼の財布はちゃんと店に届けられていた。どうやら靴を履くときするりと落ちたらしいが気づかず。矢張り草臥れていたんだろう。依って「横浜の客のレベルは高い！」

こんなハプニング、これからどれ程起こることか楽しみではある。

＜同姓の家宅に遭遇＞

生麦事件の碑を過ぎ、キリンビールの工場前辺りで、突如「石和田」なる表札を発見。佐藤や鈴木ならいざ知らず滅多にないこの姓、もしかしたらその先祖は？

一度訪ねてみるか？

「石和田」の表札に驚く

＜小手調べ＞

装備、ルートの見つけ方、歩行ペース、飲食の取り方、各メンバーの実力？などなど。チームとして、個々人として、幾らかの修正点は勿論あったが、総じてグッドではなかったか？！

[２]第２日、２００９年３月５日　神奈川宿・横浜から藤沢宿、茅ヶ崎まで

佐薙、高崎、鈴木、宮川、松尾、石和田（距離 29Km 時間 8H30m（７H30m）歩数 46,000　）

７：３０　横浜発　保土ヶ谷宿（本陣・軽部家、現在も居住）
　権太坂・投込塚の碑・境木地蔵（武蔵・相模の国境）

１１：３０　戸塚宿、１１：３０～１２：１０
　昼食

１４：００　藤沢宿・遊行寺（藤沢山無量光院
　清浄光寺、一遍上人開祖・時宗総本山）

１５：４５　茅ヶ崎着（藤沢・平塚宿中間点）

＜横浜・上台橋付近・出発地点＞
2009 年 3 月 5 日
松　宮　石　高　佐　鈴
尾　川　和　崎　薙　木
田

＜保土ヶ谷本陣・軽部家と開港１５０周年＞

本陣は大名・公家などが宿泊するが儲からない仕組みで地元の名家がこれを営まされた。

保土ヶ谷の本陣は軽部家で現在もそこに居住して居られるというが、「横浜開港の折の道路（橋）工事で元請けから下請け、下請けから孫請けへと途中で多くの金が抜かれ工事は停滞、横浜町の総年寄り苅部清兵衛が自ら借金をして工事を進め辛うじて開港の前日工事を完成させた。関連する文書が保土ヶ谷区の子孫の蔵から見つかった」という記事が 09 年 6 月某日の朝日新聞にあった。「軽」と「苅」ではあるが多分？！

＜権太坂と投込塚跡＞

江戸から出れば初めての難所、京からでは最後の坂道。大学箱根駅伝でお馴染みの権太坂は改修された国道１号だが、歩く東海道はだらだらと１・５Km も続く。ほぼ登り切った所に「投込塚跡の碑」がある。

この坂道では行き倒れになる旅人も多かった。朝早く江戸を発った旅人は普通は戸塚宿まで頑張ったわけだが、疲労がピークに達している夕方にこの険しい坂道を越えるのは身にこたえたのだろう。「もうここらで・・」と。松尾が「往時は人生の苦しさから開放され、楽になるのは、あの世へ逝かせて貰うことだった、」と言った。そうなんだなあ。

医療の未発達な往時、人々は己の運命、寿命を悟り、従容としてこれに従ったのだろう。

遊行寺・山門前

とても及ぶものではない。だが、こうした「永遠の旅人」を１ケ所に集めて弔ったところを「投込み塚」とはどうもいただけない！

＜時宗総本山・遊行寺と自転車のご婦人＞

浄土教の一派、鎌倉末期、一遍上人（1289 年亡）を開祖とし、「阿弥陀経」の「臨命終時」に由来、平生を臨命終時と心得て怠りなく、称名念仏することを説く。同志を「時衆」と呼び、一向（ひたすら）阿弥陀仏の名号を称える事を肝要とし

たので「一向衆」とも呼び、「一所不住」を本旨としたので「遊行衆」とも言うそうだ。寺院数凡そ４００、信徒は５万、それ程大きな宗派ではないが、総本山は弥陀の「四十八願」に因んだ４８段の幅広い石段、樹齢６６０年という大銀杏など寺域は広大、大学箱根駅伝の復路では大抵放映される場所だ。自転車で通りかかったご婦人を呼び止めてシャッターを押してもらった１枚。ご親切忘れません。

[3] 第３日、２００９年３月１３日　藤沢宿・茅ヶ崎から小田原宿まで

佐薙、高崎、宮川、松尾、石和田（距離 24.7Km 時間 7H50 m(7 H10 m)歩数 39,000）

７：５０　茅ヶ崎発　９：１０　旧相模川・相模川（馬入川）

１０：００　平塚宿　花水川・高麗山、高来（たかく/こうらい）神社、化粧坂、

１２：００　大磯宿　昼食　鴫立庵　二宮・国府津、酒匂川　（時折雨、支障なし）

１５：４０　小田原宿・小田原新町着　１６：００小田原駅・「魚国」で反省会

背後にあるのは橋脚

＜旧相模川・馬入川・橋げた・鋸＞

旧相模川は現在より１Km 程東、現在の小出川辺りを流れていたらしい。その河畔に大昔の橋脚が展示されている。１１９８年にここに橋がかけられた折、その落成供養に参列した源頼朝はこの付近で「義経一行の亡霊」に驚き落馬して、その怪我がもとで翌年死亡したとか、頼朝が馬ごと川の中に転落したから「馬入川」だとか、縁起が悪いからその後、橋は架けられず江戸時代まで船渡しだったとか。この辺り鎌倉に近く頼朝・義経にまつわる伝説は豊富だ。ところで、日本の巨大木造建築ではどう木材を切り出し、加工したか？が予てから疑問だった。物を切る最初の道具は斧だったろう。石器時代の出土品には石斧が出る。しかし、巨大な材木を斧で切れたろうか？鋸が何時から使われ始めたか？紀元前１４世紀のエジプトでは使われていたらしい。日本では法隆寺建築にその痕跡が見られるという。この写真の巨大な橋脚、周囲は斧か鉞（まさかり）？で削ってあるが躯体の切断は鋸だったと推測される。三大丸山や吉野ヶ里遺跡の柱は？出雲大社の巨大な柱は？いずれ調べてみたい。

（しかし、伊勢神宮の２０年毎の遷宮で使われる直径３０Cm もある檜の御柱は未だに木曽の山奥から斧だけで切り出されるようだ、出雲大社の６０年毎の建て替えはどうかな？）

＜高麗山、渡来人、日本人＞

大陸から、ことに朝鮮半島からの渡来は古墳時代からで種々の文明を齎してくれたが、７世紀後半になると朝鮮半島の政情不安（663 年百済、668 年高句麗滅亡）もあって更に多数の渡来者があったようだ。

「高麗若光」なる王族（若光自身は高句麗滅亡の 2 年前に来ていた）率いる高句麗からの一団は大磯に上陸、この 168 米の山裾を開拓、住み着いた。

背後の団子山が高麗山

７１６年になると大和政権は甲斐、駿河、相模、上総、下総、常陸、下野７カ国の高麗人１７９９人を北武蔵（今の埼玉県）に移し高麗郡をおいた。

この時、若光も彼の地に移り、今でもその地には高麗、高麗神社、高麗川などがあるが、山梨県に巨摩郡があり東京都の狛江（古墳群あり、狛は高麗と並ぶ代表的な姓らしい）など、関東各地（畿内や筑紫、吉備、近江地方は言うに及ばず）にも多数住んでいたことが解る。（高句麗の墓制である「積石塚」は群馬、長野、山梨に多いそうだ）また、持統天皇の６９０年頃、「新羅の帰化人を武蔵に置く」という記録があるそうで、上毛、下毛など今の群馬県などに盛んに送られ、関東はそろそろあふれ始めた朝鮮半島からの各種渡来人のフロンテイアとされたようだ。

＜鳴立沢と西行＞

「西行」は文治２年・１１８６年、平家に焼かれた東大寺再建の勧進のため奥州平泉に向かう途中、相模の国大庭の砥上原（藤沢市大庭あたりか？辻堂北方一帯は鵠沼の地名もあるとおり鳴も沢山いたらしい）のあたりで

「心無き　身にもあはれは　知られけり　鴫立つ沢の　秋の夕暮れ」と詠んだ。

（因みに西行のこの歌は藤原定家・見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ、寂蓮法師・寂しさはその色としもなかりけり真木立つ山の秋の夕暮れ　と共に「３夕の名歌」と讃えられている）

また、もう一首「風になびく富士の煙の空にきえて行方も知らぬ我が思いかな」（これには「東の方へ修行し侍りけるに富士の山を詠める」の歌誌がついているが）と併せて、３０歳前後で一度、今また６９歳の高齢で再びここへ来た西行の思いが伝わってくる。（小夜の中山峠では「年たけてまたこゆべしと思いきや命なりけり小夜の中山」とも詠んでいる）

江戸初期、１６６４年、小田原に住む崇雪が西行を偲びこの地に草庵を結び「鴫立庵」の碑を建てた。（大磯の海辺、何処に鴫のすむ沢などあるか？と、思ったが上述の通りらしいと聞いて納得した）

＜武蔵、相模、駿河・・この国名は何時からか？＞

吾らの旅は相模から駿河に入ろうとしている。しかし、今でもごく当たり前のように使っているこれらの国名は一体何時・どのようにして出来たのか？

答えは「7 世紀～１０世紀」の律令制度に遡る。初の古代統一国家、国の形が整った時のものと言える。凡そ１３00 年もの間、連綿として受け継がれているとは！！

＜少々の補足・蛇足＞

聖徳太子は 592 年、推古天皇の摂政となると大王（天皇）中心の政治確立を目指して、遣隋使を派遣して大陸からの技術・文化を取り入れ崇仏派の蘇我氏と組んで排仏派の物部氏を滅ぼし、四天王寺や法隆寺を建立して仏教を国の統治の精神的根幹にすえようとした。

大和政権（天皇と中央豪族）は大化の改新（６４５年）を経て、７世紀後半、天武,持統朝になると旧豪族による私有地、私有民支配（それまでは國造（くにのみやっこ）や県主（あがたぬし）がばらばらに治めていた）を克服し、強力な権力機構を築く為、隋・唐の法体系を取り入れた。これが律令制で、**大宝律令（701 年）～養老律令（751 年）な**どによりほぼ骨格が完成した。(**律＝刑法、令＝行政・民法など、格＝補足、式＝施行細則**)

この統一国家の形成には朝鮮半島からの言わば外部からの脅威があったと言われている。

大和政権の支配が及ぶ範囲（陸奥から薩摩まで）を５畿・７道、６６の国と２島（対馬と壱岐）に区分（「好い字をつけよ」と、国の名前は全て漢字２文字)、これは江戸時代まで変わらず、**日本の地理的区分の骨格**をなして来た。

國は、郡、里（50 戸を１里・後に郷・20 里が限度）に細分化され、國の統率者は国司で中央から派遣（任期は６年、のち４年、大抵は中央の貴族や門流、位には守・介・掾＝じょう・目＝さかん・史生、例えば大伴家持は越中の守）され、その権限は軍事、警察、人民の教化など行政、司法の全てにわたり、これらを，郡司（大抵は地方豪族）里長（後に郷長）を通じて統治した。**その中心地（県庁所在地）は国府（府中とも言う）**。７４０年代，聖武天皇のとき蔓延した疫病による社会不安を払拭する為に国府の周辺に建てた国分寺、国分尼寺などは今でも各地に残る。また、中央からの統治を容易にする為、幹線道路（特に国防上九州・大宰府までの山陽道・西街道は特に重要）が作られ、「駅伝制」も敷かれたという。

法体系は実に詳細・精緻で、今でも日本の統治機構の骨組みとして引き継がれているようだ（省庁の機能、組織、民部＝主計・主税、治部＝姓・戸籍、位階,官位、貴族の淵源、兵部，刑部、大蔵・・ときりがない。律令の施行規則を集大成した９６７年施行の延喜式・50 巻・3300 条、では「神名帳」で２８６１の神様を官幣社、国弊社に区分、格付け・等級を付けた。官幣大社〇〇とか正一位△△など。まあ、古来、地球上の何処でも王の最大の任務は神を祭（祀）ることのようであったから当然か。因みに「延喜式」は後世「堅苦しいことを言う人」をあざけるのに使われたとか。）

しかし、このように王土王民、一君万民（と称する土地公有制）の思想に基づく律令制度は精緻・詳細を極めた頃には、土地を開拓し領有したいという「武士」の台頭（その親玉は源頼朝）によって、およそ３００年余で崩壊した。

江戸時代、日本は大小３００余（新井白石は３３７家と数える）の藩に区分され、支配されたが、この６６国という手掌の上（例えば武蔵国は２１の藩に、相模は４、駿河は７など）で「取ったり付けたり」をやっていたことになる。

＜相模の國の国府は何処か？＞

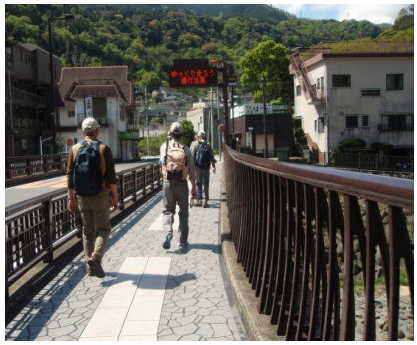
相模の國の国府（例えば武蔵の国府は府中、駿河も府中・現静岡、下総なら現市川・国府台など）が何処に置かれたかは、まだ解っていない（讃岐国もその一つらしい）という。国府の周辺には国分寺があったり総社（神社を集めたもの＝国司はまず国内の神社にお参りするのが勤めだがあっちこっちに散在する神社を回るのは大変というわけで１ケ所に集めた）など、類推するものが色々ありそうだが、相模でははっきり特定出来ないらしい。

一説には国府は「海老名」に置かれ、その後三の宮（伊勢原市)、そして大磯（現在の国府

本郷辺り、大磯には総社＝六所神社もある）へと移転した。
その大磯国府の外港の役割を果たしたのが「国府津」だという。好事家の研究テーマとしてお預けして置くとするか。

[4]第４日　２００９年４月２７日　小田原から箱根まで（３泊４日の連続シリーズ初日）
佐薙・鈴木・高崎・松尾・宮川石和田（距離 16・5Km 時間 6H50ｍ（6H２０ｍ）歩数 33000）
８：００　小田原駅、
８：１５　旧街道・風祭・入生田・三枚橋通過
９：４５～１０：００　早雲寺　須雲川に沿って登る（宮川・快調、問題なし）
１１：１５～：３０　須雲川・河原で昼食。　割り石坂　大沢坂　間の宿・畑宿　西海子坂　甘酒茶屋　権現坂　杉並木　元箱根（国道 1 号との合流点で　松尾・歩行やめ）杉並木　関所跡
１４：５０　さつき荘着

＜三枚橋を渡り愈々箱根の嶮に向かう＞
「箱根の山は天下の嶮・・」、古来、どれ程の人達が夫々の思い、命をかけてこの難所に立ち向かったことであろうか！？いよいよ我々にもその時が来た。
畿内・京都にある**中央政権と東国を隔てる箱根**（古代朝鮮語では「ハコ＝神のいる、ネ＝山」の意とか、アイヌ語ならカムイヌプリ/カムイシリか・余計なこと？）**越え**には古来、**碓氷道（大和時代、上古道）、足柄道（奈良・平安時代、中古道）、湯坂道（鎌倉時代、近古道）、旧東海道（江戸時代、近世道）、とあった。**


三枚橋で早川を渡り
いよいよ旧東海道へ

我々はなんと（現代の国道１号や箱根新道を除けば）**一番新しい古道？を**歩くことになる。上・中・近古道も所々は残っているようだ。足柄道は御殿場から乙女峠か足柄峠を越えて関本、松田に出る。湯坂道と旧東海道は三島から箱根峠を越えて小田原にでる。箱根峠越えの方が前二道に比べて厳しいようだ。
何故か？時代に逆行しているではないか？
湯坂道は鎌倉に近いから、そして旧東海道は江戸・東國の護りの為という。
家康・徳川幕府の性格が良く現れているようだ。（因みに前述の西行さんは足柄道を通った）
三枚橋とは妙な名前だがその由来は３枚の板が渡してあったからだという。日本には３枚と言う名前の場所は他にもある（沼津には三枚橋城、福山、松江、春日部（粕壁）東武日光線の駅など）３枚の石が渡してあってこんな名前になったと言うところもあるらしい。
＜北条早雲と武家政権＞
作家の司馬遼太郎さんは**「この国のかたち」**のなかで「戦国の幕開けは北条早雲から」といわれる。「伊豆一国を支配し、これを“領國化“した。まことに独創的だった。それまでの室町・地頭が、行政なしの徴税のみの存在だったのに対し、領民の面倒の一切を見ると

いう支配の仕方だった。そのかわり「惣」（若衆という武力を含めた集落の結束体）の若衆を領国の戦力として吸い上げ、これを山野に駆って早雲は関八州を支配した。・・早雲は世話焼きと言いたいほどに農民の面倒を良く見た。・・政治の基礎に民政をすえた日本最初の政治家だった。・・　」と。

早雲、瞑すべしか？

早雲の生活信条を記した家訓「早雲寺殿廿一箇条」には「神仏を信ぜよ、**早寝早起きをせよ、・・少しの隙にも書を読め・」**と、ああ耳が痛い。

北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の５代の所謂　後北条は秀吉の命に従わなかった為に「石垣山の一夜城」（実際には８０日、延べ４万人動員したらしい）で語られる戦いで敗れ、１５９０年に、その１００年の幕を閉じた。

静謐、素朴な臨済宗のこの寺には５代の墓が静かに佇んでいる。

＜箱根八里は馬でも越すが・・、なんて言うけれど、命がけの道だ＞

「鵯越え」は源義経の戦術上のまさに乾坤一擲の奇襲の産物だが、この街道は人馬往来・物資の輸送の目的のはずだが「余りにも急峻」だ。女転坂、（一歩間違えば千尋の谷に落ちる）、西海子坂、（サイカチ坂、あまりの急さにどんぐりほどの涙をこぼす）橿木坂（カシノキサカ）、猿滑坂・・、なんと過酷であろうか。（この辺りは「雲助」の活躍の場だったと言われる）

“箱根八里は馬でも越すが・・”
箱根馬子唄の歌碑

加えて、厳しいチェックの関所、とても抜け道など無理だったようだ。

古代・大和政権はこの１，０００年も前に、領地の統治・支配の為、幅広の真っ直ぐな道を作ったと言う。

日本武尊はいざ知らず、坂上田村麻呂などは人馬往来をし易くするための道を通った筈だ。それが、**何と徳川初期の旧箱根道はこれとは逆**。泥んこ道で已む無く箱根笹を敷いていたが、その後毎年の敷き変えは面倒・金もかかるというわけで石ころを敷いた。これが今に残る街道だが、とても凸凹していて馬も人間も命がけだったことが実感される。

先ず国の防衛を第一とするは古来、洋の東西を問わないが、秀吉が（狂気の沙汰だが）朝鮮出兵のため諸国の大名に号令をかけたとき、家康は再三の召集にもただ黙然、“殿はいかがなさるか？！”と問う謀臣・本田正信を叱り付け、「箱根をば誰か守るべき」と言ったという。幕府は陸路のみならず５００石以上の軍船の建造も禁じた。家康～家光など、徳川幕府初期の用心深さは格別で、人々が自由に移動できるようになるのは安定を得た中期以降だ。

＜最古の関所は？関東とは？関所物語いろいろ＞

「国らしきものに“境”が出来る、これが関所の始まり・」、当然に思えるが、では何時か

らか？

神話・伝承時代の話としては、神功皇后にかかわる「和気の関」、出雲風土記には「手間の関」などがあるそうだが、大化の改新の翌年（646 年）、孝徳女帝の出した詔に「初めて都をさだめ、畿内・国司・郡司・**関塞**・斥候・防人・駅馬・傳馬の制度を設置し・・、国郡の境界を設定することとする。」とあるそうだ。「**関塞**」がこれだ。

律令国家としての制度が整えられてきた672～3年にかけて天武天皇の命により「飛鳥の都・飛鳥浄御原宮」の防備のために三つの関が設けられた。

東海道では伊勢・三重の鈴鹿関、東山道では美濃・岐阜の不破関、北陸道では越前・福井の愛発関（あらちのせき）でこれらを古代の三関といい、軍事的防御が目的で、これより東を**「関東」**と呼んだという。飛鳥時代は「東国」、鎌倉時代は箱根の足柄峠・７５９米、信州と上州の境の碓氷峠・９６０米の東の地として**「坂東」**と呼んだが都に住む人々の間では東は文化的辺境にあるとして「東国を蔑視する」習慣、偏見があり、鬼や野蛮な東夷（えびす）がはびこる僻地とする考えが横行していた。

大和政権の頃の関所は服従しない外部勢力・外敵侵入を防ぐ防衛、軍事的機能が主、その後、**住民の他国への移動、浮浪・逃亡防止の警察的機能を持つようになり、この時から関を通過するための許可証が必要となった。**（これは中国の制度に習い**「過書」**と呼んだ）

ところが鎌倉・室町時代になると幕府、武家、荘園主、地方豪族などが交通の要所に関所を設けて**通行人や貨物から通行料を徴収するという経済的機能が主体となった。「関銭」**だ。（伊勢神宮の参宮街道の桑名と日永の間、１８Km にはなんと３００米おきに６０もの関所があり１文ずつ召し上げたとか。このがめつさが「伊勢コジキ」の由来とか？）

これを取っ払ったのは信長、天下統一への手法と自信が見られ、秀吉が引き継ぎ家康が後戻りさせたわけだ。

徳川時代の関所にまつわる物語は様々、興味は尽きない。関所を通過するのに必要な要件は、関所により、対象者により（男女、階級、地位、・・死体にも首にも必要、但し相撲取りと旅芸人は不要などなど）、手形の種類、宛先、期間、発行権限者、・・とまさに千差万別。よくもこんなに複雑（少女と女は定義が違う）なルールを５３ケ所もあったと言う関所はもとより発行権限者やこれを使う人達に徹底したものだと感心させられる。

箱根関所跡

その関所は明治２年に全て廃止された。道路が権力者や寺社などによる私物化に始まり鎌倉・室町・徳川幕府による「私道」から晴れて天下の「公道」になるまでには長い歴史があったのだと教えられる。

（最近ではまた料金を払わないと通れないゲートつきの道路が幅をきかせているが、この関銭＝通行料が一部権力者や役人の飯の種になっているとすれば歴史は愚かにも繰り返すのみか！？）

＜山渓の標準タイムより早い？さつき荘での総括、９１歳のお婆さん＞

吾ら喜寿の足どり、日本橋から小田原までの実績は「22H50M」で「山と渓谷社」の標準タイム「20H45M」に対し１割増し、これからすると箱根の山登りは２割増しとふんでお

くのが無難なところか。
ところが、**小田原～箱根間 16.5Km,山渓の標準 7Hに対して吾らは何故か 6H20M（計算違いではあるまい）でクリアーしてしまったと言う。**
これは一体どうしたことか？！“老いたりとはいえ流石は山登り男・・”なんちゃって。兎に角、五体不満足、肺機能のやや低下ぎみな御仁・・などなどを含む６人全員が無事登りきれたのだから反省会は大いに明るい雰囲気、夕餉の料理も盛り沢山、地酒の瓶も次第に底をつくようになる。座敷と厨房の往復はお婆さん以外誰も現れない。どうやらこの民宿、お婆さん一人で切り盛りしているようだ。
まことに達者なことだが、さて吾らより少々先輩、80 歳前半くらいかと訊ねてみると、なんと **91 歳**だという。これには参った。（ご主人は箱根ホテルのシェフで引退後は技術を生かして民宿でも・・と考え、小ぶりなこの２階建てを準備したが先年他界し、お婆さんが一人で切り盛りしていると言う）
３時間近くの反省会のあと、下膳をじっと待っておられるお婆さんに申し訳ないと箸や皿を「勝手」まで運び始めると、なんとこのお婆さん、「余計なことはしないで」と言わんばかりに独りで手際よく、てきぱきと後片付けをなさる。
眼が覚めた思い、吾らはまだまだ若造、すっかりハッパをかけられ元気を貰ってしまったわい。お婆さん、どうぞお元気で。佐薙よ、いい宿をアレンジしてくれたねえ。

[5]第５日　２００９年４月２８日　箱根から原宿まで（３泊４日の連続シリーズ第２日）
佐薙　鈴木　高崎　松尾　宮川石和田（距離 26・4Km 時間 9H45m(9H00m)歩数 47,000）
７：３０　さつき荘発　向坂の石畳道
８：１０　箱根峠（855 米）甲石坂　石割坂　大枯木坂　小枯木坂　雲助徳利の墓　山中城跡　上長坂（かみなり坂）芭蕉の句碑　下長坂（＊こわめし坂）大時雨、小時雨坂、臼転坂　愛宕坂　今井坂・・（箱根・女坂、只管下る）
１２：１５　三島大社
１２：４０　うなぎの「桜家」・昼食
＊三島のうなぎは何故旨いか
１３：３０　「桜家」発（鈴木帰京、高崎・電車で沼津のホテルへ直行）
三島宿　千貫樋　黄瀬川・雷雨来る
１５：１５　沼津宿　三枚橋　沼津城（三枚橋城）本丸跡
県道 163 号に沿い只管歩く・雷雨上がる
１７：００　松蔭寺・擂鉢松　原宿着（電車で沼津まで２駅戻る）

さつき荘・９１歳のお婆さん
09.04.28 日朝撮影

１７：４５　沼津、ホテル・オオタケ着
１８：３０　夕食　沼津漁港・大衆食堂（夕食後・松尾帰京）

＜雲助徳利の墓＞

「雲助」や「護摩の灰」となると、どうも「たかり」や「ぽったくり」のような芳しからぬ印象が付きまとうが、この**「雲助徳利」の墓は何だか微笑ましい。**

「本名・松谷久四郎、西国大名の指南役を勤めていたが大酒飲みがたたって事件を起こし、国外追放。流れ流れて箱根の山で雲助の仲間に入れてもらって過ごすうち、何時の間にかこの人、腕は立つし読み書きが出来るというので、とうとう雲助仲間の親分格になったが、相変わらずの大酒飲みがたたって死んでしまった。そこで仲間達が少しずつ金を出し合って徳利の浮き彫りをしたこの墓を建てた」というお話。（雲助とは人足たちが定住せず、雲のように周辺をさまようからとか、宿はずれの街道沿いで蜘蛛のように網を張って待ち構えているからとか・・いうが、この墓も当初のところからさまよい歩いて此処へ移ってきたそうだ）

更に彼らの名誉の為に一言。**「雲助の３要件とは、力持ちで、荷造りが上手、そして歌が旨い」と言うことだそうだ。何だか「山男」に似ているではないか！？**

＜霧しぐれ　富士を見ぬ日ぞ　面白き・・芭蕉＞

東海道とその周辺に**芭蕉の句碑**は幾つあるのだろうか？数え方にもよろうが**５３**はあるという。川崎宿の八丁畷駅の手前に最初の句碑「麦の穂を　便りにつかむ　別れかな」があった。

芭蕉（1644～1694）、51 年の生涯では**９８０句**ほどが確認（1066 という説もある）されていると言うが全国（北は奥州・平泉、象潟、西は須磨・明石、伊勢・伊賀、京、近江など）で芭蕉の句碑は一体幾つあるのだろうか？

３桁に及ぶことは疑いない。

一人の俳人の「自然や人生の探求を刻み込んだ」たった１７文字がこれほど日本人の心を捉えているとは？（何だか芭蕉ばかり多すぎる？）

＜霧しぐれ　富士を見ぬ日ぞ　面白き＞
―雲がなければ左後方に富士が見える筈―

この「霧しぐれ・・」の句は芭蕉４１歳、江戸から伊賀上野に帰る途次、時期は秋と言われている。

江戸と伊賀上野、京都、近江などとの往復に木曽路・中仙道、甲州街道も通っているので芭蕉が東海道を通ったのは果たして何回あったか。

41 歳（江戸・東海道・名古屋・伊勢・伊賀上野、京都など、帰路は鈴鹿・桑名・名古屋・中仙道・甲斐＜野ざらし紀行＞）44 歳（江戸・箱根・鳴海・伊賀・伊勢・奈良・大阪・須磨・明石・京都・大津＜笈の小文＞・・帰路は大垣・馬籠・松本・長野・小諸・江戸＜更科紀行＞）51 歳（最後の旅・江戸・小田原・三島・島田・知立・鳴海・桑名・津・伊賀上野・京都・大津・伊賀上野・大阪没）。

その外、２９歳で江戸へ出てきた時、３３歳で（伊賀上野に帰り）江戸に戻った時、48 歳、（奥の細道を終えて）３年ぶり江戸に戻った時、どこを通ったか？（芭蕉にとって東海道は吟行の道ではなかったのかも知れない。因みに神奈川が詠まれたのは７句、静岡が９句に過ぎない。愛知４０、岐阜２７、近江・滋賀６５・・）

それにしても、**芭蕉の１０００ほどの句の中で富士とつく句は６句しか見つからなかった。芭蕉ほど富士を詠まなかった俳人は少ないと言われるそうだ。**小さな命の営み、哀れさ、愛おしさ・・を詠む芭蕉にとっては、秀麗・端然とした富士は大きすぎたのかも知れない。しかし、４４歳、父の３３回忌で伊賀上野へ向かう途次、箱根の辺りで詠んだ

“ひと尾根は　しぐるる雲か　富士の雪”

は古来、富士山を雄大に描ききった名句として讃えられている一句だそうだ。

そして、芭蕉５１歳、最後の上方帰郷の際、箱根を越えた辺りで富士は雨の合間の五月晴れにくっきりと全容を見せたようだ。

“目にかかる　時やことさら　五月富士”。富士と芭蕉の対面の模様を味わいたい。

＜ああ・・こわめし坂、うなぎの「桜家」＞

箱根峠を過ぎれば下りばかり。下りが苦手な松尾も快調、ところが６Km ほど下った、かみなり坂、**こわめし坂**（あまり長い急な登り坂なので背負ったお米が汗と熱でこわめしが出来たと言うのでこの名がついた）の辺りで何故か高崎がまたまた右舷に傾き始め艇速が極端に落ちた。バス停のベンチで特効薬のＲＫ を塗りこむ。丁度１年前、佐薙のキリマンジャロ登頂を祈念して同じ顔ぶれで「函南原生林」を歩き、雲助徳利の墓、山中城跡、を経てこの辺りに来た時、矢張り同じ情況になりバスに逃げ込んだ経緯があった。どうしてだろう？とても調子がよかったのに！

（沼津漁港・大衆食堂での反省会では地酒の勢いに気分上々の宮川あたりから盛んに**「ナンチクさん、何かあの辺りで悪いことをしたんじゃないの？呪われているぞ、お祓いが要るなあ・・、もう一度、今度は登ってみたらどうか？・・」**なんて冷やかされて愉快）

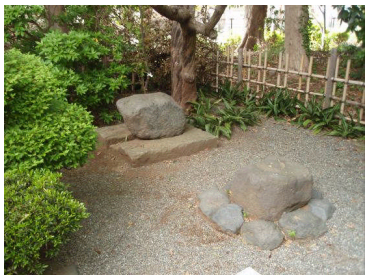
それでも、流石は鶴丸高校のエース、「うなぎの桜家」までは、這ってでも、の根性で見事到着。＊「うなぎ」に満足してか午後の「三島～原」は省略、沼津のホテル直行、賢明。

＜黄瀬川、頼朝・義経対面の地＞

＜黄瀬川・富士は背後の雲の中＞

平家追討の旗を揚げた頼朝の下に奥州平泉から駆けつけた軍事的天才・義経、瞬く間に平家を宇治川、一ノ谷、屋島へと追い、遂に壇ノ浦・幅７００メートルの海峡で海底へ葬ったが、いざ平家を倒してみると今度は律令体制の温存の上にのみ安泰、武家勢力の強大化を嫌う後白河法皇や京都の公家勢力の源氏勢力の分断作戦に引っかかり、

「検非違使」なる律令官位を喜んで頂戴してしまった。
これは頼朝の目指す武家体制とは全く相反するもので、こういう政治感覚の乏しい義経を頼朝は非情にも抹殺することになる。治承４年 10 月（1180)、駿河の黄瀬川で対面してから文治５年閏４月（1189)、頼朝に攻められて奥州・平泉の地で自殺するまでは、たった８年半というが、この間の活躍が後世これほど日本人の魂に響くものを残した武将は少ない。


＜頼朝・義経の対面石＞

太平洋側で唯一北に向かって流れる狩野川に合流して駿河湾に注ぐ黄瀬川の水面を見つめ、その邉に建つ長沢八幡宮境内の頼朝・義経対面石（大・小２つの石が２メートルほど離れてただ黙然としてある）を見るにつけ、思いは８００年の昔に駆られる（鎌倉幕府３代・３０年に満たない命運は頼朝のこの冷酷さと重なる？）

因みに先述の芭蕉はこの義経の奥州を歩きたいとして「奥の細道」の旅に出たと聞く。

＜白隠禅師、擂鉢の松、白隠正宗・・＞

三島からは富士を右手に見て只管歩く。山の中腹に帯状の雲がかかっており、これが黄瀬川を渡るあたりから遠雷となる。（「頭を雲の上に出し・・雷様を下に聴く・・」小学校唱歌を思い出させる。）佐薙ご下命の雨具をつけて,怯まず歩く。新調のＭＥＲＲＥＬＬシューズの透水テストでもあるか？沼津・原は僅か６Ｋｍ、松尾も宮川も元気、（少し弱音でも吐いてくれると此方も助かるのだが？）沼津を過ぎて雨は上る。

松蔭寺の気配が近づく。５００年に一人と言われる・臨済宗中興の名僧・白隠禅師（１６８６～１７６９)、縁の寺だ。予てから一度は！と願ってきた寺、元気が出る。

＜松蔭寺山門・擂鉢の松はこの左側＞

しかし、「禅」というは凡俗にはどうも解らん。「隻手音声・・両手を打ち合わせると音がする、では片手ではどんな音がするか」「狗子仏性・・犬に仏性があるか」。こんな「公安」を限りなく延々と繰り返す。「公安は論理的、知的理解を受け付けない。考えることではなく公安になり切ることを通してのみ知ることが出来る」と言う。昔の人達の深い知性と精神性？にはとてもついて行けない。それよりは「白隠」に因んだ地酒・白隠正宗（高嶋酒造）の銘柄あさりでもした方が我が顔ぶれからして相応しく元気が出そうだ。

［6］ 第６日　２００９年４月２９日　原宿～由比宿（４日連続シリーズの第３日）

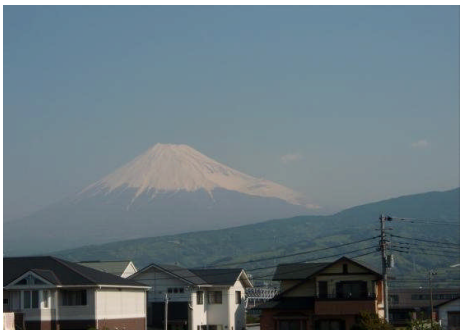
佐薙　高崎　宮川　石和田　（距離 26.７Km 時間 9H00 m（8H15 m）歩数 47,000）

７：２２　原宿発（沼津から電車で２駅）

富士を右に見て県道１６３号を歩く、立園寺、浮島ケ原開鑿、昭和放水路、

増田平四郎翁碑、東田子の浦、名勝左富士、和田川・平家越の碑
１１：３０　吉原宿　吉原市内で昼食（祝日につき飲食店を探すのに一苦労）
１２：１５　吉原発　富士川・渡橋、身延道起点、岩淵小休本陣
１４：１５　新坂橋跨道橋（東名高速跨ぐ）
１５：００　蒲原本陣　広重「夜之雪」の碑
１６：００　由比本陣　正雪紺屋
１６：２２　見晴旅館着　　＊道中、「秋葉山常夜塔」の多さに感心

＜原の宿から吉原へ　富士づくし＞


＜東田子の浦からの富士＞

県道１６３号、富士を右手に見ながら歩く。
素晴らしい光景だ(いざ写真を撮ろうとすると電柱、電線の何と多いことか)。季節により、時刻により、気象により刻々と姿を変える富士、地元の人達でも見飽きないのかも知れない。
芭蕉は３３歳で始めて江戸から伊賀上野に帰った時、**“富士の風　扇に乗せて　江戸土産”**と詠んだ。
富士山を一度も見たことのない地元の人達に富士の話をたんまりと聞かせたのではあるまいか。
吾らは佐薙富士博士のリードで歩いている。従ってしばしば博士から講義や質問を受ける。「記録にある富士の噴火は何回か？」「プレート・テクトニクスって知っているか？」・・ただ、ああそうかそうか、と聞いているだけでは博士も張り合いがなかろうと此方からも質問を発する。「富士に積もった雪が溶けて白糸の滝や柿田川まで流れてくるのに４０年だ、８０年だと諸説あり。そもそもどうしてそれを計測するや？」
博士は青年の如き問題意識で「調べる」となる。（＊８月下旬、富士検定３級の問題にこれが出たとか。正解は後刻）
高崎は今年７７歳を期して頂上を極めるという（＊彼は８月２５日、単独登頂を果たした）
宮川と石和田は学生時代２人で１０月末雪の大沢を頂上まで登ったことを思い出す。
富士にかかわっては話題は尽きない。

＜車のナンバープレートまで「富士山」＞

車のナンバープレート、「沼津」に混じって「富士山」というプレートがお目見えした。世界遺産を目指しての一連の動きか。排水溝の蓋を踏み外さないように気をつけながらきょろきょろと車の番号に目をこらす。まだまだちらほらだが７～８台目に何んと「富士山　３７－７６」なるプレートを見つけた。軽自動車だった。(この車の御仁は富士に入れ込んでいるのかも知れない）これを見つけてからは、もう車のナンバーを探しながら歩くのはおしまい。所謂「ご当地検定」は大流行だがこの静岡、山梨両県の商工会、新聞社などが主催している「富士検定」は大人気のようだ。何しろ日本の富士山なんだから。

＜街道は寺と社（やしろ）と常夜燈・・四郎詠める＞

大きな森が見えてくるとそこは大抵、神社だ。山にも森にも岩にも木にも神は宿る。古来

の素朴な信仰だ。
かって日本には３０万の神社（１つの部落に１つの神社）があったという。現在神社庁に登録されているのは８万社（寺は 77,000）だそうだ。
そこへ 550 年ごろ仏教が渡ってきた。神と仏の融和・攻めぎ合いは日本の文明・精神・民俗・生活・・生き様・全ての根底を形成した。(神仏習合、本地垂迹・・などまた後で触れる機会があろうか)
大きな門構え、奥まった建物は寺院だ。仏に帰依した往時の民衆は自分の暮らし、住まいは粗末でも寄進をして仏の住まいは立派であれと願ったのか。(夫々が行く来世こそ、と旨いこと教導したせいもある)
街道の両側にはこうした寺、神社、そして石に刻まれた芭蕉だ、義経だ、曾我兄弟だ・・のモニュメントばかり、万葉の歌人・山部赤人「田子の浦ゆ　うち出でてみれば　真白にそ　富士の高嶺に　雪はふりける」もその一つだ。そこへ、珍しく「増田平四郎翁の碑」といういわば近世の頌徳碑を見つけて何だか、ほっとした。余りにも古いものばかりが目に付きすぎたからだ。
歩いてきた１６３号の山側は、かっては「浮島ケ原」という沼地であり洪水の被害もしばしばだった。平家の「鳥の羽音・・」もこの辺り。それを一大土木事業を起こして干拓、美田に変えた篤志家が「増田平四郎」なのだ。
その後の人達には石に刻まれる程の功績はないのか？
彼らを越えられないのか？それとも、碑なんてのは、ず～っと後世の人達が建てるものなのか。いやいや、広々とした田畑、滔々と流れる昭和放水路そのものがモニュメントなのだろう。

＜富士川の舟運、・・＞

＜富士川・右背後に富士山・雲の中＞

日本３大急流の一つ（他に最上川、球磨川）、釜無川、笛吹川を集めて駿河湾に注ぐ、全長１２８Km。東海道中膝栗毛（十返舎一九 1765～1831、駿府・静岡生れ・滑稽本の作者）の弥次郎兵衛と喜多八、道端の小僧を相手に菓子代を誤魔化したら餅代で仇を取られたりの珍道中、愈々富士川にやって来て、珍しく、素直に「ゆく水は　矢をいるごとく　岩角に　あたるをいとふ　ふじ川の舟」と詠んでいる。
佐藤・富士山博士の質問に答えるべく富士の生成過程を少し調べてみると「富士山の原型が出現したのは2～300 万年前でそれ以前は海の底。500 万年前の富士山周辺は東に丹沢山地、西には天子山地と赤石山地があり、この両山地の間に「富士川海峡」があって甲府盆地までは海だった・・」とある。道理で・・、急流の淵源とでもしておこうか？
古来、甲斐と駿河を結ぶ道は幾つかあったが一番古い道は「若彦路」（詳細不詳、富士川のやや東、実相寺、浅間神社あたりか？）で、「日本武尊」が東海道から甲斐に入ったと言う

もの。富士川に沿った「河内路・所謂・みのぶみち」（富士川の東西両岸に細い、険しい道があり、1274 年、身延に入った日蓮もこの道を通り、この道の険しさを「道は縄の如く細く、木は草の如く茂し・・、峯に登れば日月をいただくが如し、谷に下れば穴に入るが如し・・」とその嶮しさ記している）も、大切な人や物資、輸送上のルートであった。
そこへ、徳川家康は 1607 年、京都の豪商・**角倉了以**（1554～1614、朱印船貿易で大いに儲け前年には大堰川・保津川下流の開鑿に成功）に「富士川を開鑿し舟が航行出来るようにせよ」と命じた。
了以は高瀬舟（岡山藩で使っていた底の浅い舟）に着目、大変な難工事（悪流と岩石の排除、根深岩は岩上で火を炊いて熱し、そこへ冷水をぶっ掛けて亀裂を生じさせてから砕き割る、櫓を組んで頭上にあげ先のとがった鉄棒を据えて、一気に落下させて粉砕するなど）を１年もかからずにやり遂げた。これによって「下げ米、上げ塩」、と言われるように両地域の物資の運搬は格段に増大・迅速化された。（富士川河口の岩淵から上流・鰍沢間 18 里・７２Km を１・８トンもの物資を積んで、下りはほぼ半日、登りは４～５日で行き来出来るようになった）江戸中期・最盛期には上り１００艘、下り１００艘、船の総数８００、船頭２０００人と言われ、交通運輸の革命的飛躍だったと言われている。
（こういう大事業と芭蕉の俳句の碑とつい比べてしまいたくなる？！）
＜富士川を上る舟は人力で曳いた？・・＞
さてさて、この富士川の急流を、エンジンのない舟はどう遡ったのか？？
船会社で令名を馳せた高崎はこれに答えるに最適の御仁だ。
彼は大船会社の友人に問い合わせ、「馬で曳いたのではないか？」と言う答えを齎した。
しかし、どうも気になる。
石和田が閑に任せてあさった限りでは「**富士川の上りには馬は使われず、人力（船頭と呼んだが）で川の両岸から綱で曳いたようだ。ヨーロッパでは馬で曳き、そのためのフットパスと呼ばれる道も川の両側に整備されていたようだが、日本では富士川に限らず何処にも馬を使ったという記録・痕跡がないようだ。**日本の地形によるものではないか。
東武亀戸線に「曳舟」という駅がある。何だか懐かしく、情景が思い浮かべられる。
（本件は佐薙博士が引き続き調べる）
＜桜えび談義、人間との出会い・喜んでくれるか・・＞
訪れる土地々々の名物を味わうのは旅の楽しみの一つだ。（小生には足を引きずってでも・・ほどの意欲はないが、話の種に・・と言う気持はある）
「吉原」辺りから「桜えび」の看板がちらほらと目に付くようになってきた。やっと探し当てた吉原での「昼食や」ではとうとう「桜えびの何とやら」（そば、丼）にありついた。

＜桜えびの出漁・夕方・２艘でペア＞
－見晴旅館・２階の窓から－

今夜、由比に着けば名産をたらふく！・・と、かなりな“インセンテイブ”。素直なものだ。

さて、「見晴旅館」では「桜えび・各種」、地酒とのコンビで話は好き勝手に飛び回る？
“駿河湾のこの辺りだけから、どうしてこんなに大量の、何時頃から・・”というテーマ。
“どうやら偶然の産物のようだ”。　　　　　　　＜以下は受け売り＞。
「１８８４年１２月、望月平七と渡辺忠兵衛が鯵の夜曳舟で富士川尻の沖合いに出ていざ漁をしようと網をおろしたところ、網を浮かせておく浮樽（カンタ）を忘れていることに気づいた。仕方なくカンタなしに網をおろし引き上げると、なんと１石以上の「桜えび」がとれた。
網が丁度「桜えび」のいる７０～８０メートルの深さまで下がってしまったと言う偶然がこれを齎した」（夜になるとこの深さまで浮上してくるらしい、“何故この辺りだけに？”は解けない）
“それにしても小さな「桜えび」を毎年何百トンも捕獲して・・！たまたま網にかかってしまい運が悪かったねえ・・”と食べる側からも虫のいい心配が生れる。
「体長４センチほどの、この桜色のえびはメスが夏 150 メートル位の海中に 1,500～2,000 粒の卵を産み１月頃には４センチほどに成長、その年の夏に卵を産み、一生を終わる。
寿命は１年」、終わる命を我々にくれているのか、ああ良かった。じゃあ遠慮なく頂くか。

［7］　２００９年４月３０日　由比から府中・静岡まで（３泊４日の連続シリーズ第４日）
　佐薙　高崎　宮川　石和田　　（距離 23.7Km 時間 7 H50 m(6H40 m)歩数 33,000）
　７：００　見晴旅館発　寺尾の旧家（小池邸）倉沢間の宿本陣跡、山岡鉄舟縁りの藤屋（望嶽亭）薩埵地蔵道標　急斜面の夏みかん畑
　８：００　薩埵峠　展望台　急斜面を下る　興津川　身延山道道標
　９：００　興津宿東・西本陣址
１０：００～：１５　清見寺（五百羅漢、臥龍梅）　坐漁荘跡　江尻宿　久能の追分
１２：００～４５　草薙・昼食　草薙神社鳥居
１４：００　府中・静岡着・反省会（石和田欠、普通列車で 4 日間歩いた情景を辿りつつ帰宅）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
［7－1］　２００９年６月２７日　蒲原、由比、薩埵峠　興津　まで　１３Km
鈴木、松尾　補講（歩行）日帰り
蒲原、由比本陣、由井正雪生家、広重美術館、食堂あおぞら、寺尾村小池邸、望嶽亭　薩埵峠、展望台、興津駅
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

＜絶景・難所の薩埵峠＞
「親知らず、子知らず」岩山が海にせりだし、他の人の事など、とても構ってはいられないという東海道でも有数の難所（下道、その後中道、上道が出来る)、駿河湾の向こうに富士を望む絶景、そして「薩埵」という名称(「般若心経」の「・・以無所得故　菩提薩埵・・」)

にも惹かれ、心待ちしていたものだ。
急傾斜の僅かな地面に夏みかんがへばり付くように植えられ丁度色よく実っている風景（我が田舎のそれと似ている）を味わいながら４０分ほどで峠の最高点につく。
濃紺に伸びる伊豆半島に抱かれるような駿河湾、その左後方には富士が見えるはずだが、そう簡単に容姿を見せてくれないようだ。最高点にある展望台で「広重」の境地に近づこうとする。
（高崎は７～８メートルの展望台への登攀？をスキップ、超絶景を逸した？）

＜薩埵峠・左後方の富士をイメージ＞

さて、「薩埵」の名前は鎌倉時代に中古の地蔵菩薩がこの浜の漁夫の網にかかったことからきているという（菩薩とは菩提薩埵 Bodhisattva、パーリー語、悟りを求める人、求道者）丁度浅草の観音様が推古天皇３６年（６２８）に宮戸川（隅田川）で漁をしていた檜前浜成（ひのくまのはまなり）・竹成（たけなり）兄弟の網にかかった高さ１寸８分（５・５Cm）の「金の仏像」を、土師中知（はじのなかとも）と３人でお祀りしたという話と似ている。浅草寺の仏像は「秘仏」で誰も見ることは出来ない、「薩埵峠」の仏像は今、東勝院にあるというが・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

＊6月２７日、梅雨の合間に、鈴木、松尾両君は「薩埵峠からの眺望、桜えびの賞味」を目的として日帰り補講（歩行）を受講。

蒲原―由井本陣―桜えび賞味―薩埵峠―興津　１３Km を丁寧にカバーした。「桜えび丼」は期待通りだったが薩埵峠からの眺望は本隊の時と似たようなものだったようだ。絶景とはいつでも容易く手に入るものではないところに値打ちがあるようだ。

＜薩埵・鈴木・松尾＞　　＊松尾から写真付きの報告が学長宛出されており、これにより単位の認定は受けるられるだろう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

＜山岡鉄舟、望嶽亭当主・七郎平、清水次郎長＞

「強きをくじき弱きを助ける」ことを任侠というそうだ。(今の世の、弱肉強食とは真反対)

江戸時代の親分は大抵は義侠、単なる博徒だけではなかったようだ。なかでも次郎長親分は別格のような気がする。(国定忠治、飯岡の助五郎、笹川の繁蔵等とは比較にならない)
＊但し現在、清水一家六代目が襲名したとかでやや物騒な話、次郎長親分を見習うべし。
親分は駿府（松崎屋）での「西郷・山岡会談を成立させた陰の大功労者」だとつくづく思う。次郎長親分（本名・山本長五郎）は勿論清水港の生まれだが少年時代（9～１５歳）由比の親戚に預けられ、望嶽亭の１９代当主松永嘉七によく面倒を見てもらったという。
次郎長の前半生はヤクザ暮らし、都田一家（都鳥）、黒駒の勝蔵との博徒抗争史上かってな

い壮絶な争い、伊勢の神戸長吉と穴太徳との争い（荒神山の喧嘩）への介入、これらに勝って遂に駿河、三河、伊勢に及ぶ街道一の大親分になった。
維新後はなんと実業家になって清水港の改修工事、富士山麓開墾、静岡茶を横浜に運ぶ蒸気船会社の設立など、前半生とは様変わり。明治２６年７３歳で没したが、その生涯は義侠、気骨、気宇壮大な理想に貫かれていたように思える。**（清水港に立つ次郎長親分の胸像を見ると丁度富士川を開鑿した角倉了以、東大寺を建立した良弁などと似ている。難事業を成し遂げた人共通の強い意志の持ち主の表情だ）**
駿府逗留の西郷に直談判すべく（幕府側捕虜？薩摩の益満休之助が同行していたので、官軍の見張りも突破できたが箱根で体調を崩しダウンした為）単身薩埵峠まで来た時官軍に誰何され、命からがら峠を逃げ下る山岡を、望嶽亭２０代当主・七郎平・妻おてふとの連携でこれを救い、駿府まで護送したのは次郎長だったのだ。
（少々長くなるが話はこうだ）

＜藤屋・望嶽亭・維新ドラマの舞台＞

１８６８年3月７日夜、薩埵峠（中道のようだ）急坂の途中で官軍に誰何され、到底突破は無理と逃げ戻り、望嶽亭の木戸にすがる。「大事を成し遂げるためには此処で敵の弾に当たって死ぬわけにはゆかない。是非とも匿って逃がして下さい」と助を求める。
事情を察知した当主・七郎平は「事の次第良く分かりました。この七郎平、命に代えてもお匿いお逃がし致します」と直ちに「蔵座敷」に匿い、漁師の身なりに変装させ、清水の次郎長に手紙を書き、蔵座敷左隅、畳半畳の置き床下の隠し階段から浜に出て、待たせておいた腕利きの抱え漁師、栄兵衛に懸命に漕がせて清水港の次郎長のもとへ送り届けた。
間もなく官軍がやってきたが後の祭りであった。
義侠の男、世話になった望嶽亭当主からの手紙を見た親分、「倉沢の坂口（藤屋の屋号）からの頼みとありゃこの次郎長、命にかけても守ってやらあ・・」と早速に子分どもを集め侍装束を調え３月９日、自ら警護役、案内役を、子分達に周囲を固めさせ、警備の厳しい東海道をさけ、久能道から駿府に入り駿府伝馬町の桐油屋松崎源兵衛方へ到着した。
次郎長達は身分を憚り１町ほど離れた道端に侍して、会談の推移を見守っていたという。

＊　西郷は山岡の無私、決死の意気に打たれて江戸城開城の基本条件に合意したし、**「金も要らぬ、名誉もいらぬ、命もいらぬ人は始末に困るが、そのような人でなければ天下の偉業は成し遂げられない」と感慨を語っている。**
＊　次郎長は「函館を目指す幕臣たちを乗せた咸臨丸が難破船同然の姿で清水港に入り、新政府軍側から砲撃を受け、逃げ遅れた７人が惨殺されて、遺体は投棄されたまま海中に浮遊しているのを見て、新政府からの“賊軍に加担するものは断罪に処する”、との厳重な布告にも拘わらず、“死ねば仏だ、仏に官軍も賊軍もあるものか”と子分を集め夜

陰に乗じて引き上げ手厚く葬った。**鉄舟は眼を洗われるほど感動し、“彼は単なる博打うちの親分ではない。あるのは人間として正しいか、正しくないか、正か邪かだけである”と，心底から感銘し、両者の交わりは鉄舟の亡くなる明治２１まで続いた。**

＊　山岡鉄舟は明治１６年、上野・谷中に徳川幕末、明治維新の際、国事に殉じた人々の菩提を弔う為に「全生庵」を建立した。全ての命が生かされるという願いであろうか。

「全生庵殿鉄舟高歩大居士」は、それ程広くない墓地の一番奥に眠っている。

歴史に「もしも・・」はないというが、まさに誰にも書けないドラマ、このような巡りあわせとは、神の作品と言う以外にないのか。

＜清見寺、臨済宗妙心寺派の古刹＞

＜清見寺・左奥に五百羅漢＞

「世に名も高き興津鯛　鐘の響く清見寺　清水につづく江尻より　行けば程なき久能山」

これは鉄道唱歌の１９番目の歌詞だ。

兎に角、白鳳年間（672～86）に清見関が設けられ、その守護として仏堂が建立されたのが始まりと言うから古い。その後足利、今川などの帰依を受け家康が今川の人質の頃、勉強したという縁もあってか徳川の庇護厚く・・と東海の巨刹には話題は豊富だ。

佐薙は五百羅漢に随分魅かれた（亡き父に似た羅漢を発見）ようだったが、小生は“鐘の音響く清見寺・・”というフレーズに魅かれる。鐘の響きには **“煩悩を去れ”、“心を清めろ”**・・聞く人によって様々なものがあるのだろう。心の肌が揺さぶられるのは確かだ。

境内には先述の清水次郎長が建立した「咸臨丸乗組員殉難の碑」もある。

＜府中・静岡・江川町・西郷・山岡会談の場近く、着＞

４人、元気で４日シリーズ、小田原宿から府中宿まで１０宿、８２Km 余を無事歩き通した。

ここまで武蔵、相模、伊豆、駿河の４国、１９宿、１７４Km をカバー、漸く３分の１、まあまあ、“今、旧東海道を歩いているんですよ”と人にも言えそうだ。

３人は「府中」で楽しみの反省会、小生は各駅停車で歩き来し街道を振り返りつつ、帰宅。

＜左から、石和田、宮川、高崎、佐薙＞

・・

・　５月２３日、サブ･リーダーの宮川君に異変、心筋梗塞？で府中の榊原記念病院へ入院、目下 ICU にいるという。詳細は分からないが榊原なら医療施設としてはこれ以上はない。あとは医療技術と宮川の生命力、そして幸運に期待する他なかろう。　・

・・

［8］ ２００９年５月 25 日　府中から藤枝まで（３泊４日連続シリーズ第２節第１日）

佐薙、鈴木、高崎、石和田　（距離 20,1Km　時間 7H15m（6H30m ）歩数 36,000）

＜６：４９津田沼、８：０３東京発　９：０６静岡着＞

９：１０　静岡駅前発　西郷・山岡会見之史跡　安部川の義夫の碑　安部川橋

１１：０５～４０　丸子宿　丁子屋（とろろ汁）丸子橋　丸子橋御高札場　蔦の細道東入り口　十団子の慶龍寺　御羽織屋　　宇津ノ谷峠地蔵堂跡　坂ノ下の地蔵堂（蔦の細道西出口）

１４：５０　岡部宿　西行・西住の笠懸の松

１６：３０　藤枝着（富岡屋ホテル）

＊鈴木はホテルのお嬢さんに藤枝駅（徒歩２０分）まで車で送ってもらい帰宅

＜丁子屋、・・丸子の宿のとろろ汁＞

今回の目玉の一つ、「丁子屋のとろろ汁」、開店が１１時と言うので静岡発の時間をわざわざこれに合わせたのだ。丁子屋は創業慶長元年（1596 年）と言うから、これは古い。４００年も前からだ。

宇津ノ谷峠を越えてきた人、これから峠に向かう人、とろろ汁は元気の基、案内のパンフレットによれば「とろろ（自然薯）にはデイオスゲニンが含まれており、ヒトの体内で男性や女性の性ホルモンに変わる基本的な化学物質。だからどっちにも効く」とある。

＜丁子屋・広重の絵とそっくり＞

―芭蕉の句は右側の石に、

この建物は約 300 年とかー

“梅若菜　丸子の宿の　とろろ汁”　（芭蕉）

この句は元禄４年、芭蕉４８歳の春、大津の門人乙州（おとくに）が江戸へ旅立つにあたり、近江にいて丸子の春を思い浮かべながら、餞（はなむけ）として詠んだものだそうだ。

＜宇津ノ谷峠・仏の力を＞

＜峠の中腹から見下ろす　宇津ノ谷の集落＞

とろろ汁で満足のあと、丸子橋を渡り、十数個も掲げられた高札場の「定」を読み、徳川幕府の通達の徹底振りに感心しながら細い街道を峠を目指す。

山あいの道の両側、かなりな勾配にほぼ１列だけ古い家が張り付いている。軒先に佇んでいた一人の老婆に尋ねた。“先祖代々此方で？”、“ああず～とだね”と。何代遡るのか？見当もつかない。秀吉の頃からか？いやもっともっと以前、在原業平の平安の昔からか？

家の前の細い溝を清流が流れ下っていた。何百年もこうなのだろうか。峠の中ほどから宇津ノ谷の集落を見下ろす。これもまた何百年と変わらぬ風景かも知れない。

峠道は愈々木立のなかに入った。勾配はそれ程でもないが矢張り薄暗く、追いはぎや盗賊、幽霊が出ると言われれば背筋がぞくぞくする情景ではある。
峠の頂点の少し手前に「宇津ノ谷地蔵堂跡」とあり、苔むした土台石だけが残っていた。峠を越える人達を見守ってきたのであろう。旅人は地蔵尊に願いをかけたに違いない。
此処には「・・ある時、人肉の味を覚えた寺の小僧が食人鬼となり峠で旅人を襲うようになって困っていたところへ旅の僧が現れて鬼を小さな石に変身させ十粒の玉＜名物の十団子の由来だが＞に砕いて飲み込んでしまった。旅の僧は実は地蔵の化身であったという伝説」が伝わっている。
「地蔵菩薩は仏の中でも一番人間に近く、生者も死者も救う仏だと言う。また古来の道祖神とも習合し地獄との境に立って人々を導いている・・」と哲学者の梅原猛さんはいう。
確かに街道の脇には此処までででも沢山のお地蔵様を拝んできた。脚気地蔵、子安地蔵、子授地蔵、延命地蔵、六地蔵などなどだ。人々の願いそのままのお名前である。
また、お地蔵さんは“村のはずれのお地蔵さんは・・“のように、少し離れたところに立っておられる。これは「外部からの悪霊の侵入を防ぐ道祖神・塞の神と習合した」からと言う説がある。

＜箱根・女坂・臼ころげ坂付近＞
撮松　石　宮　高　鈴　佐
影尾　和　川　崎　木　薙
田
―09・04・26 撮影―

六地蔵には衆生の苦患（くげん）を救うという六種の地蔵が居られる。所謂六道だ。地獄道を教化する檀陀（だんだ）、**餓鬼道**の宝珠、**畜生道**の宝印、**阿修羅**の持地、**人間道**の除蓋障、そして**天道**の日光ということだが、小生などには何方が何方かよくわからない。ただ丸い頭に赤い頭巾、（時には涎掛け）で村はずれに雨に濡れながらでも静かに立っておられる姿は親しみ易く温かみがあり何となくユーモラスだ。

庶民の心の中に深く入り込んだ仏と言えるだろ

宇津ノ谷峠には今、明治、昭和、昭和第１、平成と４っのトンネルが通っている。立ちはだかる山塊ではあったのだ。
それだけに今、この山道を、また在原業平の名で残る「蔦の細道」を懐かしむ人々も多い。

＜富岡屋ホテルのグッドウイル、宮川の症状？＞

＜ホテルの狭いロビーで＞

日帰りの鈴木はホテルのお嬢さんに藤枝駅まで送ってもらった。歩けば２０～２５分はかかるらしい。
佐薙が苦労して選んだホテルは箱根と言い藤枝と言いホスピタリテイ抜群。
旧街道と鉄路がほぼ併走しているところもあれば離れているところもある。地形による所もあっただろうが「新しい文明」に対する古老や有力者の受け入れ方にも理由があったろう。（藤枝は地形からか？）

明治の中ごろ突如として、火を炊いて黒煙を吐き、火の粉を撒き散らし（中国では汽車のことをそのものずばり「火車」という）ながら籠や馬より格段に早く動くものは怪物と思えたかも知れず、なるべくこれを避けようとしたことは理解できる。
松尾がそろそろ草臥れた頃を見計らって（午後２時～3 時頃）様子見の電話で激励してくれた。加えて宮川の状態も。まだ ICU に入ったまま、どんな処置を受けているかは定かでない。

＊　「出発の前に起こったことを今や幸運と思い、早期回復を祈るしかない」と宮川の分まで地酒を味わった友情に厚い仲間達がいた。

［9］　２００９年５月２６日　藤枝宿～掛川宿　（３泊４日連続シリーズ第２節第２日）

佐薙　高崎　石和田　　（距離 26,0Km　時間 9H30 m（8H30m）歩数 48,000）

６：００　ホテル発　瀬戸川・勝草橋　田中藩領牓示石蹟　上青島松並木　大津谷川
８：１０　島田宿　島田宿大井川川越遺跡　川会所　大井川橋（１０２６米）
９：００　金谷宿東の入口　金谷宿本陣　菊川坂（石畳道）　牧の原茶園　間の宿菊川
　　小夜の中山峠　久延寺・夜泣石・西行の歌碑　茶園を下る
１３：００　日坂宿　飲食店なし（「道の駅掛川」で昼食）松尾と電話（彼の想定より早いペース）・宮川の様子はまだ明らかならず
１５：３０　掛川宿　掛川ターミナルホテル着

＜大井川の渡し、物語りの数々＞

（箱根と並ぶ）、天下の難所・大井川の川越しは 1696 年に正式の制度が置かれ、その管理運営が行われたが「島田宿大井川川越遺跡」に一連の関係施設が解り易く展示・説明されている。
川会所は賃銭の決定、渡渉順位の割り振り、人足の配置などを行う管理運営センターで 350～650 の人足は 10 組に分けられ通常は２組が当番、しかし、他のものもいざと言う時に備えて「番宿」というそれぞれの組の溜り場に詰めていた。
褌、鉢巻姿の元気のいい男たちの威勢のいい声が聞こえて来そうだ。

＜大井川堤・大井川橋（全長 1026 米）を望む＞　　―高崎・佐薙―

時代劇では川留めをのばして懐を肥やす悪代官はお馴染みだが、概して川越人足等の統制は良く取れていて人足達は強い義理と絆で結ばれていたという。
島田側の人足は金谷側に人を渡したあとは必ず空身で戻ってきた。金谷側の人足も同じ。
多分、（箱根の雲助も同じ）、古の庶民の心は総じて義と誇り、清らかであったと評したい。

＜鳧と虫とりナデシコ・・鳥・花・風・月か＞

藤枝から４Km ばかり、上青島松並木あたり、左側の田植えがすんだばかりの水田の向こう、スレートの倉庫？の屋根に一際けたたましく鳴く数羽の鳥、早速、佐薙が首にぶら下げた双眼鏡で観察、どうやら「ケリ・鳧」という鳥ではないか、名古屋の干潟で一度だけ見たことがあると言う。流石はアメリカでバーデイングに走り回った彼らしい。

小生などは初めて聞く名前、漢字のケリなど見当もつかなかった。

＊チドリ科の鳥で、ハトくらいの大きさ、名は鳴き声から、という。大きく元気な鳴き声だった。

大井川、１Km を越す長い長い歩道橋を歩いていると、白い河原に赤い花が一面に咲いている。これまた初めての光景、佐薙が双眼鏡で何回も見るが特定できない。

それより当方などは果てしなく続く歩道橋、まさに弥次・喜多の「蓮台に　のりしはけつく地獄にて　おりたところがほんの極楽」に似た心境、渡りきるのに１５～６分かかった。

＊この橋を朝夕の散歩道にしている人は贅沢と言うべきか？

この花のこと、金谷宿の菊川坂（石畳道）の入り口で植木屋風の御仁に出会い、聞いたところ、「この辺では、河原ナデシコとも虫とりナデシコとも言うね」という話だった。

佐薙が後刻調べ、これは「虫とりナデシコ」だと確認した。開花時期の違いからの判定だ。

＜大茶園、小夜の中山峠、久延寺、夜泣き石、＞

金谷宿を過ぎ、復元された金谷坂・石畳道、菊川坂・石畳道を登り、牧之原台地につく。綺麗に刈り込まれた大茶園が広がる。鎌倉初期、栄西禅師が養生の仙薬、延命の妙術として中国から持ち帰り、京都・栂尾山・高山寺に植えた。これが宇治その他の地に広まり、日本の食文化に切っても切れないものとなり、幕末には輸出品までになったのだが、この

＜久延寺・夜泣き石＞

5000 ヘクタールに及ぶ大茶園は大政奉還後、徳川慶喜を奉じて駿府についてきた旧幕臣達があっけなく職を失い、また川渡し廃止によって仕事がなくなった大井川・川越人足たちを救済する為に新番組隊長・中条景昭が旗を振り懸命に取り組んだ成果である。まさに快挙と言うべきであろう。

街道は一度急坂を下り、間の宿・菊川につく。

これから、いよいよ「小夜の中山峠」が始まる。

残念ながら佐薙と吾らの距離は若干開いてしまった。

＊「小夜」とは「塞・さい・さえぎる」の意で「中山」とは「境界」を示す言葉だという。小夜の中山は悪霊をさえぎる塞の神が宿った峠ということらしい。先述の境に立つお地蔵様の話と重なってしまうが。

峠の頂上の久延寺には有名な夜泣石や「家康接待茶屋跡」がある。（＊大仰な話だが掛川城主・山内一豊が関が原に向かう家康を接待したのだという。一豊は関が原の功で、掛川４～５万石の小名から西軍に加担した土佐の長宗我部盛親から召し上げた土佐２４万石に封ぜられた。ところが一豊は尾張人であり、土佐に入るに当たって、京、大阪辺りの浪人どもを徴募して乗り込んだ。所謂進駐軍だ。これが土着の土佐人との間に３００年に及ぶ潜

在的な抗争の基を作り，坂本竜馬を生み、倒幕の引き金を引くことになるとは歴史の皮肉と言うものだろうか。）

西行の歌碑（年たけて・・）を眺め、両側に広がる茶畑を見ながら只管下る。風力発電の小型のような扇風機が沢山立っている。霜よけだそうだ。道の左側には 100～200 米ごとに歌碑が建てられている。古くから歌に詠まれた「小夜の中山」、万葉の歌もあるようだが一々確認しながらという訳にも行かない。漸く日坂の宿場に着く。そして掛川。

［10］　２００９年５月２７日　掛川から浜松（３泊４日連続シリーズ第２節第３日）

佐薙　高崎　石和田　（距離 31,7Km　時間 10H00(8 H20 m）　歩数 51,800）

５：００　掛川ターミナルホテル発　秋葉山神社道道標・秋葉山遥拝所　東海道松並木
富士浅間宮赤鳥居　遠州三山（油山寺、可睡斎、法多山尊永寺）道標

７：３０　袋井宿（ど真ん中・２７番目の宿）ど真ん中茶屋・休憩　古戦場木原畷（信玄・家康衝突）太田川

９：５５　見付宿着　旧見付小学校・休憩　姫街道分岐点　磐田駅・中泉村

１１：１０～磐田市豊田町・レストランで昼食　天竜川（新天竜川橋を渡る）　六所神社
浜松アリーナ　馬込川・馬込橋　超高層ビル目安

１４：５７　浜松宿・辻梅新館着　八百徳本店夕食（うなぎ）

＜掛川・袋井・中泉・・＞

＜東海道・ど真ん中・袋井宿・お休み所＞

再び「鉄道唱歌」の登場、ボケ防止に６６番（新橋から神戸まで）まで登りでも下りでも暗記して口ずさむ。そして土地や駅名、風景、物語りなどが織り込まれた歌詞は今回の街道歩きにも大分参考になって来た。

この辺りは「掛川・袋井・中泉　いつしかあとに　早なりて　さかまき来る天竜の　川瀬の波に雪ぞちる」（２５番）と詠まれている。

次は、「この水上にありと聞く諏訪の湖水の冬景色　雪と氷の架け橋を渡るは神か里人か」（幻想的だなあ）と続くのだが、現実は掛川、袋井と過ぎ間もなく天竜川というのに中泉という地名が出てこない？。

どうやら、「中泉」はサッカーで有名な「磐田」に変わって、「中泉」はローカルの名前で残っていることが分かった。

ところで**「鉄道」は、明治５年（1872年）新橋―横浜間に開通してから、国の発展・近代化を象徴するように日本全国に広まっていき、大和田建樹作詞、多　梅稚作曲**（おおのうめわか）の**この７・５・７・５・７・５・７・５の「鉄道唱歌」は沿線の地理や歴史、民話や伝説、名産品の紹介を織り込んで曲のテンポが良く旅情がそそられるということで多くの人々に広く歌われるようになった。**

＊　他に田村虎蔵、納所辨次郎、吉田新太作曲があるが結局は多梅稚のものが生き残った。**新橋から神戸まで東海道鉄道が完成したのは明治２２年**、それを讃えるようにこの鉄道唱歌第１編・東海道編（６６番）が出来たのは**明治３３年（1900）**、山陽・九州編（６８番）奥州・磐城編（６４番）　北陸編（７２番）関西・参宮・南海編（６４番）と、どんどん広がり、これだけでなんと**３３４番**までもある。

この他にも大和田建樹の作詞は国の隆昌・発展と共に北海道唱歌南の巻、同北の巻、更には「満韓鉄道唱歌」などなどに及ぶ。

こうなるともう暗記挑戦などは諦め、せめて夫々の初めと終りくらいを目標とするしかなくなる。

＊因みに満韓鉄道唱歌下関～平壌～奉天～大連６０番までの１番と２５番（平壌・ピョンヤン）は

①汽笛の響き勇ましく　馬関を後に漕ぎ出でて　蹴破る荒波百海里　鶏林八道いづかたぞ

㉕京城隈なく一覧し　重ねて乗り込む京義線　駅駅すぎて大同江　渡ればかなたは平壌府

２０１０年は朝鮮併合１００年になるそうだ。松尾よ若き日の故郷、平壌！如何に？

＜天竜川・暴れ川・金原明善＞

＜新天竜川橋歩道・左天竜川橋
右新天竜川橋（下り・上り）＞

―高崎！右傾斜し始めたぞー

信濃の諏訪湖・標高 759 米、八ケ岳に発する宮川等の水を集めて遠州灘に注ぐ全長２１３Kmの天竜川、これも急流、暴れ川としても有名だ。十返舎一九は「茶化す」のが得意の弥次･喜多に、**「水上は雲より出でて鱗ほどなみのさかまく天竜の川」**と言わしめている。思い出す。**「君見ずや　黄河の水　天上より来るを　奔流海に到りて　またかえらず・・」、李白**の壮大な漢詩とは比すべくもないが、「水上は雲より出でて」と「天上より来るを」の、どちらにも，「知るべくもなく遠く遥かな・・」と言う意が良く表現されているではないか。

佐薙が天竜川に歩道橋があるかどうか・・と心配してきたが、全長９１２米の立派な歩道橋が出来ていた。水量は大井川の１・５倍ほどか、此処にも河原に赤い花・虫とりナデシコが群生していた。

歩道橋を越えたところに、**この暴れ川、天竜を明治の初め、殆ど私財を投じて治山・治水植林・水害予防などの大工事を行った金原明善翁の生家と記念館があった。**

富士川の角倉了以といい、後世に残る大事業を私財を以って献身的に成し遂げた人達、（国民の税金をぶんどって来て私が橋をかけた、トンネルをつくった・・と喧伝する昨今の政治屋と比べて）**なんと立派であろうか。**

［11］２００９年５月２８日　浜松から二川まで（３泊４日連続シリーズ第２節第４日）

佐薙　高崎　石和田　（距離 28,9Km　時間 9H35m（8H15 m）歩数 50,500）

５：００　ビジネス・ホテル　辻梅新館発（天気・雨、雨具着用）10・8Km、雨中を只管歩く（数多くの秋葉山常夜燈を見る）

８：００頃　舞阪宿着　（本陣・脇本陣・今切れ渡し・雁木・・）弁天島、浜名湖回廊？浮見堂　西浜名橋　（高崎・艇速下落・やや右傾斜始まる）

９：３０　新居町駅　＜高崎、勇気ある選択、歩行中断、帰宅、浜松から４時間半、雨中、休憩なしがその理由？＞

９：４０　高崎からコンビニで購入のスナックなど非常食受け取る、佐薙・石和田の２人旅。（午後、更に悪化予想の天気は何故か好転。高崎の置き土産？）
新居関跡　本陣　旧東海道松並木　潮見坂（草履お婆さん）「おんやど白須賀」

１２：００　白須賀宿（境宿）着　本陣跡地　火防樹の槙

１２：４５　昼食（食堂探しに苦労、営業中の食堂１軒のみ）発
境川（遠江国―静岡県湖西市、三河国―愛知県豊橋市）通過、国道１号を只管歩く

１４：１５　二川宿着　脇本陣　二川宿本陣資料館　高札場跡

１４：３０　JR 二川駅着　豊橋へ移動　新幹線にて帰宅

＜秋葉山常夜燈・・民衆の敬虔な祈り、寄進・・＞

「浜松宿」から「舞坂宿」まで（１０・８Km）の間に「秋葉（山）常夜燈」が実に良く目に付いた。（＊（社）中部建設協会の「東海道さんさくマップ」ではなんと１４箇所、表示されている）これは浜松から天竜川沿いを遡ること３０余 Km、赤石山脈の南端、標高・８６６米の秋葉山を神体とする「火防・火伏せの神」として古くから信仰の厚かった「秋葉大権現』（現在の秋葉山本宮秋葉神社）への参詣口に近いということであろうか。

古来、火は神秘的なものでありまた木造建築のこの国では火を恐れること第一、秋葉（山）信仰は全国にあり（東京台東区の秋葉神社―秋葉原もその一つ）その数、神社本庁傘下だけで４００を超えるらしい。（他に火防の神としては京都の「愛宕神社」が双璧で、こちらは１０００社もあるという。（京都では今でも「火廼要慎―ひのようじん」というお札が殆どの家の台所に貼ってある)。古の人達の真摯な願い、強い祈りの表れということであろう。

＜神仏習合、本地垂迹・・・神仏分離、廃仏毀釈＞

古来からの「神の信仰」と「仏教」との融和やせめぎ合いには興味が尽きないがとてもカバーは出来そうにない。仏教が５３８年（５５２年という説もあるが）に初めて持ち込まれてから聖徳太子・推古天皇の仏法興隆、遣隋使派遣、法隆寺建立などなど仏教は次第に国家鎮護の地位に近づき、第４６代聖武天皇（在位７２４～７４９）の時代に仏教は頂点に達したと言われる。**聖武天皇は信仰に厚く国分寺や国分尼寺をたて、東大寺に大仏を建造した。このように仏教が定着するに連れて「実は日本の神々も仏が化身して現れた「権現」であるという考え「本地垂迹説」が起こり、様々な神の本地（仏）が定められるようになった。（上述の「秋葉大権現」はその表れだ）**

何しろ天照大神は大日如来、八幡神は阿弥陀如来、愛宕権現・秋葉権現は地蔵菩薩、松尾は薬師如来・・の現われというのだ。

どうも仏教側に知恵者が多く、神道側はうまい具合に取り込まれたと言う感じで１０００年近くが過ぎた。

（小生にとっても、神はどうも遠いところに鎮座しているだけだが、仏は何となく身近で親しみ易い。教典なるものも多少は分かる。祝詞を聞かされたって何のことやらさっぱりだ。仏教は衆生救済、民衆の心に入り込みやすいのだ）

ところが**江戸時代に入ると国学者が次々と「古来神道」の復活を唱えだした。**

此処浜松生まれの「賀茂真淵」（江戸の国学四大人―しうし、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤）然り、その流れに位する**平田篤胤（１７７６～１８４３）の「儒教・仏教と習合した神道を批判した思想は尊皇攘夷の支柱となり明治維新直後の「神仏分離や廃仏毀釈」に大きな影響を与えた。**

この「廃仏毀釈」運動でどれ程多くの貴重な文化財が失われたことか？！（タリバーンがバーミヤンの石仏を破壊したり，紅衛兵が文化財をめちゃくちゃに破壊したことなど、似たような馬鹿げたことは終りなく繰り返されている）

「阿修羅の像」で有名な「興福寺」の境内が空っぽなのは、この愚かな行動によるらしい。

「廃仏毀釈」は維新を推進した藩に顕著で九州に大きな寺院がないのもその一つと言われる。全国で寺は半分になり高崎治郎の薩摩藩では１６１６寺が廃寺、２９６６人の僧侶が還俗したという。（きりがないわい）

＜白須賀宿・潮見坂、草履のお婆さん・・＞

新居関から佐薙との２人旅、次の白須賀宿の手前、潮見坂の入り口角で看板を読んでいたら、お婆さんが追いかけてきて「寄ってゆけ」と熱心。

＜草履・マスコット＞

聞けば９４歳、この草履作って７００　人くらいに差し上げたそうだ。

＜お婆さん・若若しい＞

時々地元のTVにも紹介され　＜草履・マスコット＞ている名物お婆さん、この草履を持ってゆけば宿場手前の休憩所（おんやど白須賀）でお茶をご馳走してくれる・・という。

佐薙はどうも「年寄り」に受けが良い。

＜佐薙とお婆さん・仕事部屋＞

潮見坂で汗をかいたので「おんやど白須賀」でのお茶は美味しかったよ、お婆さん、長生きしてくださいね。

［12］　２００９年９月２８日二川宿から赤坂宿まで（３泊４日連続シリーズ第３節第１日）

佐薙　鈴木　高崎　松尾　宮川（赤坂で合流）石和田（２７日夜、豊橋泊）

（距離 18.0Km　時間 8H05m　歩数 41.200　）

他の諸兄は当日、東京、横浜発

８：１５　二川駅集合　二川宿本陣資料館　高札場跡　往復

８：４５　二川宿・駅発　岩屋観音（北側が正規のルートだが南側の国道１号を通る）

１０：１７　鶴松山壽泉禪寺（黄檗宗）南側正面門から入り参拝？、西側門から出る　吉田宿・吉田城入り口「東惣門」東八丁交差点を目指すが到達せず。行き交う人々に問い合わせつつ壽泉禪寺まで引き返す（国道１号＝旧東海道と豊橋循環道路と取り違える）

１１：１３　壽泉禪寺角、願成寺　東八丁交差点　東惣門

１１：５０　吉田宿本陣他

１２：００　昼食　「きく宗」で「菜めし・豆腐田楽」

１２：４５　「きく宗」発　豊川　、聖眼寺　豊川放水路　飯田線踏切

＜１４：３０　宮川君から連絡、御油到着と＞

１５：４０　御油宿（若干の降雨）　御油の松並木

１６：３０　赤坂宿　大橋屋到着、宮川と合流（朝鮮小学校時代の同級生・松尾を待つ）

＜ダッチロール１時間、お賽銭あげて拝まなかったからだよ！・・＞

二川宿から吉田宿（豊橋）までは６粁あまり、どんなにゆっくり行っても２時間あれば充分。昼食は豊橋の老舗「きく宗」の「菜めし・田楽」だ。久しぶりに勢ぞろいした（宮川は赤坂宿で合流）一同は、二川宿本陣資料館などを見た後、８時４５分、二川駅前をほぼ国道１号に沿って吉田宿へ向かった。４粁ほどで「鶴松山壽泉禪寺」に立ち寄る。（1654 年、隠元＜鶴松山壽泉禪寺・10：17＞隆琦が創始した黄檗宗の寺）南門から入り西門から街道へ戻り豊橋を目指す。足取りはまあ快調、ところが、なかなか次の目安となる寺・交差点がない。

行き交う人に聞くとかなり方向が違うという。半信半疑言われる通り引き返す。

壽泉禪寺の角まで戻って、漸く間違った訳が飲み込めた。

壽泉禪寺へは旧東海道・国道１号の南門から入り西門から出たのだが、実は国道１号と４５度位で交差し、道幅もほぼ同じ豊橋循環道路を国道 1 号として何の疑いもなくすたすたと進んでいたのだ。

この間の吾らの動きを松尾のカメラが細かく捕らえていた。

松尾はダッチロールという。松尾のカメラはボイスレコーダーか。入門１０時１７分、引き返してきた時刻１１時１３分。

誰か言う“お賽銭もあげず素通りしたからだ”と。はいはい

（これで丁度時間調整が出来ましたわい・・負け惜しみ）

＜壽泉禪寺・11：13＞

＜「きく宗」さんの「菜めし・田楽」＞

お目当ての昼食「きく宗の菜めし田楽」、さてっと？土地勘のある鈴木が少々探しあぐねて「きく宗は？」と紺の背広にネクタイ、黒のカバン、いかにも地域銀行の営業マン風の御仁に尋ねる。「ああ、きく宗“さん”ですか」とすぐに教えてくれた。「さん」のつくところがいかにも当地の巨木・老舗を思わせる。

「田楽」は「五穀豊穣を祈って田の神に奉納した田楽舞」だが、豆腐を串刺しにして味噌をつけたこの格好が田んぼに棒を立ててその上で踊る「高足の舞」に似ているところから名づけられたという。

＜菜めし・豆腐田楽
松尾の満足そうな表情＞

菜めし、かって米が貴重品だった時代、白米だけを食べることは贅沢。麦や粟、稗と言った雑穀、大根や芋、山野草など食べられるものはなんでも米に混ぜて食べていたものの名残？だ。（戦時中・戦後を思い出す。最近では健康志向とかでわざわざ五穀米とか十六穀米などと混ぜたものが人気のようだが・・）

何でも食べられるものは・・と言うことで始まったこの大根の葉を小さく刻んだ混ぜ飯が今では素朴な味だ、なんてもてはやされているのだ。

「きく宗」、江戸時代から今日まで一貫してこれ一筋とは矢張り、たいしたものだ。

勘定係りを引き受けた高崎の、つり銭は百円玉でという細かい、面倒な注文に快く応じてくれた鼈甲フレームの老眼鏡、白髪頭のお婆さん、どう見ても８０歳後半と見受けられたが、矍鑠としてまさに文政年間（1818～1830）創業、老舗の帳場に似合いの風景であった。

＜御油の名前の由来、壬申の乱、持統天皇・・＞

この名前、大昔から貴重品だった「あぶら」に関係があろうか？くらいの想像はつく。

少し入り込んでみると,なんと「続日本紀」に「持統天皇（645～702）が三河に御幸（みゆき）の折、宮路山山麓の行宮に油を献上した人々の住む集落を“御油”と名づける」とあるようだ。

それにしても、６００年代の後半、まだまだ確立されたとはいえない大和朝廷の女帝（第３３代、推古天皇につぐ２人目・４１代女帝）が何故？遠く三河までやって来たのか？これは史実なのか？伝承に過ぎないのか？・・

これを解くには、どうしても律令国家の生成過程や「壬申の乱」に触れざるを得ない大テーマになってしまう。入り口のところだけ覗いてみるか。

＊以下は受け売り＊

持統天皇（鵜野讃良皇女・うののささらひめ）は第３９代天智天皇（近江朝廷）の第２皇女として生まれ、天智の弟、**大海人皇子**（後の天武天皇）に嫁した。他方、天智には長男・**大友皇子**がいた。**この両人による後継争いが「壬申の乱」**である。（讃良皇女にしてみれば自分の夫と異母弟間の争いである）

当初、天智は弟の大海人皇子に位を譲ろうとして、弟を王位継承者として「皇太弟」としたがその後、わが子・大友皇子に継がせたくなった。（よくある話だ）

671 年、身の危険を感じた大海人皇子は出家すると称して、妃（讃良）はじめ小人数を従えて吉野に隠遁、実は来るべきときに備えた。

＜御油の松並木
３５０本６００米＞

671 年末、天智が薨去すると政情はにわかに不安定となり、大海人皇子は僅かな従者と共に急遽進発、伊賀、伊勢、そして美濃、尾張（三河？）にかけて大軍勢を集め **672 年 6 月、大友皇子の近江朝廷側（主として西国から兵を集めた）と戦端を開き、約１ケ月で大友皇子側の最後の砦、瀬田川を越え、勝利を収めた。大友皇子は山崎の近くで自害した（ことになっている）。**

大海人皇子は即位して天武天皇となり、律令制度の整備などを進め、強力な中央集権国家の樹立に進んだと言う。

さて、讃良妃は皇后となったが、その天武も間もなく薨去、皇后は持統天皇として即位。彼女は天武のあとを継がせたいと願って来たわが子、**草壁皇子**の障害となる姉の忘れ形見・有能で人望も厚かった**大津皇子**を怜悧、冷酷にも排除して天皇への道を整えたが肝心の草壁皇子は皇太子のまま 28 歳で病死。已む無く草壁の遺児、**軽皇子**（孫）を帝位につけ（文武天皇）自らは日本史上初の太上天皇となった。

彼女は死の直前まで政治の表舞台に立ち続け、**大宝律令（701 年）**を仕上げたり各地への視察旅行を精力的に行い好きな紀伊の温泉から三河の国まで足を運び、夫と共に駆け抜けた壬申の乱の戦場跡にも行幸した・・とも伝えられる。

さて、本題だが持統天皇が果たして三河まで来たか？

伝承を信ずることとしようかな。勉強が足らない！。

＊　三河国の国府は御油の辺りにあった（今も国府村があり名鉄には国府駅もある）
律令体制の確立の過程で「三河の国」は「穂の国」と合併して三河の国になった。

＊　伊勢神宮にお参り（伊勢にお参りした最初の天皇だそうだ）しており、御油まで船なら 2 日もあれば充分。

＊　持統天皇は草壁皇子を御油まで連れてきており、そこで草壁は死去、それを葬ったところが宮路神社（旧白山神社）であり、其処を再び訪れた可能性がある。などなど。

＜飯盛り女、おじゃれ、身寄りの無い娘達の儚い運命・・＞

「御油や赤坂、吉田がなけりゃ　親に勘当されやせぬ」と流行り歌にあるそうだ。

＜広重の御油　旅人留め女＞

吉田、御油、赤坂の宿は近接していて宿場として客引きにしのぎを削ったと言う。

幕府は 1659 年に東海道の宿場に娼婦を置くことを禁じたが非公式な客引きは絶えず、宿場の繁栄の観点からもこれは止むを得ないと判断、1718 年に１旅籠２名を条件に許可をした。ただ、江戸の４宿、東海道・品川、奥州・日光街道・千住、中仙道・板橋　甲州街道・内藤新宿は例外的に多数置くこ

とが許されたようだ。

飯盛り女、留女、おじゃれ、杓子、幕府の公用語では「食売女」だが、北陸では「ねこ」「らくだ」、盛岡では「おしゃらく」、中仙道・木曽では「草餅」、信州・諏訪では「針箱」などと呼ばれていたそうだが、「おじゃれ」、呼び込みの「おじゃる」から転化したこの呼称には哀を覚える。

農村から身売りされて来て、客をとる彼女達の儚く哀れな人生、御油宿の西はずれの東林寺には身をはかなんで自殺した４人の遊女の墓がある。(藤沢宿に近い、永勝寺には旅籠・小松屋主人と共に身寄りのない遊女 40 数人（五十嵐冨夫氏の研究では平均年齢 21 歳という）の墓があると聞いた。弔う人も無く死んでいった遊女が殆どと思えるに、この小松屋主人の優しい計らいには少し救われる思いだ)

＜全員集合」、旅籠・大橋屋＞

江戸時代、慶安 4 年・1649 年創業の旅籠、「大橋屋」（当主は 19 代目）に泊まるというのは今回の目玉の一つ。佐薙が５月にはスケジュールを決めて９月 28 日、６名宿泊を予約してくれた。これは動かせない。

＜晴れて！全員目出度く集合、見事なり＞

その後、宮川が予期せぬ「心筋梗塞」に襲われ、心配されたが彼の強い運・生命力・リハビリの成果もあって、独りで「御油の松並木」を抜け、「大橋屋」までやって来てくれた。(松尾の膝ベルトが彼の柔肌を傷めたのは痛々しかったが)

「弥次・喜多が襖１枚隔てた隣の新婚夫妻を覗き見しようとして大失態を演じた街道に面した２階建て」は、町指定有形文化財で保存対象、手を加えることも出来ない由だが、裏側は増改築自由のようで「風呂」などは「たらい」を大きくしたようなスタイルで江戸の雰囲気を演出していた。

＜宮川が師匠？へ挨拶＞

広重が描いた中庭には蘇鉄ではなく赤松が生き生きと茂っていた。(広重の描いた蘇鉄は近くの旅籠・清須屋にあったもので今は浄泉寺に移植されているようだ)

食事は殆ど近・現代風に姿を変えていたが、とろろ汁、山芋の田楽などは古風な雰囲気を醸していた。

松尾の朝鮮小学校時代の友人が大橋屋で彼の到着を待って居られたこと、旧交を温める機会を得たことは共に死線を潜り抜けてきたればこそで感慨深いものがあったはずだ。

［13］　２００９年９月２９日　赤坂宿から知立宿（池鯉鮒）まで＜目標＞

（3泊４日シリーズ第３節第２日）

佐薙、鈴木、高崎、松尾、宮川、石和田（距離　？　　時間　？　　歩数　？　　）

７：４０　旅籠・大橋屋発　（間もなく宮川、別れて名鉄・赤坂駅へ）

９：００　本宿・冠木門　法蔵寺

１０：１０　藤川宿東棒鼻　藤川宿　本陣跡　関山神社前

１０：３０　名鉄・藤川駅、（鈴木、電車で帰京）藤川西棒鼻　藤川松並木

１１：００　名鉄・美合駅入り口（松尾、級友と昼食の為、離脱）乙川・大平橋　大平一里塚

１２：００　国道１号・高架下トンネル

１２：１５　岡崎城東入り口道標　二十七曲りの碑　曲折著しい城下町を行く　岡崎宿西本陣跡　籠田惣門跡・・

１３：３０　八丁味噌蔵　昼食

１４：００　レストラン発　矢矧川　出合之像（日吉丸・蜂須賀小六の出会い、橋の工事中で見つからず）

１５：３０？永安寺（雲竜の松）で休息　明治用水、松並木

１６：００？名鉄・新安城駅付近　レストラン前広場で転倒、前額部裂傷・出血多量、救急車により搬送（佐薙、高崎付き添い）、「八千代病院」にて手当を受ける

（１８：００？　名鉄・新安城駅～知立駅は電車による、知立宿、ビジネスホテル知立着）

＜東海道踏破のプロジェクトは中断！３０日３人とも、帰宅、実に申し訳なし＞

＜一夜明けて、夫々の道へ＞

＜大橋屋・入り口、建物は古い　旅人達の人生・歴史が刻まれている。この２階が弥次・喜多の騒動の場所＞

満足感と感謝を携えて出発。

宮川は我らに、お馴染みの「キャラメルとハイレモン」を餞に配って、自らは近くの名鉄・赤坂駅へ向かう。次の機会には必ずだ。

山間の朝は露が降り初秋の気配、西へ向かう。

藤川駅で鈴木が電車に乗る。今日は奥方アシストの約束あり。(名鉄の名古屋行き方面と豊橋方面では駅が全く違っており戸惑う)

その３０分後くらいには松尾が平壌時代の学友と昼食の為、名鉄美合駅近くで「じゃあな、ご無事で」となった。半分になってしまった。

「今日は知立まで」と答えると土地の人達は大抵、驚く。知立は「よそ国」らしい。３０Km ほどなのだが・・。

＜岡崎、松平郷、徳川、三河武士・・＞

またまた鉄道唱歌（３１番)、「見よや徳川家康の　おこりし土地の岡崎を　矢矧の橋に残れるは　藤吉郎のものがたり」。東海道を歩いていると否応なく家康が顔を出す。殊にこの岡崎はそうだ。

ところで司馬遼太郎さんは「街道をゆく」で全国各地はもとよりモンゴルや中国、台湾などにも出かけているが、何故東海道に関わるところを書かなかったのだろう？

全４３巻（朝日文庫）をひっくり返してみても（僅かに本郷・深川・神田界隈や三浦半島、別の著作「箱根の坂」で北条早雲を書いてはいるが）何処にも見当たらない。

唯一つ、「歴史を紀行する」（文春文庫）のなかで家康のルーツ、「松平」を書いている。

「**家康のルーツはいわば漂泊の乞食坊主、時宗の遊行僧**（村の豪家に逗留、なんの戒律もない宗旨を奉じ南無阿弥陀仏をすすめて村から村へと渡り歩く、何処で果てるか分からない）**で徳阿弥というもの**。しかし、この徳阿弥は大変才智もあり弁舌に優れた魅力ある男らしく、**近くの松平郷の豪家である太郎左衛門の一人娘に子を生ませてしまった。**太郎左衛門は已む無くこの男を婿に入れ相続させた。**徳阿弥は松平と名乗った。家康の九代前の、これが松平・徳川の始祖である」**（以上は家康に腹を立てていた大久保彦左衛門が言わば家康の先祖なんてこんなものだと暴露したのだが、しかし、門外不出としていた「三河物語」のなかにある）

矢矧川と合流する足助川の川筋からも幾山も離れた山間では米も取れず狩猟が日常の暮らしだったようで、この山中の生活が常に平野進出への憧れと野望を持続させ続けた。

彼らが武士として極めて勇敢で軽捷、優れていたことはこのような環境と生い立ちによる。

そして**三河侍、隣国の尾張侍ほどの機略なく、美濃侍の智謀なく、駿河侍の教養とてないが、どの国にもない美質は際立っての「律儀さ」だという。**

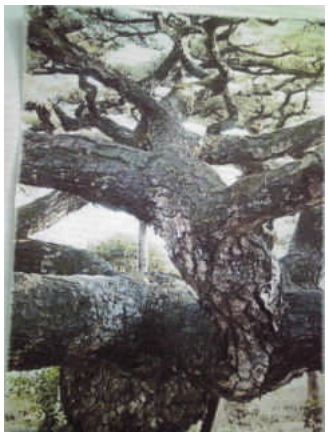
家康が「人質」の間も一貫して主君の為として耐えて来たこの律儀さ、忠誠さ、素朴さ、などが徳川３００年を支えたと言えるのだろう。

「決して名家の出身でもない者が世に君臨する、そしていずれまた他のものにとって替わられる、これが日本の民俗社会の対流のよさであり、ロマンである」と司馬さんはいう。

＜永安寺・雲竜の松・逞しく生きねば・・＞

曹洞宗・永安寺の山門を入って小休止。

背の低い太い松が枝を四方に広げていた。



＜安城市浜屋町の永安寺の庭、雲竜の松・樹齢約３００年＞

「雲竜の松」、雲を得て天に昇ろうとする竜の姿に見立てられている。

樹高５米、幹囲３．７米

推定樹齢　３００年。

この松は庄屋、柴田助太夫の庭にあったものだとか。

助太夫は農民に負担の大きかった助郷役の免除を願い

出て刑死したと伝えられる人物。この地の人達は昇天する竜の姿に、命を賭してまで村人を助けようとした助太夫の高貴な精神を重ねて見てきたのではあるまいか。・・とある。
（因みに、**東京の江戸川区・小岩の江戸川沿いにある善養寺に「影向の松」**（神仏が姿を現す、神仏の来臨）と言う樹高８米、幹周 4.55 米　枝張り、東西３０米、南北２８米の松がある。その枝の繁茂面積は香川県・真覚寺の**「岡野松」**と日本一を争い、**小岩出身の名横綱・栃錦が、日本名松番付けで、前者を東の横綱に推挙し、立派な横綱が奉納されている。**しかし西の横綱はその後枯死してしまい、今は一人横綱になってしまったようだ）
人間の命に比べて遥かに長命なこれらの松たち、どれ程、人間どもの興亡・盛衰を見守ってきたことか。これからも、泰然として見守り続けてくれまいか。

永安寺での小休止のあと、凡そ３～４０分、２～３Km 知立宿寄りのところで、小生が転倒、前額部裂傷、救急車で病院に運ばれるというアクシデントのために、この「オーション会・夢のプロジェクト・旧東海道五十三次踏破の旅」は挫折・中断となった。
同僚に与えたダメージは計り知れず、償うすべもない。

＜依ってこの「漫遊録」も未完のまま閉じる＞

2009 年 10 月 15 日

＜石和田の転倒で挫折・中断の恐れが生じた、この五十三次プロジェクトはメンバー一同の理解、熱意、友情によって再開、継続されることとなった。感謝に耐えない。＞

踏破は先ず佐薙・高崎が 9 月の挫折で歩き残した新安城～庄野を 10 月 22 日・23 日でカバー（石和田はダメージからの回復不十分ということで取り残される）し、11 月 16 日~19 日、庄野～京都間、殊に 11 月 19 日はメンバー全員 6 名で京都三条大橋に到着した。快挙なり。その後、石和田は 11 月 26 日~28 日に単独で「決して無理をせず、実力相応、敗残兵になるには勇気がいるぞ！」を胸に、新安城～庄野を歩き、完全踏破を果たした。

記録は時系列ではなく、東から西への地理的な順序に従って記すこととする。

［14］ 平成 21 年 11 月 26 日 （新安城）・池鯉鮒宿（知立）から鳴海宿・笠寺

石和田（単独） （距離 20.0Km 時間 7：00（6：20）歩数 42.100（37.000） ）

６：２６ 東京駅発 ひかり５０１号 ８：００豊橋
８：１５ 豊橋発 ８：４５ 名鉄本線 新安城駅着
８：５５～９：０５ 八千代病院・御礼挨拶
９：４０～５０ (現場) レストラン前 着・発
１０：１５ 猿渡川橋 八橋への道標 来迎寺
１１：００ 池鯉鮒宿問屋場之跡 本陣跡碑
１１：３０ 総持寺 逢妻橋 乗願寺 乗蓮寺
１２：４０～５０ 境橋
１３：１５～ 河野一里塚 坂部善光寺 前後駅
１３：５５～１４：２０ 桶狭間古戦場伝説地 高徳院
１４：３０～１４：４５ (間の宿) 茶屋集落 旧有松村（有松絞）
１５：３０～ 鳴海宿本陣 鳴海橋
１６：００ 天白橋
１６：２０～４０ 笠寺（笠覆寺）泉増院他 佐薙、高崎へ電話報告 松尾へ携帯メール
１７：１５ 本笠寺駅から知立駅に戻りホテル「アイリスイン知立」泊

転倒現場・塩で清めた
(2009.11.26)

＊佐薙・高崎両君が石和田の単独行脚のためにと、親切にも作成してくれた彼らの歩行記録・本節末に添付（10 月２２日～２３日の初日）と対比すると１時間半~２時間、遅い。

＜八千代病院へ御礼の挨拶、旅のスタート＞

絶望的と思えたアクシデントから２ケ月を経て、再度五十三次に挑戦できるのは、佐薙・高崎はじめメンバーの熱い友情によることは勿論であるが、応急処置を適切にして下さった「八千代病院の医師・看護師」他関係者のお蔭でもあった。

以下の礼状と千葉特産の落花生をぶら下げて参上し、

八千代病院 2009-11-26

診療開始前の沓名医師、看護師、鈴木さんというチャーミングな受付のお嬢さんにもお会して御礼を伝えることが出来、快くその第一歩が踏み出せた。
沓名医師からは「転ばないように気をつけて、目的地まで」と励まされた。

拝啓　向もなく師走、皆様お元気で崇高なる職務に励んで居られることと拝察します。
さて、老輩、9月29日夕刻、旧東海道を歩行中転倒、救急車で貴病院に運ばれ、沓名先生はじめ関係の皆様に大変お世話になりました。お陰様でほぼ従前通りに回復、去る11月16日から19日にかけて、同行の仲間達と三重県の庄野宿から鈴鹿を越えて草津・大津、そして目標の京都、三条大橋に到着できました。今回は先のアクシデントで果たせなかった安城から知立、鳴海、宮、桑名、四日市、石薬師、庄野までをカバーすべく単独で出かけてきました。多分、無事歩き通せることでしょう。
喜寿を前に126里の旧東海道を踏破できたとすれば、それは大きな思い出であり、八千代病院の皆様のご親切とともに忘れることの出来ない宝となりましょう。心から御礼申し上げます
時節柄、くれぐれもご自愛専一に、どうぞお元気で。　敬具

平成21年11月26日

八千代病院外科　沓名先生ほか　ご一同様　石和田四郎

＜在原業平の「東くだり」とは？＞

「昔男ありき・・」に始まる伊勢物語の主人公に擬せられている在原業平（825～880)、平安初期のプレーボーイが何故？いつ頃？京から、三河、駿河、相模を経て武蔵国までやってきたのか、本当に来たのか？これがどうも分からない。
しかし、池鯉鮒・八橋ではカキツバタを冠して「唐ごろも・・」、宇津ノ谷峠では「駿河なる　宇津の山辺の・・」と、夏にも雪の積もっている富士を見ては「時知らぬ　山は富士の嶺（ね）いつとてか　かのこまだらに　雪の降るらむ」そして武蔵と下総の境を流れる大河、隅田川では、思えば京よりはるか遠くまで来てしまったものだと感慨をこめて**「名にしおはば　いざ言問はむ　都鳥　わが思う人は　ありやなしやと」**などの歌は残っている。
やんごとなき皇統（平城天皇）の血筋に生まれながら政変によって道筋が大きく変わり藤原氏の摂関政治のもとで昇進も適わなくなった（官位も剥奪されたという説もある）時期（849～862）に東国へ旅に出たのではないかというのだが・・。３０歳前後の頃か？。眉目秀麗な美男子で自由気ままな色好み、しかも人並み優れた歌才に恵まれた男（六歌仙、三十六歌仙の一人）が悲運にさいなまれつつ風流の道にその生涯を蕩尽したというべきか。研究、諸説は沢山あるが、余りうがった深読みはやめてロマンチックな彩でこれを受け入れておこうか。
業平の辞世の句は　「ついに行く道とはかねて聞きしかど　昨日今日とは思わざりしを」だそうだ。まだまだこの浮世で・・という思いが滲む。
松尾が造詣の深い兼好法師の「徒然草」１５５段の「・・四季はなほ定まれる序（ついで）あり。死期（しご）は序を待たず。・・人は皆死ある事を知りて、待つことしかも急ならざるに　覚えずして来る。沖の干潟遥かなれども磯より潮の満るが如し」を思い出させる。

知立・八橋には業平供養塔、土盛の上に宝篋印塔、「在原業平朝臣墓所」の石碑があると言うが、業平が晩年隠棲したと伝えられる**京都の西洛、十輪寺とその近く大原野上羽町の竹やぶの中にある、父・母・本人と言われる３基の五輪塔の１つを業平の墓と考えたい。**

２００６年秋、紅葉の華やかな頃に此処を訪ねたが業平の波乱万丈の生涯と、この小さな石の塔との取り合わせが何んとも言えず深く心に残っている。

十輪寺・裏山にある業平の墓

業平　母・伊都内親王　父・阿保親王
(大原野上羽町の竹やぶのなか)

＜地名の由来、前後（せんご、ぜんご)、呼続（よびつぎ）＞

名鉄本線に沿って歩くと面白い地名・駅名に出会った。

＊　「前後」とは？「２５００人の戦死者を埋葬した戦人塚のある前後町は今川軍が前後を争って壊走したことに由来する」と高崎の記録にはある。或いは「桶狭間の戦いの後に兵の首が前後に転がっていた」などと歴史的な桶狭間の戦いに結びつける説がある、がどうもこれは「俗説」らしく、「間米村の前の郷にあるから「前郷」・前後という」　というのが本命らしい。しかし、これではどうも響きが乏しい感じがする。

＊　「呼続」とは？これも、今川軍が退却の時、声を掛け合って逃げたことに由来するのでは？と想像したくなるが、此方は室町時代中期頃、白毫寺の北西（宮宿。七里の渡し）に船着場があり、当時は船出の会図を人づてに「お～い、舟が出るぞ！」と人から人へと呼び継がれたことに由来するらしい。・・どうもロマン？がないなあ。残念。

＜善光寺本尊・阿弥陀如来の遍歴？＞

前後駅の向かいに「坂部善光寺」がある。飯田市には「元善光寺」、宮川の故郷・長野には「善光寺」、甲府にもある。幾つあるのか？「善光寺」を正式の寺名とする寺は全国でなんと１１９カ寺もあるそうだ。折角だから本尊・阿弥陀如来の数奇な運命について触れてみたい。(史実が枝葉を広げて伝承される、良くある話だが。)

(日本への仏教の伝来は欽明天皇の７年・**５３８年**、百済の聖明王が金銅製の仏像と若干の経典、仏具を使者に託して仏教を信奉するようにと勧めたのが始まりという。

ところが当時の２大豪族、皇室の神事を独占していた物部（尾輿）氏と新しく仏教を入れて地歩を強くしたい蘇我（稲目）氏の間で激しく対立、結局「試みに入れてみよう」となったが、その後間もなく疫病が蔓延し、八百万の神の怒りを買ったではないかと物部氏は蘇我氏の明日香村の屋敷を焼き打ちし、其処に祀ってあった仏像を近くの堀に投

げ捨ててしまった。依って百済から齎された最初の仏像は現存していない。

どうも信仰というより政治の道具にされた感がつよい。それから凡そ１００年の後）

＊朝鮮からの渡来人、**若麻績（わかおみ）善光**（麻の栽培で成功、後に本田の姓を授かり信濃国で活躍）は、皇極元年・６４２年に所用で当時の都・大和へ出かけたが、その帰り道、（例の）堀の中から「善光！善光！」と呼びかける一体の金色の仏像に出会い、背負って長野まで帰り自宅にお堂を建ててこれを大切に祀った。これが長野県飯田市にある**元善光寺**だという。その後、間もなく本尊は現在の善光寺に移され、多くの人の熱烈な信仰を集めた。（長野善光寺は無宗派）

＊各地の大名が熾烈な覇権争いをした戦国時代、この阿弥陀如来のご利益をわがものとすべく甲斐の**武田信玄**が１５５５年、川中島の合戦の最中に自国に善光寺を建てて本尊を移した。（甲斐善光寺の縁記では戦争の火災から護る為とあるが）間もなく武田は織田信長に滅ぼされ、この仏像は**岐阜善光寺**に持っていかれた。その年、信長が本能寺の変で倒れると次男の信雄（のぶかつ）が尾張の**甚目寺（**じもくじ）に移してしまった。

同じ年、急速に台頭してきた**徳川家康が**遠州に運んだ。

その後、再び甲府の善光寺に戻されたが１５９６年、**豊臣秀吉**が京都に**方広寺（**後に家康が鐘の銘に難癖を付けた）を建て、ここに運んで安置した。

ところがこの頃から秀吉は健康を損ない病状は日増しに悪化、世の人は**善光寺の阿弥陀如来の祟りであると密かに噂するようになった。**

秀吉は本尊を長野の善光寺に返すことにしたが、本尊が長野に帰った翌日に没した。

＊　ご本尊、阿弥陀如来は人々の興亡を目の当たりにしたわけだが、とんだご難にあってしまったものだ。**善光寺のご本尊は今や永久に秘仏である。**

[15]　２００９年１１月２７日　鳴海宿・笠寺　宮宿～～桑名宿　四日市宿

石和田（単独）　（距離 20.9Km　　時間 9：00（6：50）　歩数 44.300（36.000　）

６：５９　名鉄・知立駅発～　本笠寺駅着

８：００　笠寺発

８：４５　白毫寺・呼続　山崎橋

９：４０～９：５５　宮宿・七里の渡し　鈴木、宮川他へ電話

１０：００～～　熱田神宮参拝　名鉄・神宮前駅　（名鉄、近鉄）

１１：００　近鉄・桑名駅着　～１１：４０海蔵寺（薩摩義士の墓所）　九華公園

１２：３０　七里の渡し発　法盛寺　天武天皇社

１３：１５　矢田立場　了順寺　晴雲寺

１３：４０　町屋橋　真光寺　西光寺

１４：４０　朝明橋　弘法大師堂　長明寺　寺、寺、・・

１５：４０　米洗橋　光明寺

１６：１５　海蔵橋　法泉寺　三滝橋　元祖なが餅舗　諏訪神社

１６：４０　四日市宿着　ヒールイン四日市泊

晩秋の日は短い。「東海道さんさくマップ」「佐薙・高崎記録」を頼りに無事到着。

＜宮の渡し・海上七里遥か・・＞

＜七里の渡しの常夜灯＞
―１人歩きの証拠写真―

東海道一の大宿、宮。熱田神宮への参拝、桑名との往来、
遊興に訪れる人などで大いに賑わったそうだが、さて、
この海上七里の渡しはいつ頃から始まったのだろうか？
伊勢があり鈴鹿越えが主要なルートなら三河へは海を越える
のがメインになるのは必然だったろうか。
既に朝鮮半島からの渡来人は多く、海上を移動する技術は発
達していて、陸上よりは容易。木曽三川を渡るのは至難の業。
陸地を回る「佐屋街道」は家光の時代に開かれたと言うし、
尾張・美濃にはそれ程大きな魅力はなかったのかも知れない。
「御油」の名にまつわる持統天皇（645～702）が「伊勢から
三河に渡った」ことを事実とすれば６００年代後半には舟の
行き来があったのだ。埋め立てられて海は遥か沖合いに退いて
しまった小さな船着場に立ってその移り変わりをつくづくと思ったものだ。

＜桑名城跡・九華公園＞

十万石の桑名城は江戸時代、その重要性からか本田忠勝、松平氏などが治めてきたが３方
を海に囲まれたその美しい城跡は今は水と石垣が織り成す「九華公園」となっている。
優雅なこの名の由来はなんだろう？　オニギリを頬張りながら考えた。
中国には「一花茎に沢山の花を（が）咲かせる（く）こと」を「一茎九華」といい、この
名前で呼ぶ大型種の蘭があるらしい。
もしそうだとすれば、この公園に相応しい華麗な名前だ。古人は学がある。兼六園（広大,
幽遂、人力、蒼古、水泉、眺望の六勝）にしても六義園（和歌の分類の六体）にしても
夫々になるほどと思わせられる。いやいや奥の深い漢文明・漢文字に強く魅かれ、横文字
のカタカナ化、短縮文字・文化に嫌気がさしている年寄りだからかも知れないが。

[16]　２００９年１１月２８日　四日市宿　石薬師宿　庄野宿

石和田（単独）　（距離 15.1Ｋｍ　時間 5.20（4.30）　歩数 26.800　（25.800）　）

７：１０　ホテル発
７：３０　東海道ルート基点発　浜田の町並み　鹿化橋
８：１５　天白橋　日永神社　薬師堂　一本の松
８：４５～５０　日永の追分　（伊勢神宮道に入る、参拝？のため１０分を要す）
９：３０　内部橋　杖衝坂の碑　血塚社　采女一里塚跡石碑
１０：００　采女町交差点　延命地蔵尊
１０：２５　石薬師宿入り口　佐々木信綱生家・記念館　宿内街道・信綱３６の歌碑
１１：００～１１：３０　石薬師寺　宮川と電話
１２：１０　庄野宿入り口　佐蘰、高崎他へ電話　加佐登駅～名古屋～帰宅
１７：００　帰宅　・・・**満願成就**

＜天白橋　天白川　天白神・・＞

四日市を出て１時間弱、旧日永村の天白橋を渡る。？？。実は一昨日、鳴海宿と笠寺の間でも天白橋・天白川を渡った筈だ。珍しい名前だが全く同名。これは何に由来するのか？古くからの民俗信仰で「天白神」という神様があり、長野、静岡を中心に三重、伊勢志摩地方を南限に岩手を北限として各地にあるという。ガイドマップを見直すと富士川の近く旧東街道が身延線をくぐる手前に「天白神社」というのがあった。拝まなかったなあ。

「天白神」とは、海を鎮める神、川を鎮める神とされ、河川が暴れる地域に多いという。また養蚕の神、織物の神でもあるらしい。確かにこの先、流域には製糸工場が発達した一方、河道が狭く短い為氾濫が繰り返されてきたようだ。

名古屋市には「天白区」という区名までありました。

気がつかず申し訳ありません，名古屋の主、克ちゃん。

＜日本武尊、杖衝坂、能褒野御墓、白鳥の飛翔・・＞

古事記（天武天皇の勅で稗田阿礼が誦習し太安万侶が撰録して 712 年に元明天皇へ献上）に記されている**日本武尊の物語は大和朝廷が数百年をかけて東日本を平定して行く構図を地方の様々な伝承と重ねながら一人の皇族・武将に象徴させて作り上げたもの**というのが定説のようだ。

日本武尊は生粋の神ではなくその結末には死があり初めから神である存在との中間にあるといった感じである。ロマンチックな純愛、弟橘姫の入水（「速水の海」、現在の浦賀水道）という悲劇性、そして伊吹山の神の祟りで故郷・大和への帰還を目の前に、庄野宿の近く能褒野で無念の死、故郷へは日本武尊の魂が白鳥となって帰るという・・いかにも人間らしい物語に作られている。

白鳥は各地へ飛んで行ったが、吾が上総国、鹿野山に「白鳥神社」があって小学生の遠足では何回も参拝したものだ。また中学・高校の木更津は「**きみさらず**」、東征の折、相模から上総へ渡る際、東京湾が大荒れ、弟橘姫が海神の怒りを鎮めるため自ら荒海に身を投じて海を鎮めた。上総に上陸した尊は丘の上から海を見つめ

「**君さらず　袖しからみに　立つ浪の　その面影を見るぞ　悲しき**」と詠み、

しばしこの地を去らなかったと言われる。

上総には何故か日本武尊にまつわる伝承は数百とあるらしい。**小生の故郷・富津（ふっつ）**は身を投げた弟橘姫の衣が流れ着いたところから**布流津（ふるつ）**と呼ばれたことによるとか木更津の北の**「袖ヶ浦」は姫の袖が流れついたことによる**などなど。

そして、富津市に合併される前の「天羽町」は「速水の海（浦賀水道）」を隔てて武蔵国が東山道から東海道に編入される７７１年までは主要道だったそうだから、日本武尊が海を渡ったという話とは辻褄が合うかな。

それにしても、何故？東国を平定しての帰国の途、かねて約束した尾張国造のミヤズヒメと結婚を果たしたが、休む間もなく伊吹山の神を討ち取りに（大事な草薙の剣を忘れてしまった）出かけて敗退、土地の采女に助けられ、杖に縋りながらこの坂（杖衝坂）を登りながら、故郷・大和にたどり着くことなく「能褒野」の地で息を引き取らざるを得なかっ

たのか。（とても人間らしい物語に仕上げてある）
今、日本武尊の墓とされている墓は「能褒野古墳群」の中核をなすもので明治１２年に定められたということだ。大和政権確立の過程でこの伊吹山一帯はなかなか征服困難で、政権側の武将・軍勢が多数敗れたという痛々しい歴史でもあるのだろうか？

＜佐々木信綱の歌で彩られた上品な宿場・石薬師＞

「卯の花の匂う垣根に・・」、通りの両側、１００メートルおきくらいに信綱の和歌３６首の碑が建っている。「卯の花」は時期ではなかったが・・。**信綱の歌は柔らかく、やさしく、殊に故郷を想い、母を想う歌が多い。**
折から、信綱記念館では「歌会」が催されていた。歌心のかけらでもあれば吾も顔を出すところだったのだが。
「生家にゆくと　弱かりし母が　我をせおひ　渡渉せしか　この甲斐川を」
「ふるさとの　鈴鹿の嶺呂の　秋の雲　あふぎつつ思う　父とありし日を」
「春ここに　生るる朝の　日をうけて　山河草木　みな光あり」
山形・上山の斉藤茂吉、秋田・角館の平福百穂にしろ、或いは啄木、賢治・・などなど歌人にしろ詩人にしろ皆、故郷を、母や親・兄弟を思い、そして彼らが詠んだそれらは夫々に素晴らしいのだ。

＜石薬師寺・真言密教とは・・＞

石薬師寺住職
＜密教について語ってくれたが＞

五十三次を歩いていて一番眼につくのはお寺だ。決して豊かではない時代に・・とその信仰心の大きさに感心したり、宗派や教義に話が及ぶ。佐薙と石和田は真言宗、高崎，松尾、鈴木は浄土真宗、宮川は曹洞宗という具合だ。

（真言）密教とは一体何だ？加持祈祷とは？

お経を聞いていてもちっとも解らん！？
これらに答えられない。勉強が足らない！。
[この項を書くのに長い時間がかかってしまった。**そもそも密教の奥義は、書いたもの、経典を読むだけで解るものではないと言うのだから・・**]

＊　碧い作務衣の真言密寺・石薬師寺の住職から密教について２０分ほど話を聞いた。

「弘法大師様が長安で「恵果・阿闍利」から１対１で直接、言葉や動作で伝授されたものです。大日如来が本尊様で身・口・意と言ってね、仏はこの宇宙で様々な姿で現れる。それをみんな感じ取って現世で仏と一体になることで悟りを開く。これを即身成仏といいますが、来世ではなく、この世で、現世利益を求めるということでもあります・・」
＜当方の理解力に合わせての説明かなあ・・。＞

＊　（真言）密教伝来の概要。

「インドでは当初、釈迦の教えが“出家をし厳格な戒律のもとに悟りを開いたものだけが救われる”と解されていたが、紀元前後に“それはおかしい、広く衆生は救われるべきだ

という所謂大乗仏教が興り、６，７世紀には新興のヒンズー教やアラビアからのイスラム教に対抗すべく、それまでの雑多な呪術を拾い上げて儀礼化・体系化し、高度な思想で構築した、密教の経典、**「大日経」（６世紀前半~中期）や「金剛頂経」（７世紀中期~末期）**が成立した。そしてヒンズー教の神々さえ仏教化し、それを**曼荼羅の宇宙観**の中に見事なまでに序列化した。（この仏教は結局、インドでは滅びるが、チベットや中国へと伝わる）

「大日経」は７２４年に**「善無畏」**によって、「金剛頂経」もほぼ同じ頃、**「金剛智」**によって漢訳、中国へ伝えられた。この**真言密教の根本経典・両部大経は「不空」を経て「恵果」に、そして、わが「空海」に灌頂された。**（空海は漢訳されたものでは真意は伝わらないとして原語、**サンスクリット語で読むべき**だとし、真言密教では今もそうしている）空海は**８０４年**に渡唐し、僅か１年余で恵果の唯一の後継者として、密教の奥義を言わば水の一滴一滴を器から器へ移すように動作や言葉で伝授され、**数百巻に及ぶ経典**、密教教義の世界を現す独特の**５種２３幅の曼荼羅、「法具」（五鈷、三鈷・・鈴、輪宝・・）**そして密教の**正当な継承者・正嫡として持たねばならぬもの（天皇家の三種の神器のような）８種、（仏舎利８０粒、刻白檀仏菩薩金剛像等一龕・・）**などを携えて**８０６年**秋に帰国した。

（よくぞ無事に帰国された、さもなくば日本の歴史は大きく変わっていた筈だ）

京都・高尾の神護寺に入り、**「即身成仏」と「国家鎮護」を密教の本旨として掲げ**、天皇家・殊に嵯峨天皇との良好な関係を築き、その政治力を巧みに生かして、東大寺別当、東寺を頂くなど着々と真言密教を国家仏教とすべく活動、高野山を賜り真言密教の一大拠点を設けて、遂には**宮中・大内裏に「真言院」を設けて宮中に密教式儀礼を位置づけた。**

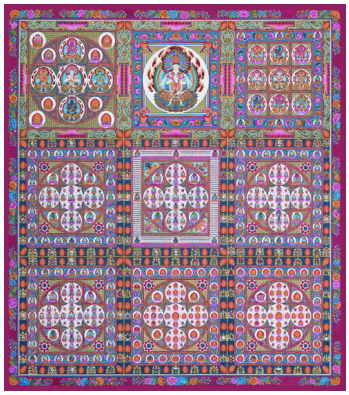
その翌年入定、６１歳。

＊　密教の教義とは？（最澄の天台密教は円仁、円珍が補完したが不完全とみて対象外）

◍**空海は**「密教とは真理そのものの姿で容易に現れない大日如来が説いた教えで、その奥深い教えであるがゆえに容易に明らかに出来ない秘密の教え」で「顕教とは衆生を教化するために姿を示現した釈迦如来が、秘密にすることなく明らかに説き顕した教え」と説いた。密教は迷いを去った後の、**真理の悟りの世界そのもの**を説き顕教は迷いを**除く道を**示している。

◍真言密教の総本山・金剛峰寺では「真言密教の“真言”とは仏の真実の言葉で人間の言語活動では表現できない、この世界の様々な事象の深い意味、即ち隠された秘密の意味を明らかにしている。この隠された深い意味こそ真実の意味であり、それを知ることが出来る教えこそ「密教」である。この隠された秘密の意味を知る修行（三密加持）を通じ、仏の身・口・意と修行者の身・口・意が感応、一体となり（入我我入）、仏の知恵を悟り、自

胎蔵界曼荼羅（慈悲）
＜４０９尊＞



金剛界曼荼羅（知恵）
＜１４６３尊＞

分に功徳を積み、衆生を救済し幸せにする（利他行）もの」と説いている。

◍顕教が民衆に向かい広く教義を言葉や文字で説くのに対し、密教は極めて神秘主義的・象徴主義的な教義を教団内部の**師資相承**によって伝授する点に特徴がある。

また、言語では表現できない仏の悟り、それ自体を伝えるもので、凡夫の理解を超えているという点で「秘密の教え」とも言う。

◍**加持祈祷の宗教**と見られがちの真言密教だが、**その本質はこの身のまま現世で仏になる「即身成仏」と祈りによる救済が可能だ**とする点にある。今、生きているこの世で幸せになる、幸せに過ごす、ということが強調される。

◍この大宇宙そのものが「生」として生きる生命体であり、それに生命の根源体がある。それは**変化自在に姿を変えた「大日如来」が宇宙の全生命を包括し**、かつ、個々の生命体を構成し、「縁起」による生命活動を様々に展開していると説く。**これが密教の真髄である。**大日如来を全ての宇宙を成り立たせている根源仏「法身仏」として教主とし、全ての教えはこの大日如来から直接学ぶ。（２世紀ごろインドで興った“一微塵の中に全世界を映し一瞬の中に永遠を含むという一即一切、一切即一の世界観、この世界の実相は個別具体的な事物が、相互に関係しあい（相即相入)、無限に重なり合っているという考え方（重々無尽の縁起)”を持つ**「華厳経」**の影響がある。この教は日本へ７３６年に伝来されたという）

＊　碩学の幾つかの著作から

◍**哲学者・梅原猛さんは「仏像のこころ」**の中で密教を知るのに先ず「曼荼羅」の考察から入る。胎蔵・金剛の両界曼荼羅のうち特に胎蔵界曼荼羅を元に「曼荼羅とはつまり、仏の集まりを示すと共に悟りの本質を示すものであろう。大乗仏教は多くの仏を創造したが、結局その仏も、一なる仏、絶対の仏である大日如来に統一される。その仏たちは大日如来を中心に如来、菩薩、明王、天部（仏教に反対した帝釈天や梵天までも）と順序を得てその周辺に仲良くしかるべき場所を与えられておさまっている。・・大日如来は宇宙神であり、宇宙にみなぎる永遠の生命の象徴としての絶対の神であろう。雄大な大宇宙の生命は身（姿)・口（音)・意（心）の３つの姿で現れ、それは無限に広く、無限に深く、空漠として神秘的であり、荘厳である。この秘密にして荘厳なる宇宙の生命を「密」と言うのである。**・・秘密にして荘厳な大宇宙の生命力が、我々の中に宿っている。いざ生命力を奮い立たせて生きようと言うのが真言密教の教えなのだろう。」と。**

また**「我々日本人は、古来から自然の中に生ける神の姿を見る民族であった。このような自然崇拝に適した仏教が日本で受け入れやすいのは当然の成り行きである。真言密教は、まさにこのような地盤において日本に定着したように思える。かくして、密教は、抵抗なく日本古来の神道と結びつく（神仏習合）のだが、これを否定して「神棚を川に流したりした」浄土真宗は明治の初めに賀茂真淵、本居宣長に連なる所謂平田神道の復讐を受け神仏分離（廃仏稀釈）が行われ仏像など貴重な財産を失わせる事となった」**とも。

◍**宗教学者の山折哲雄さんは「仏教信仰の原点」**で「**日本には古くから、遊離魂信仰があった。それが平安初期になると天皇や肉親の不慮の死、病気、災害、疫病など様々な不幸、異常な社会現象が起こると、それは非業の死を遂げた人の怨霊（物の怪)、祟りではないかと考えられるようになり、これを鎮めるための加持祈祷（仏の不可思議な力で衆生を加護**

すること）が盛んに行われるようになった。（祟るものが「神の怪」では「神道の祓い」で、「悪霊・怨霊」では密教僧の「加持祈祷」でと使い分けられていたが）

殊に**桓武天皇は**権力の座につくまでに継母の井上（いがみ）皇后、他部（おさべ）親王、同母弟の早良親王などを次々と死に追いやった。この祟り（早良親王が中心）が非常に恐れられ鎮魂儀礼が盛んに行われた。

天皇が病気になると加持祈祷を行って治療をする、このように**仏教僧が看病僧の役割**を期待されることはかなり古くからあったが、制度として出来上がるのは大仏建立の聖武天皇の時代で、これが仏教と政治との接近（道鏡と称徳女帝との危うい関係も引き起こす）の背景にあるのだが、**このような時代に空海が宗教界だけでなく政治の舞台まで進出して、怨霊の祟りを鎮めるための真言密教による加持祈祷の儀礼体系を確立してゆく。**

空海は死の前年、大内裏に「真言院」を設立、宮中の最重要な大嘗祭（例年の新嘗祭のうち前天皇が没し、新天皇が天皇霊の継承として行う特別な儀礼）を**天皇の玉体に侵入する邪霊、怨霊の排除と言う考え方で体系化し、神道とは別に密教修法として確立した」と**

◍**司馬遼太郎さんの「空海の風景」**は「空海と言う天才・稀有な大思想家の真言密教・灌頂・導入・確立をインド・中国・日本の宗教・政治・社会状況などを背景に壮大なスケールで描き、**密教なるものが如何なるものか**を繰り返し語っている。（幾つか断片を拾ってみる）

○恐らく人類が持った虚構のなかで、大日如来ほど思想的に完璧なものは他にないであろう。大日如来は無限なる宇宙の全てであるとともに、宇宙に存在する全てのものに内在している。太陽にも内在し、昆虫にも内在し、舞い上がる塵のひとつひとつにも内在し、あらゆるものに内在しつつ、しかも同時に宇宙にあまねくみちみちている超越者である・・。

○大日如来は智慧と慈悲という２大要素で出来上がっている。宇宙の原理を過酷な悪魔的なものとしてとらえず、絶対の智慧と絶対の慈悲でとらえたところに純粋密教を成立せしめた思索者の思想的性格の温かみがわかるであろう。**宇宙は人間や万物に、釈迦が感じたような飢餓や老病苦死のみをあたえるのではなく、むしろ限りなく聡明でいたわり深い。**

○現世を否定する釈迦の仏教に対し、現世という実在もその諸現象も宇宙の真理のあらわれである、ということを考えた密教の創造者は、宇宙の真理との交信法として魔術に感心を持った点が、釈迦と著しく異なっている。魔術、呪文、マジナイの類は、山野に幾らでも転がっていた。・・それらのカケラの群れを溶かせつつ、巨大な宇宙の体系を作り上げた。

○密教は最も重要な部分では象徴主義をとっているがために、空海のように経典を読みつくしたというだけではどうにもならない。・・恵果は質問を受けるだけでなく、**口伝や動作以外では伝えようのない秘旨の全てを空海に教えた。・・**灌頂を受けつつも、両部の秘密（象徴）をことごとく学び、あわせて根本経典など二百余巻読み、**・・それも漢訳文と原文とを合存―対照―せしめつつ読んだ、**というのである。・・

○金剛頂経系は智（精神の原理）を説き、大日経系は理（物質の原理）を説く以上双方異質なもの・・。恵果はやがて「両部はじつは一つのものなのだ」・・**この「両部不二」という密教史上未到の着想は恵果に属するとはいえ、それを論理化するという気の遠くなるような作業を、空海がせおわされているのである・・。**

＜密教は実に奥が深い。凡夫の容易に解するは不可能なことだけを再認識して終わる＞

佐薙・高崎両君の歩行記録

東海道プラン＃6の第2日目の9月29日､石和田の怪我で､頓挫中止した計画が新＃7として復活された。
平成21年10月22日(晴)新＃7の第一日
佐薙、高崎（距離22.6㌔　時間7H10M　5H50M　歩数　48,000歩

新横浜駅6：00発、名古屋　7：26～7：40、名鉄安城駅着8：30
　8：45　石和田事故現場　ＪＡマーケット前
10：30　乗願寺　5分休、逢妻（川）橋、池立駅近辺（ビジネスホテル池立）
　　猿渡川橋、境川を渡る。
12：00～12：20　昼食、桶狭間古戦場跡、高徳院　（この後、迷路20分ロス）
　　有松絞り　（有松村）
14：00　三王山交差点（千鳥塚）(迷路30分ロス)
　　天白川(橋)　笠寺村（14：30）
15：40　七里の渡し跡
16：00　熱田神宮
16：10～16：13　神宮前駅
名古屋駅　16：30　サンルートホテル　16：40

名古屋駅から名鉄の新安城駅への途次、到着間近で　石和田が救急車で入院して、前額の手当てを受けた八千代病院が車窓から見えた。320病床のある新しい大病院で、額のタンコブの砂利を取り出す為、5針も縫い、翌朝、又ＣＴスキャンや脳波等も調べて貰って帰宅、異常無しの堅固な石頭に感心したのを憶い出した。
八千代病院を検索したら、創業1900(明治33年、平成17年320病床へ増築となっている。
昨年平均1日700人の患者数だから、地域の総合病院として繁盛している。

新安城駅から北へ国道1号線を越えて二本目が、旧街道、右角の信用金庫の信号を右折して、間もなく右にＪＡマーケットの看板がある。その道路の向かい側のレストランの駐車場が転倒現場であるが、大量出血の血痕を二人で探してみたが、雨に流されたのか何も残っていなかった。
佐薙が、レストラン等の証拠写真を撮っていた。
現場検証が終わって、反転　西へ向かって歩き始める。8：45分。
松並木を過ぎ猿渡川橋を渡ると、右手奥の無量寿寺への元禄道標がある。在原業平ゆかりの「かきつばた園」があるらしい。伊勢物語「からころも　きつつなれにしつましあれば　はるばるきぬるたびをしぞおもう」。
来迎寺の一里塚は、道の両側に土盛りした松の大木が現存する。
更に、池立の松並木（両側）があり、終わった所が五叉路になっている。右の結婚式場の建物の前の地下道を潜って国道1号線を横切り、左の細い道に入る。（中部建設協会マップ
②詳細図）

更に進むと又、5 叉路（中建マップ③）に出る。池立宿、吾々が 10 月 29 日泊まった「ビジネスホテル知立」も駅の近くにある。総持寺には家康の側室　於満之方　誕生地碑がある。
この後、逢妻川の橋の付近がややこしいが渡って石材店の前に出たら　ＯＫ。暫く 1 号線を行き、詳図⑤右へ迂回して、又 1 号線を渡る。乗願寺 10：30　最初の 5 分間休憩をとる。
境川は三河と尾張の国境になる。2500 人の戦死者を埋葬した戦人塚のある前後町は、今川軍が前後を争って壊走した由来の地名。

腹が空いてきたので、休み場所を考えていたら、桶狭間古戦場跡の看板があり、左折して間もなく公園風の木陰の跡地で、持参したおにぎりとお茶で昼食とする。
食堂や、蕎麦屋に寄るとすぐ小一時間になるので、佐薙のアイディアであり、20 分で出発。
すぐ道を挟んだ前に立派な高徳院（今川義元本陣跡）がある。
東軍（今川）が西軍(信長)に敗れた地と公園内の説明文は東軍贔屓に読めたのは、高徳院の前のせいだろうか？
この後、もと来た道を戻れば良かったものを、その侭道を進んだ為、25 分の時間のロスとなった。貧しいトタン屋根の家（朝鮮系か？）や狭い道、朝鮮人学校等があり、暫く行ってから間違ったことに気付き引き返す。
詳図①国道①に戻ったら少し左へ沿って歩いてから左の細い道へ入る。
大将ヶ根交差点で国道①を渡り、街道を行くと有松絞の有松村の古い軒並みに絞りの暖簾が出入り口にかかっている。併し現在どれ位の売り上げがあがるのか疑問である。昔は旅人相手に商ったほか江戸へも販路を拡大したとある。

鳴海宿を過ぎ、三皿交差点 13：50 を過ぎて、三王山交差点で又進路を間違えた。詳細図③参照。交差点の広い道路を横切る所を、左下南へ折れたらしい。暫くして気付いて、新聞配達所に入って旧東海道を聞いても三人の娘は誰も知らない。　近くに本笠寺駅があるか？と聞いても駅名も知らないので、戻る。途中不動産屋に入り､女主人が交差点迄戻り右折と丁寧に説明してくれた｡約 30 分ロス。　天白川の橋を渡り、笠寺で 5 分休憩。

山崎川橋と名鉄常滑線を渡り、三叉の道路を左折してから歩道橋で広い道を横切る詳細図⑥と間もなく宮の七里の渡し場跡に着く。15：40　グロス 7 時間 10 分。
船着場には船は無く、公園として時の鐘の塔と常夜塔がある。昔は七里の船旅が潮によっては十里にもなったようだ。
折角だから熱田神宮を参詣しようと戻る。三大宮だけに敷地も広く、樹木も多く社殿も立派だが、閉門近くの時間の為、人影も少ない。

直ぐ近くの神宮前駅より名古屋駅へ。サンルートホテルへ歩いて 17 時前に着く。
汗を流し、着替えて、一休み後、高橋治朗君設営の夕食会場「宮鍵」に行く。佐薙と同クラスの川添秀治君（名古屋在住）も同席 4 名。10 月 29 日だったら石和田も加えて 5 名の筈だったが..　高橋君のお言葉に甘えて、味噌鍋、ビール芋焼酎をご馳走になる。石和田の怪我を気遣う高橋に佐薙が、もう大丈夫と説明

した様子。
川添は二人が山岳部と知っていて、北ア、南アの高い山々の標高を披露したのには驚いた。
高橋は名古屋市商工会議所の副会長職を続けており、海外出張も多く、今年は 7 回、昨年 8 回、一昨年 10 回と忙しい様子。景気は悪くなったが、幸い船を造らなかったので、助かったと言っていたが、彼は賢明だったと思う。

10 月 23 日（金）晴　新＃7 の第二日　桑名から四日市～石薬師～庄野迄　佐薙・高崎
（距離：　25.9 ㌔（山渓）、30.5 ㌔（中部建設）、時間 8H25M　7H30M　歩数 52,300

5：00　サンルートホテル名古屋発
5：10～5：30　名古屋駅発
5：55～6：00　桑名駅発
6：10　海蔵寺
6：30　桑名七里の渡し
7：30　町屋川　朝食　7：45 発
8：30　朝明川橋
9：03　富田一里塚　9：30　富田川有料道路
10：10～10：25　海蔵橋　（朝食残飯）
11：00　四日市宿　諏訪神社
11：30　天白橋
12：00　日永の追分
14：15　石薬師宿
14：55　加佐登駅　15：33 発
16：28　名古屋駅　17：33 発
19：21　新横浜駅
七里の渡しは、海路不通となったので、宮から桑名迄は陸路となる。
サンルートホテル名古屋 4：30 起床、5 時ホテル発。近鉄名古屋駅　5：10 に着き、始発電車 5：30 に乗車し 5：55 桑名駅着。　6：00 桑名駅を出て、左へ進むと「桑名グリーンホテル」（9/30 泊る筈だった）の角を右折して、八間通りを進む。　左側の海蔵寺に丸に十の字の薩摩藩の旗が目についたので入ると、薩摩義士の墓があるので参詣した。
徳川 9 代将軍家重は、木曽三川（木曽川、長良川、揖斐川）の大治水工事を外様大名島津の財政疲弊を狙って宝暦 3 年（1753）に薩摩藩に命じた。鶴丸城では幕府と一戦の声が強かったが、家老平田靭負（ゆきえ）は、情理を尽くして説得し、947 名の武士が刃を捨て土木工事に当たり、宝暦 5 年 5 月に難工事を完成した。　幕府は高札を村々に立て、　1.食事は一汁一菜、馳走するな。2.草履、蓑等、安く売ったり、一切の便宜を計るな。3.宿舎は壊れても修理するな。4.幕府の悪口を聞いたら密告せよ等の命令を出した。この仕打ちに切腹、自害者 51 名病死者 33 名の犠牲者続出。14 ヶ寺に埋葬、平田も多くの犠牲者と費用 40 万両（藩財政の 2 年分以上）を費やした責任を取り、切腹。海蔵寺に平田他 21 基の墓石と、河川の千本松の大年輪の切り株が現存している。現在は、治水に感激して、毎年

住民のお祭りが行われている由。
海蔵寺で道草を喰ったが、八間通りに戻り、寺町通りを横切り、柿安を左折すれば、七里の渡し跡に出る。大きな鳥居は伊勢神社「一の鳥居」である。
渡し船場の宿として栄えた昔の面影はなく、途中に「焼きはまぐり」の幟旗の飲食店が二、三見られるのみである。
高い護岸工事の船着き場は、洪水、高潮予防の為か、味気無い。八間通りを横断した後、右に春日神社の立派な青銅の大鳥居がある。
桑名城跡の石垣に沿って、東海道を日本橋から京三条大橋迄の各名所を模した小公園があり、佐薙は、セメント製の小さな富士山を写真に収めていた。三重県の県庁所在地は津か四日市か何処だろうと言った我々二人の話を聞いていた通りかかりの仕事に出かける親爺さんが「津だよ。昔は桑名が四日市市より繁盛していたんだ」と答えて、急ぎ去って行った。
各曲がり角に東海道標石が整備され、又、お寺が多いのには驚く。中部建設マップには詳細図が無いが、道中日記の方に各曲がり角の地図が載っている。
火の見櫓の建っている矢田立場の丁字路を左折して進み、258 号線をくぐると伊勢神宮の常夜燈があり、員弁（いなべ）川に突き当たる。

往時は、旧町屋橋があったが、今は無くなり、小公園になっているので、昨夕の高橋君からのお土産、うなぎ弁当で朝食とするが、沢山入っていて、半分しか食べられない。又、左折して進む、近鉄名古屋線の伊勢朝日駅を越し、西光寺で左折する。
朝明（あさけ）川を渡り、関西本線と三岐鉄道をくぐり、三光寺の先を左折すると、富田一里塚(日本橋より 98 里)がある。
常照寺、力石で左折し、その先を右折する。高架下を進み、米洗橋を渡る。国道①を進み、
笹井屋支店で名物「なが餅」を試食しようとしたが、バラ売りはしない、先にある本店へどうぞと断られた。　海蔵川も古い橋は無くなり、川上に大きな新橋がある。川の手前の小さな公園のベンチには人が寝ているので、土手に腰を下ろし、残ったうなぎ弁当を食べた。10：00～10：25.
海蔵川と三滝川を渡った後の三滝川街道左側に笹井屋本店（1550 年創業）があり、佐薙は珍しくお土産一箱を買った。中身が粒餡だけで、家内はこし餡が好みなので家内へのお土産はパスした。　四日市宿場の中心だったこの菓子屋近辺は、さびれて面影は無い。宿場のはずれの諏訪神社の鳥居の下で小休止して、水の補給と用を足す。
四日市市はロングビーチ市と姉妹都市の縁で、市長やコミッショナー訪日時に、数回訪問したが、市の中心部は街道より離れた北側の近鉄線寄りにあり、見ることが出来なかった。
天白川を渡り、国道①と合流地点が日永の追分、先のＹ字路の左の道筋はお伊勢様への伊勢神宮道である。丁度 12 時になり、20 分の休憩をとるが、食べ物屋は近くにない。この後、国道①と合流を繰り返して、石薬師に着く。（この間、道中日記の詳細図参照）佐々木信綱の生家や、記念碑等がある、明治の国文学者の信綱は万葉集や多くの古典解説本で有名である。当地の名士である。鹿児島出身の高崎正風に師事した。

終点、加佐登迄もう一息という所で、携帯のベルがリュックの奥で鳴ったので取り出す。
松尾からの見舞いの挨拶、「今、病院かい？」　「いや歩いている」　「どこら辺か？」「石薬師はもう過

ぎて、終点近くだ」　に　事件を期待したのにがっかりした様子の声だった。
垬野の宿の手前の加佐登駅は駅長一人の閑散とした田舎駅で、1時間に1本、30分待ちになったので、駅のホームの中の洗面所で、汗を流し着替えた。
約1時間で、名古屋駅16：30着。駅の地下の飲み屋で、打ち上げ乾杯（しまむらさきがあった)。

（後記）
石和田が独りで、追試を試みたいという意向に副うため、いささか長すぎる説明文になって了った。
山渓の本の距離、桑名/庄野25.9キロは、中部建設マップでは、30.5㌔と4.6㌔も短いが歩数から考えて、後者の方が正しいと思った。時間が短いのは、昼飯抜きで、休憩も2時間おき位だったので、我ながら良くへばらなかったと思った。

以上

四郎兄

貴兄空白の部分を治郎兄のレポートなどを参考に予習されている由、この歩行部分で我々はたしか3ヶ所で道を間違えたと記憶している。そのうち治郎兄が2ヶ所の「道間違え」をレポ-トで説明している。小生なりに「道間違え」を再現出来る所は再現し貴兄の参考に供したい。
その1.治郎兄レポ-トｐ2　「腹が空いてきたので・・・」の部分。地図「鳴海・宮」のｐ1、詳細図①参照。そこまで少しばかり国道1号を歩いてきた。①に示された「高徳院看板」を見つけた。同時にその直前で左折する道のすぐ先に左側に「桶狭間・・・」の小公園（トイレあり）も見つけたのでそこで弁当を食べることにした。間違いが起ったのは食事後、国道1号に戻らず左折してきた公園の前の道を更に左に進んでしまったこと。従ってもし貴兄が「桶狭間・・・」に立ち寄ったとしたら、その後必ず一旦国道1号にもどり、「高徳院看板」を過ぎてすぐ先の細い道を左折すること。詳細図をきちんと読まなかったための間違いだった。

その2.同じく治郎兄レポートｐ2　「鳴海宿を過ぎ・・・」の部分。残念ながらこの部分、地図「鳴海・宮」のｐ4、詳細図③については小生何故間違えたかを今正確に再現できない。若しかするとこのあたり、新しい幹線道路やアクセス道路が出来ていたりして惑わされたのかも？

その3.治郎兄レポ-トｐ5　日永の追分の所。治郎兄は特に「道間違え」に触れていない。「石薬師・庄野」の地図ｐ1とｐ2の境。「一本の松」を過ぎ国道1号に合流しても進行方向右がわの歩道にＳＴＡＹしておくこと。そうすれば間違いは起らないだろう。小生は少し先を早呑み込みして国道1号を横断し左側の歩道に進んでしまったために地図上左下に進む大きな道路をしばらく進んでしまった。右側にＳＴＡＹして大きな鳥居で追分であることを確認して進めば間違いは起らない。初歩的なミスだった。

以上ご参考まで。尚、この2日の行程では昼飯時に適当な食堂が殆んどなかったと記憶している。
恭

＊佐薙・高崎の歩行記録、アドバイスをもとに無事踏破完了、満願成就。大感謝なり

＜転倒事故から１ケ月半後、関係者の理解、支援、協力によって復活、しかし小生は心身ともに言わば「病み上がり」に等しく、果たして、鈴鹿を越えて最終目的地、京３条大橋まで辿り着けるか、不安を抱いての再スタートであった＞

[17]２００９年１１月１６日（月）　庄野宿　亀山宿　関宿

佐蘿、高崎、石和田　（距離 16.3Km　時間 6H25m（4H45m　歩数 29.000）

０６：２６（ひかり５０１号）東京駅発　０８：２１/９：０３　名古屋着/発

０９：５４/１０：００　加佐登駅着/発

１０：１０　庄野宿入り口　庄野本陣跡石標　常楽寺　川俣神社　従是東神戸領石柱

１１：１０　和泉橋（安楽川）地福寺　ＪＲ井田川駅

１２：００　福善寺　石上寺　和田一里塚　亀山ローソク

１２：３０～１３：０５　江戸口門跡標柱　福泉寺　昼食　遍照寺　京口門跡標柱
慈恩寺　野村一里塚

１４：００　布気神社　大岡寺畷　小万のもたれ松

１４：５０　関宿　東の追分・一里塚　伊勢別街道
～１６：００　関宿内見学　関まちなみ資料館　関宿旅籠玉屋歴史資料館ほか

１６：２５　関ロッジ着

＜亀山宿の屋号つき町並み＞

亀山という地名は全国に数多いと言えるが「中国には東方海上に蓬莱山という不老長寿の楽園がある。其処へは亀が連れて行ってくれるという伝説があり、蓬莱山は別名・亀山とも呼ばれるようになった」そうだ。日本もそれにあやかったのだろうか？。

これまでにも、街道の両脇に昔の屋号を表示した宿場は幾つかあったが、この亀山宿ほど徹底した町並みはなかった。街道には屈曲があり起伏もあるが、淡いクリーム色の柔らかい舗装でとても歩きやすく、快適だ。

街道の南北両側、およそ**５００戸に屋号が付けてある**。名前だけでは何の職業だったか想像できないものもあるが、多くは鍋だ、桶だ、畳だ・・と昔をそのままに伝えてくれる名前であり、当時の人々の動きが見え声が聞こえてきそうだ。当時の暮らしは？・・と貰った資料で数えてみると、大工１４軒、左官４、米屋８、煙草屋５、・・、面白い。さて、酒屋は？３軒しか見つからない。庶民は今ほど飲まなかった？（のかなあ・・）

床屋３軒、髪結１軒、である。

江戸時代は外見が重要で、頭のてっぺんから足の先まで、細かい身なりの規則があったそうだ。殊に髪の結い方で身分が明らかだったと言う。武士は自分で月代を剃るように訓練されていたと言うし、町方となると「髪結い床」で剃ってもらう。法令で１つの町に１軒は「髪結い床」が置かれており、髪結いは町内が費用を出す町抱えの公務員のようなもので、同時に町内の人物監視役を兼ねていて、町内の人々の性格までも知り抜いていたそうだ。・・。終戦の頃までは床屋は町内に１つはあり「事情通」だった。名残であろうか。

＜関宿・伝統的建造物群保存地区＞

＜関宿の一角、吾人は建造物群の
一部とまではいかない？＞

佐薙が“じっくりと見たい。**往時の面影をとどめる唯一の町、是を駆け足で通り過ぎてどうする！**“というわけで、時間をかけて勉強した。電柱は地下、銀行でも郵便局でも外観は江戸時代？だ。たまに見かけるお年寄りなども、そのまま「伝統的建造物群」の一部の感がある。階段は急勾配、天井が低いこと、食事の品数も食器も寝るスペースも身分に依ってはっきりと格差？があっことなど・・。
江戸時代は暮しやすかったろうか？

［１８］２００９年１１月１７日（火）関宿　坂下宿　土山宿　水口宿

佐薙、高崎　石和田　天気・雨　（距離 26.7Km 時間 8H30m(7H15m)歩数 43.700）

６：１０　関ロッジ発　コンビニで朝食購入　鈴鹿川・国道１号に、つかず離れず進む
坂下宿　松屋本陣跡　大竹屋本陣跡　十一面観世音菩薩（岩屋観音）

８：１０/８：２０　片山神社・鳥居前で（雨の中）朝食　鈴鹿峠・石畳・急坂を登る

８：４０　鈴鹿峠頂上　万人講常夜燈　国道１号・
大型トラック疾走に恐怖を覚える

９：３０　第２名神国道下

１０：１５　田村神社（坂上田村呂）

１０：２０　道の駅　小休憩

１０：３５/１１：３５　土山宿　うかい屋　昼食
旅籠・井筒屋（森鴎外の祖父森白仙終焉の地）

１４：１５　水口宿入り口　脇本陣跡　本陣跡　問屋場跡

１４：４０　近江鉄道本線・水口石橋駅着　「あやの旅館」
の出迎え車を待つ

１５：００？「あやの旅館」着（濡れた靴・衣服乾燥用に
古新聞、ストーブの用意あり）

万人講常夜燈
＜鈴鹿峠・土山は雨だった＞

＜鈴鹿馬子唄の「あいの土山」とは・・＞

土山宿「うかい屋」の主は「完全・東海道五十三次ガイド」を発刊している「東海道ネットワークの会」の熱心なメンバーで、店には何時売れるかも知れない？アンチークを並べたり、創作料理に取り組んでいる６０歳ほどの御仁だ。

「鈴鹿馬子唄の”あいの土山“の「あい」の意味合いについて聞かせてくれた。諸説入り乱れて定説はないとのことだが・・。

１）相の土山説　坂（坂下宿）と相対する土山（土山宿）とする。鈴鹿峠を境に伊勢側と近江側では天候はがらりと違う。川柳に「土山で濡れた雨具を坂で干し」

２）間の宿説　宿駅制度が出来、土山が本宿に設定される以前は間（あい）の宿だったこ

とから、土山宿は坂下宿ほど繁盛していない事を唄ったとするもの。「照る」を「栄える」「雨が降る」を「さびれる」と解する。

3）鈴鹿の坂説　峠の頂上付近に土山という土盛があった。

4）間の土山、松尾坂説　坂を鈴鹿の坂でなく、松尾坂とするもの。

5）藍の土山説　当時土山では藍染めが盛んで藍草の栽培が行われていた。

6）鮎の土山説　当時、土山では鮎漁が盛んで、特産物として有名であった。

7）「あいのう」土山説　北勢地方では「間もなく」と言う意の「あいのう」という方言がある事から「間もなく土山へ着く」とか「間もなく雨が降ってくるだろう」との説。

＊　近代の統計では、伊勢湾側の「坂下」が琵琶湖側の「土山」よりは降雨量が多いそうだ。

＜あやの旅館・女将の鈴鹿馬子唄・・＞

「あやの旅館」の夫婦（今は息子夫婦が主体でやっている）は能登から出てきたとのことだが、陽気な女将さんは還暦々々などと言いながら「鈴鹿馬子唄」を自慢の喉で聞かせてくれた。地域の大会にも出場しているらしい。

佐薙が「ワイフが少々歌のセンスが・・」なんていいながら、女将の馬子唄のテープを貰ってきた。

まだ、マスターしたと言う話は聞いていない。それにしてもこの旅館のホスピタリテイーは大いによろしい。佐薙が今回リザーブした旅館のホスピタリテイーは全て抜群だったな。

[１９]　２００９年１１月１８日（水）水口宿　石部宿　草津宿

佐薙　高崎　石和田（朝のうち雨）（距離 25.4Km　時間 7H00m(5H45m)　歩数 38.000）

夕刻・松尾、夜・鈴木合流

７：１５　「あやの旅館」発（小雨）横田渡常夜燈

９：１０　三雲城跡　大沙川隋道　弘法の松

１０：１５　石部宿

１１：３０　大角家住宅隠居所　史跡旧和中散本舗（家康の腹痛快癒・命名）

１２：１５　手原駅　昼食（スパー・平和堂２F　直八そば）

１３：００　稲荷神社角へ戻る

１３：３０　目川一里塚　道標

１４：００　旧草津川　松尾から電話（既に草津駅着とのこと、意外の速さに双方驚く）

１４：１５　東海道・伊勢道、中仙道分岐点（追分道標）着

１４：３０　（松尾合流・うばが餅を仕入れてきて振舞ってくれた）～　史跡草津本陣（当時の姿を残す全国で唯一の本陣と言う・田中七左衛門本陣）草津市観光物産館脇本陣　草津宿街道交流館など（ボランテイアの町興し活動に感心）

１６：３０　草津第一ホテル着

１７：４0/２０：２０　「竹生」で夕食（琵琶湖特産・“ひがい”を知るやを問うも否。明治天皇が特に好まれたという小魚、今や絶滅種、明治は遠くなりにけり）

２０：３０　ホテル帰着　鈴木と合流　近くのコンビニで明朝の軽食を仕入れる。

＜草津本陣・田中七左衛門本陣は今に残る＞

草津は東海道・伊勢道と中仙道の分岐点、大変な賑わいだったようだ。
本陣を運営する田中七左衛門（民間人）は大赤字で大変だったろう。
此処には元禄年間から明治まで約１８０年間の大福帳が残されており、浅野内匠頭と吉良上野介が９日を隔てて泊まった記録などが残っている。

＜草津本陣入り口＞

総坪数１３０５坪、建坪４６８坪、屋敷内のどの部屋も立派で、襖絵、障子絵、杉板戸絵なども擬っている。大名用の上段雪隠（トイレ）、畳の間に漆塗りの便器を埋め込んであり、下に箱が置いてあり、１回使用するごとに処理したと言う。風呂も蒸風呂の様なものがあり、家来が三助よろしく洗い流していたそうだ。まあ、殿様と言うものは何んと手間のかかる存在であったことか。
馬だって特別の厩がちゃんと用意されていた。

＜本陣玄関＞

［２０］　２００９年１１月１９日（木）　草津宿、大津宿、京三条大橋（最終目的地）
佐薙、高崎、鈴木、松尾、石和田　宮川（京都・九条山頂上付近）合流　全員勢揃い

（距離 29.0Km　時間８H33m（７H00m）歩数 44.000　）

７：２０　草津第一ホテル発
７：４０　東海道・伊勢道、中仙道分岐点（追分道標）立木神社　野路一里塚跡石碑
９：４０　瀬田の唐橋　粟津
１０：４０　膳所神社　石坐神社
１１：０5/１１：２０　義仲寺　（義仲、芭蕉、巴御前墓所）札の辻　蝉丸・上、下神社
１２：２０　逢坂の関碑
１２：２５/１３：００　「かねよ」昼食（うなぎ、　きんし丼・厚揚げ卵が主役？）
走井　月心亭　山科　天智天皇稜前、亀水
１５：０５　九条山頂上付近　宮川合流　蹴上げ
１５：３７　京三条大橋・６名全員揃って到着（ゴール）

＜東海道・伊勢道、中仙道分岐点・追分＞

草津宿は東海道・伊勢道と中仙道が交わる場所。

近江、琵琶湖湖畔（滋賀、志賀）は景勝の地でもある。

多くの旅人がここで出会いと別れを繰り返したことだろう。

「比良暮雪」、「堅田落雁」、「唐崎夜雨」、「三井晩鐘」

「粟津青嵐」、「瀬田夕照」、「石山秋月」、「矢橋帰帆」

この近江八景は室町時代に選ばれたと言うが、いかにも優雅でいい。

＜東海道・伊勢道、中仙道分岐点＞

５人（宮川は京都で合流）勢ぞろいして、いよいよ最終・京三条大橋、仕上げに向かって歩き出す。

＜勢ぞろい、2009.11.19＞

＜瀬田の唐橋、長い歴史を見つめて、近江朝の哀史＞

近江は都の入り口、北へ行けば大陸（朝鮮半島）へ、という地理的な位置から、長い長い歴史の興亡、盛衰を見てきた。その舞台となり、通り道であった。

瀬戸内寂聴さんは「・・私が琵琶湖にひかれて度々大津を訪れるようになったのは、**近江遷都から壬申の乱までの歴史の舞台となった志賀の都の哀史に心がさざなみだつからである。・・」**と書いておられる。

藤原鎌足と謀って蘇我氏を倒し「大化改新」を成し遂げた中大兄皇子が天智天皇として６６７年に都を大津へ移し６７１年に没する。とその子の大友皇子（が即位したと言われる・弘文天皇）と天智天皇の弟・大海人皇子（後の天武天皇）の間で王位継承の争い（壬申の乱）が起こり、大友皇子は東から攻めてきた大海人皇子に、この瀬田の唐橋（この橋は壬申の乱、源平合戦、応仁の乱、本能寺の変、など、戦乱の度に何度も焼け落ちた）を突破されて敗北、**「近江朝」は僅か５年で終わった**（天武天皇は飛鳥の浄御原宮へ移った）。

＊　何故、天智天皇はわざわざ奈良から近江へ遷都したかについては諸説あるという。「中大兄皇子は百済復興に力を注いだが、６６３年の白村江の戦いで倭・百済連合軍は唐・新羅連合軍に惨敗。国外に大きな脅威を抱えることとなってしまった。この国外（朝鮮から攻められるという）からの脅威に対抗する政治体制を新たに構築する為、抵抗勢力の多い奈良から遠い大津を選んだ」というのが有力だそうだ。

この「近江大津宮」が何処にあったか、確たる決め手はないと言うが、三井寺に近い、「錦織・にしごり・町」の一角、（渡来人の中に養蚕、機織技術を持ったものが定着したことを表す地名だ）住宅地の中の３坪ほどの空き地に「志賀皇宮遺蹟」という細い石柱が建ててあるそうだ。

「儚く、ものの哀れ」にひかれる日本人の心情に立つと、「寂聴」さんならずとも、「心にさざなみが立つ」ことを覚える。

＜義仲、巴御前、芭蕉、３人のささやかな墓標・義仲寺＞

義仲寺もまた似た感慨に見舞われる寺だ。小さな、それこそ見過ごしてしまいそうな深閑、静謐な庵を思わせる佇まい。

木曽で育った山育ちの御曹司が「以仁王の令旨」によって平家追討の旗揚げをし、

巴御前の墓

義仲の墓

芭蕉の墓

倶利伽羅峠合戦など多くの合戦で鬼神の如き勝利をあげ、平家を都から追い散らし、源氏の中でいち早く上洛を果たしたが、頼朝を無視して単独行動をとったため、頼朝から目の敵にされてしまった。何しろこの人、**戦は得意だが、宮中儀礼もまつりごとも、人心のおさめ方も知らない為、間もなく「策謀に長けた」後白河法皇や公家達から「宮中の政治、文化、歴史への知識や教養がまるでない「粗野な人物」として疎まれ、あっという間に頼朝・義経他に追い落とされ、この「粟津の原」で討たれた。**

＊　山奥に育った義仲は、平氏一門や幼少期を京都で過ごした頼朝とは違い、そうしたものに触れる機会がなかったのだ。また京中の狼藉取締りの任務を与えられたが、連年の飢饉で食料事情が極端に悪化していた京都に、遠征で疲れきった武士達の大群が居座った為に都や周辺での略奪行為が横行、しかも京都守護軍は義仲子飼いの部下ではなく、近江源氏・美濃源氏、摂津源氏などの混成軍でとても統制できる状態になかったと言われる。また、皇位継承問題にも介入し、決定的な失敗をしてしまった。

こんな義仲に限りない親愛の情を抱いたのは芭蕉、「都では羽をもがれた鳥のようにボロボロになって死んだ義仲、不器用な“もののふ”」に心を寄せたのであろうか。

芭蕉は度々義仲寺を訪れ、遂には義仲の墓の隣に葬って欲しいと遺言した。

今も、女武者・巴御前、義仲、芭蕉と３人並んで、小さな、小さな石の下に眠っている。

“木曽殿と　背中合わせの　寒さかな”

（伊勢の俳人　又玄・ゆうげん・が 1691.９月、当寺に滞在中の芭蕉を訪ねての作という）

＜逢坂山・「かねよ」の「うな丼」は「厚揚げ卵丼」？＞

食通の松尾が楽しみにして「逢坂の坂」を這い登って漸く手に入れたのは、蝉丸だ清少納言だの歌碑ではなく、「かねよ」名物のうなぎ料理,「きんし丼」だ。

ところがこれがどうだ。うなぎは１枚、その上に厚い卵焼きがデンと乗っている代物。（事情通の鈴木は別品を注文）

「きんし・錦糸」とは大違い。損をしたのか得をしたのか、あてが外れたのか、佳きかな、よきかな。

かねよ・上きんし丼

（松尾・撮影）

＜着いたぞ！京三条大橋、遂に＞

九条山の坂の頂上で宮川と合流し、打ちそろって京三条大橋に到着。２００９年１１月１９日１５時３７分であった。

（京都で出迎える人は橋の西側、見送る人は橋の東側と言うから、橋を渡りきらないと完結とは言えないのかな？）

＊　実は小生にはまだ歩き残した区間（知立～庄野）があり、これをカバーして、はじめて完全踏破となるのだが・・。

京三条大橋東詰、高山彦九郎像前
鈴木、佐薙、高崎、石和田、宮川　（松尾撮影）

京三条大橋東詰、高山彦九郎像前
鈴木、松尾、高崎、石和田、宮川　（佐薙撮影）

此処まで来られたのは、何よりも仲間の友情、家族の支援があったればこそだった。

振り返れば、道中の３分１ほど、府中（静岡）まで来た５月下旬、アクテイブなメンバーの宮川が突然（急性）の心筋梗塞に襲われて休止、そして石和田が９月下旬、全道程の中程、知立宿の手前で転倒、救急車で病院に運ばれるという情けないアクシデント、このことにより「オーション会プロジェクト」は中断・挫折の淵にたたされてしまった。

しかし、“オーションの灯は消さず！“というメンバー一同の強い意欲、幸い宮川は近代医学による適切な処置と本人の強い生命力で順調に回復、石和田も前額部の裂傷、心身の落ち込みから何とか這い上がり、他の諸兄も大なり小なりの事情・ハプニングを克服して、見事全員でゴールテープを切った。

感慨一入である。（歩いてナンボ？の揶揄はもう忘れた！）

２月１１日、江戸、日本橋を出立し、前途は一体どうなるものかと半信半疑、それが街道を進むにつれて思いが前え前えと、この不満足な体をも推し進めてくれた。

松尾、鈴木は当初から「聴講生」、「つまみ食い」と称して、抱えている事情の許す範囲内での参加を表明し、その予言通り「街道名物の食べ物」のあるところ（うなぎ、なめし田

楽など）は何故かきちっと参加・受講（または別の補講でカバー）していた。

メンバーはとりどりなれども結局、別格のリーダー、佐薙は完全踏破、そして、大迷惑をかけた石和田も最終的には１歩も抜かさず歩ききった。無理をして転倒した小生を「敗残兵になるには勇気がいるんだぞ！」と諫め、励ましてくれた高崎は、ところどころ（２～３区間）キセル（賢く近代的な乗り物を利用）をしてゴール・インした。

他の３名も“何時の日にかは・・”との思いは抱きつつ、互いの壮挙に喝采を送り、全員のゴールを祝した。

京三条大橋の上
高崎、佐薙、鈴木、石和田、松尾　（宮川撮影）

リーダーの佐薙は「歩いてみて、自分がいかに知らないことばかりか！を痛感した。殊に歴史、宗教、・・、知りたいことが山のように出てきた・・」と相変わらず、若々しい学究的・好奇心を益々燃やしている。（東海道歩き・思いつくまま）

高崎は「先ず寺・神社の多さに驚き、今後の維持、管理までを心配する（町内・世話役の苦労の片鱗か)。地域毎の宗派別寺院の分布などを見るにつけ、仏教の宗派、教義について、もっともっと勉強せねば・・と思う。また「道路の広さ・規格」に表される江戸幕府の国内統制の徹底振りについて感心。他方、今日の「旧東街道」の案内表示については地方自治体毎の格差」を嘆く。

松尾芭蕉ならぬ「松尾寛二（閑児)」は洒脱な川柳？でこれを述する。

◍京までと　人に伝えて　江戸の春　（初日、品川宿はずれの薬局でバンドエイドを求めて）
◍惜しみつつ　橋を渡れば　秋の雲　（瀬田川を渡る心境、間もなく終着点だ）
◍安着と　江戸に伝えよ　彦九郎　（三条大橋、吾は勤皇の志士、奥様に確かに）
〇長旅で　右舷にかしぐ　クリッパー（休もうか？ジロウさん）
〇街道を　おでこで歩く　タフな奴　（五体不満足、無理をするな、年じゃ）
〇名物と　聞けば出てくる　ずるい奴　（誰だ！一体、克ちゃん聞こえるか？）
〇塚ごとに　休んで欲しい　馬じゃなし（一里塚横目で通過は恨めしいよ、コンビニなら）
＊　酌み交わす　これが何より　つぎも楽しみ（宮さんよ、楽しみに惹かれて先え、四郎）

「平成２１年霜月１９日、３時３３分３３秒。オーション会有志６人打ち揃って京の三条大橋をわたることが出来、本懐達成、目出度し、完歩された３人の勇者に敬意を表する」と。

鈴木は「名古屋、今は遠くにありて想う故郷だが・・、桑名、四日市は車で何度となく通った馴染みの深いところ、桑名の湊は昔は遊郭で歌行灯などという古いうどん屋などがあって、なかなか風情のある町だった・・。“行く秋を　久しき友と　送りけり（芭蕉？）”」と「石和田の単独行の無事を祈りつつ」、思いをこめて懐かしんでいる。

宮川は「途中脱落してしまったが、最後の三条大橋を諸兄と一緒に渡ることが出来て、忘れえぬ思い出となった。仲間の記録を読んで、“ああそういう事だったのか”と教えられたことが多い。よくもこれだけ掘り下げて、街道歩きを肉付けしたものだと感服、その他では味わうことの出来ない街道歩きの楽しみを、改めて教えてもらった。こう見るとオーション会のプロジェクトはまさに“奥の深い一大プロジェクト”だ。
“春めくや　老爺若やぐ　日本橋”」と懐かしく振り返る。

小生の所感は限りなくあるが、江戸を出るときの「１２６里余を古の人達を思い描きながら歩いてみたい」という希望は適えられたように思う。国道を飛ばす大型トラックや旧街道の通勤・通学時の風景などでは、現代に引き戻されたが、総じて見聞は過去との対話で満たされた。寺院、神社、石碑、灯篭、、石ころ坂道、古風な町並み、そして、山、川、並木・・、其処に刻まれた長い時間、繰り返される人間の営み、興亡、盛衰、悲喜こもごも、運、不運　ああ、何んと言う重みであろうか？
我らもまた永遠に繰り返される無数の、生まれ滅びてゆく小さな命の１つとして今を生きていることを噛み締めながらの五十三次であった。

＜データー総括＞・「最終版」東海道ウオークの歩行記録（佐薙による標準的なもの）
・石和田は単独歩行の区間あり、若干相違

総括：　距離　４６４・６キロ（山渓ベース）＊宮～桑名間・海上７里、２８Ｋｍは除く
時間　グロス１６０時間、ネット１４０時間　所要日数１９日
歩数　グロス８２３千歩
費用　２２４千円（佐薙ベース、三条大橋で帰宅したとして）
＊石和田は所要日数２０日、１日多い。
＊所要時間は約２時間～２時間半　多かった。

＜参考資料＞

◍完全　東海道五十三次ガイド　東海道ネットワークの会　講談社文庫（学友・井橋君から）
◍「広重五十三次」を歩く[上]・[下]　日本放送出版協会　NHK 出版（　〃　借用　）
◍江戸・大正・平成　東海道五十三次いまむかし　マール社　（　〃　〃　）
◍東海道　さんさく　マップ２２分冊　（社）中部建設協会
◍宿駅散策　近江東海道中絵巻　一・二　近江歴史回廊推進協議会　近江東海道部会
◍ネット情報、佐薙、宮川、高崎などの収集資料他

＜補記＞

平成２１年１１月１９日

＊　目出度くゴール・インの後、松尾、鈴木（草津のホテルに置き忘れた入れ歯を回収後）は夫々帰宅。

＊　佐薙、高崎、宮川、石和田の４人は、宿願達成の余韻に浸るべく、京都・大原手前の、「八瀬　かまぶろ　ふるさと」に一泊した（紅葉の京都でホテルを見つけるのは至難の業、幸い高崎夫人の祖父が創業したと言う情趣豊かな老舗にお世話になれた。）
久しぶりに宮川も加わり、歓談尽きるところがなかった。

平成２１年１１月２０日

＊　佐薙、高崎、宮川は大原三千院の紅葉を見物に、石和田は旧友に会うため別行動。

＊　朝、午前９時過ぎ「ふるさと」発、３君は三千院行きバス、石和田は勢いに任せて徒歩で友人との約束、三条大橋・彦九郎像を目指す。
所要時間２時間２０分、１６，０００歩。（３君がバスから、てくてく歩いている小生を見けたとの話をあとで聞いた）
久しぶりに畏友・酒井敏明・幸子夫妻と再会。同君は米国・エール大学、大学院留学時の仲間で、京大・山岳部 OB、ヒンドウークシュ山脈のノシャック峰、パンジャップヒマラヤ、インドサラン初登頂など、山に憑かれて博士課程を含めて大学在籍１４年、日本山岳会・京都支部長、６０歳頃にはキリマンジャロにも登っている山の“申し子”、アフガン辺境の学術調査で大怪我をした御仁、小生の頚椎損傷を気遣い、わざわざ京都から見舞いに来てくれた。現在は京都・山科区、天智天皇の御陵のある「御陵・みささぎ」に住んでいる。（昨日、通った所だ）
名所・旧跡、数多ありすぎる京都で、先ず拝見したのは、門跡寺院・青蓮院の１１４４年創建以来初めてご開帳となった「国宝・青不動明王童子像」。
「不動明王は密教の仏である。諸々の災難や心を悩ませ惑わせるものに、険しい怒りの表情（忿怒相）と揺ぎない心（不動心）で、敢然と立ち向かう。不動明王には、悪行や煩悩を滅し、魔障を払う力があり、私たちの煩悩を焼き尽くし、正しい道へと導いて下さる・・」とある。「願いごと」を書いて、青不動明王にお祈りして辞去した。
境内にある数本の楠の巨木が印象深い。
そのあと、いささか次元が低いが、豊臣、徳川の因縁、方広寺の「国家安康」、「君臣豊楽」の鐘を見て、ちと遅い昼食となる。
東山の一角、石田三成の軍師、島左近の邸宅跡に寛永年間に創業してから３７０年、京都市の歴史的意匠建造物に指定されていると言う、京料理「道楽」でゆっくりと歓談。
満足一杯の「旅の締めくくり」とさせてもらった。

一度断念した「東海道五十三次」、こうして締め括り、その記録を認めることが出来たことに深甚の感謝を申し上げたい。

２０１０年3月２９日　擱筆

「最終版」東海道ウォークの歩行記録

Trip#	Station	From	距離・キロ	標準所要時間	To	歩行日	実所要時間 GROSS	実所要時間 NET	歩数	参加者		山渓vsNET
#1		日本橋	7.8	2H	品川					石和田、佐薙、高崎、松尾、宮川		
	1	品川	9.8	2H30m	川崎							
	2	川崎	9.7	2H30m	神奈川							
		小計	27.3	7H00m		2009/2/11	8H50m	8H10m	47,000			1.17
#2	3	神奈川	4.9	1H15m	保土ヶ谷					石和田、佐薙、鈴木、高崎		
	4	保土ヶ谷	8.8	2H15m	戸塚					松尾、宮川		
	5	戸塚	7.8	2H	藤沢					(鈴木は藤沢まで)	茅ヶ崎まで	
		(茅ヶ崎まで)	29			2009/3/5	8H30m	7H30m	46,000			
#3	6	藤沢	13.7	3H30m	平塚					石和田、佐薙、高崎、松尾	茅ヶ崎から	
	7	平塚	2.9	45m	大磯					宮川		
	8	大磯	15.6	4H	小田原		7H50m	7H10m	39,000			
		(茅ヶ崎から)	24.7	*13H45m		2009/3/13	*16H20m	*14H40m	*85000		*は#2と#3通算	*1.07
#4	9	小田原	16.5	7H	箱根	2009/4/27	6H50m	6H20m	33,000	石、佐、鈴、高、松、宮		0.9
	10	箱根	14.7	3H45m	三島					同上(鈴木、高崎は三島迄)		
	11	三島	5.8	1H30m	沼津							
	12	沼津	5.9	1H30m	原					松尾は終了後帰宅	宿泊は沼津にもどる	
		小計	26.4	6H45m		2009/4/28	9H45m	9H00m	47,000			1.33
	13	原	11.7	3H	吉原					石和田、佐薙、高崎、宮川		
	14	吉原	11.1	2H45m	蒲原							
	15	蒲原	3.9	1H	由比							
		小計	26.7	6H45m		2009/4/29	9H00m	8H15m	47,000			1.22
	16	由比	9.1	2H15m	興津					同上		
	17	興津	4.1	1H	江尻							
	18	江尻	10.5	2H45m	府中							
		小計	23.7	6H00m		2009/4/30	7H50m	6H40m	33,000			1.11
		#4計	93.3	26H30m			33H25m	30H15m	160,000			1.16
		累計	174.3	47H15m		7日	58H35m	53H05m	292,000		累計ベース	1.12
#5	19	府中	5.6	1H30m	丸子					石和田、佐薙、鈴木、高崎	同上(箱根東坂を除く)	1.17
	20	丸子	7.8	2H	岡部							
	21	岡部	6.7	1H45m	藤枝					鈴木は藤枝に泊まらず帰宅		
		小計	20.1	5H15m		2009/5/25	7H15m	6H30m	36,000			1.24
	22	藤枝	8.6	2H15m	島田					石和田、佐薙、高崎		
	23	島田	3.9	1H	金谷							
	24	金谷	6.5	1H45m	日阪							
	25	日阪	7	1H45m	掛川							
		小計	26	6H45m		2009/5/26	9H30m	8H30m	48,000			1.26

	26	掛川	9.5	2H30m	袋井					同上		
	27	袋井	5.8	1H30m	見附							
	28	見附	16.4	4H	浜松							
		小計	31.7	8H00m		2009/5/27	10H00m	8H20	51,800			1.08
	29	浜松	10.8	2H45m	舞阪					同上		
	30	舞阪	5.9	1H30m	新居					但し高崎は新居から帰宅		
	31	新居	6.5	1H45m	白須賀							
	32	白須賀	5.7	1H30m	二川							
		小計	28.9	7H30m		2009/5/28	9H35m	8H15m	50,500			1.1
		#5計	106.7	27H30m			36H20m	31H35m	186,300			1.16
		累計	281	74H45m		11日	94H55m	84H40m	478,300			1.13
#6	33	二川	6.1	1H30m	吉田					石和田、佐薙、鈴木、高崎	途中道に迷い約1Hロス	1.16
	34	吉田	10.2	2H30m	御油					松尾		
	35	御油	1.7	30m	赤坂					宮川が夕食に参加、翌朝帰宅		
		小計	18	4H30m		2009/9/28	8H05m	6H15m	41,200			
	36	赤坂	8.8	2H15m	藤川					鈴木と松尾は途中帰宅	*岡崎・知立間で石和田が転倒	
	37	藤川	6.6	1H45m	岡崎					途中打ち切りの為この日の	負傷、新安城付近で中止	
	38	岡崎	14.9	3H45m	池鯉鮒*					歩行距離は推定で約25キロ	病院で治療、知立まで電車利用	
		小計	30.3	7H45m		2009/9/29	8H30m	7H50m	49,000	石和田、佐薙、高崎	9/30安城から帰宅	
		#6計	48.3(−)	12H15m(−)			16H35m	14H05m	90,200			
		累計	329.3(−)	87H(−)		13日	111H30m	98H45m	568,500			
#7	39	池鯉鮒	11	2H45m	鳴海					高崎	道間違い2回	
	40	鳴海	6.5	1H45m	宮					新安城からスタート、推定26キロ		
		小計	17.5	4H30m(+)		2009/10/22	7H25m	6H40m	48,000			
	41	(名古屋)		電車利用	桑名							
	42	桑名	12.5	3H15m	四日市							
	43	四日市	10.7	2H45m	石薬師					JR加佐登から帰宅	道間違い1回	
		小計	23.2	6H00m		2009/10/23	8H55m	7H55m	52,300			
		#7計	40.7	10H30m(+)			16H20m	14H35m	100,300			
		累計	370	97H30M		15日	127H50m	113H20m	668,800		累計ベース	1.16
#8	44	石薬師	2.7	45m	庄野					石和田、佐薙、高崎		
	45	庄野	7.8	2H	亀山							
	46	亀山	5.8	1H30m	関							
		小計	16.3	4H15m		2009/11/16	6H25m	4H45m	29,000			1.12
	47	関	6.5	1H45m	坂下							
	48	坂下	9.7	2H30m	土山							
	49	土山	10.5	2H45m	水口							
		小計	26.7	7H00m		2009/11/17	8H30m	7H15m	43,700			1.04
	50	水口	13.7	3H30m	石部							

	51	石部	11.7	3H	草津					夜、鈴木と松尾が合流
		小計	25.4	6H30m		2009/11/18	7H00m	5H45m	38,000	
	52	草津	14.3	3H30m	大津					宮川が蹴上付近で合流
	53	大津	11.7	3H	三条大橋					6人で三条大橋を渡る
		小計	26	6H30m		2009/11/19	8H33m	7H00m	44,000	
		#8計	94.4	23H30m			30H28m	24H45m	154,700	
		総合計	464.4	121H45m		19日	158H28m	139H05m	823,500	

0.88
1.08
1.05
1.14

合計　　464.4K　121H45m　（距離と標準所要時間は「東海道を歩く」山と渓谷社版による）

記録作成：佐薙　恭（歩数表示は佐薙手持ちの万歩計による）

総括　　実働　19日

		実働時間		
	距離	GROSS	NET	歩数
TOTAL	464.4K	160H	140H	824K歩
一日	24.4K	8.4H	7.4H	43.4K歩
MAX	31.7K	10H	9H	52.3K歩
MIN	16.3K	6H25m	4H45m	29K歩

東海道歩き・思いつくまま　（その 1）

佐薙　恭

＊東海道を歩き始めて気がついたことの一つ。街道筋には（そして多分日本には）なんとお寺が多いかということ。（一億を越す日本人の殆んどが一生のうちいつかはお寺のお世話になるからだろうか。）

＊日本の仏教の主な宗派は 13 あると何かで読んだ。しかしＴＲＩＰ＃5（注 1）までに目にしたお寺の大部分は、臨済宗、曹洞宗の禅系のものと法華系のものだ。天台宗や真言宗などは少数だった。これまでの地域に対しては鎌倉幕府の影響力が極めて強かったことを意味しているのだろうか？　今後中京、そして京都に近い地域では違った傾向になるのだろうか。法華系については鎌倉幕府による弾圧にもかかわらず総本山・身延山が近く、その強い影響力によるのだろうか。学生時代、日本史の勉強は手抜きしてしまったのでこういうことでわからないことが多い。（「現在、遠州地区の寺院の約 8 割が曹洞宗で、江戸時代には 9 割をこえていた」との記述を復習の過程で見つけた。静岡県の歴史散歩・山川出版社ｐ235）

＊いくつかのお寺に強い印象を受けたがその内の一つは興津の清見寺（臨済宗）だ。山門と本殿の間を東海道在来線が走っている。その境内にある五百羅漢が忘れられない。石像の一つが亡父の面影を感じさせたからかもしれない。再訪してみたい気持ちになる。

＊「箱根の山は天下の険」とうたわれている。しかし今の時代、車で芦ノ湖周辺を訪れた人にはとても「天下の険」という実感は湧かないだろう。自分の脚で歩いてみると箱根越えが昔の人にとって実に大変なバリアーだったことがよくわかる。何しろ小田原からは８５０メートルほどの高度差を登りきりきびしい関所へ、そしてその同じ高度差を下らなければ三島に達しないのだから。これは今時のハイキングでは中級クラスのアルバイトだ。三島に着いたら少々羽目をはずしたくなる昔の人の気持ちもよく理解できる。

＊東海道を歩くといっても、日本橋から始めて小田原宿（9 番目の宿場）あたりまでは今や東京、それに続く横浜の大きな経済圏につながった排ガスの中の都市ウォークで、江戸時代の街道風情やその当時の自然を感じさせる場所は少ない。箱根の東坂、西坂あたりから往時を偲ばせる雰囲気が多少現われる。三島、沼津ではまた都市ウォークに戻る。次に旧東海道らしくなるのは富士川を越える頃からだ。その先、江尻（清水）、府中（静岡）、浜松、吉田（豊橋）などの宿場は今や近代都市だが、その間に点在する興津、由比、丸子、日坂、白須賀、二川などは程度の差はあるが江戸時代の面影を感じさせる好ましい宿場だ。（ＴＲＩＰ＃5 を終えたところで）

＊横浜に住んでいて、日常「もみじマーク」をつけた乗用車を見る機会はそれほど多くない。ところがあまり都市化されていない街道筋ではこのマークをつけた車が実に多い。若者の大半が都市に出てしまい地域での高齢者の比率が都市部より大幅に高いからだろう。また高齢者といえども自分で車を動かさないと日常生活が困難なのだろう。街道筋にたまにバス停がある。そこに示された時間表をその地域の住民の立場で見ると便数の少なさに絶望的な気持ちになる。そしてそういう場所では「コンビニ」も、まして「スーパー」などは全く存在していないのだ。

＊街道筋の中都市の宿を早朝に出て歩き始めると、はじめは幹線道路の自動車の流れはまばらだが、やがてひっきりなしの乗用車の流れへと変わる。よく見ると殆んど運転者一人だけだ。想像だが近在の工場や事務所などへの通勤のようだ。公共の交通機関に恵まれない地方居住者にとって自家用車は、老いも若きも、生活必需品なのだと感じる。

＊以前から「下げ米、上げ塩の輸送を可能にした駿河と甲斐の国を結ぶ富士川舟運」に興味を持っていた。富士川は日本三大急流の一つといわれている。上流の鰍沢から河口近くの岩淵まで（７１キロ）下りは6～8時間だったらしいが、帰り鰍沢までどうやって急流に逆らって船をもどしたのか？というのがしばらくの疑問だった。もと船会社勤務の仲間の一人が（同業者の権威あるらしい）ある人からの話として「馬に引かせた」と伝えてきた。その頃馬が力を出せるような足場のしっかりした道が急流沿いに造れただろうか？というのが次の疑問だった。するともう一人の仲間がインターネットで検索した結果として「舳先に綱をつけ両側から人力で引っ張り、後ろから竿で押した」と調べてきた。「上りには４日ほどかかった」そうだ。その関係の資料が富士市博物館などに展示されているとのことなのでいずれ見学に行こうと思う。北斎や広重の絵には時々風景の前景に当時の人々の生活ぶりを描いたものがあるのだが、今までのところ、船を引っ張っていく光景の絵にはお目にかかっていない。あるのなら是非見て確かめたいものだ。

＊ＴＲＩＰ#5 を終えた時点で次の大きな川を渡った。多摩川、相模川、酒匂川、富士川、安倍川、大井川、天竜川。あまり有名ではないが自分としては興味があったのは黄瀬川と潤井川（いずれも富士山の伏流水を水源としているので)。これらのうち当時、船を使って渡ったのは相模川、富士川、天竜川。徒渉制度をとっていたのは酒匂川、安倍川、大井川などだという。天候や水量の影響を受けて大変なことだったろうと想像する。多摩川（六郷川）ははじめ木製の橋があったが流失して渡船になったとのこと。これらの川を渡る時、山岳部ＯＢの自分はいつもこの川の上流の水源地の山々に思いを寄せるのだ。

＊安倍川と大井川を渡る橋の下の河原に赤い花がびっしりと咲いていた。集落の人からも

らった情報をもとに帰宅してから図鑑で調べると「ムシトリナデシコ」という南ヨーロッパ原産の種で江戸時代末期に渡来したそうだ。お墓の供え花などから種がこぼれて帰化するに至り河原や砂地で広く見られるようになったという。茎に粘り気のある液が出て虫が付着するのでその名があるが食虫植物ではない由。

＊野鳥観察を趣味とするので行程中はいつも双眼鏡を首にぶらさげている。藤枝から島田に向けて歩いていると聞きなれない奇妙な鳴き声が聞こえてきた。はじめは蛙かと思ったが少し離れた倉庫の上に数羽の脚の長い中型の鳥がいてさかんに鳴いている。双眼鏡でのぞくと数年前に名古屋湾の干潟で一度だけ見たことのあるチドリの仲間「ケリ」だった。珍鳥というほどではないが局地的にしか見られない鳥だ。「どんな字を書くのだ？」と仲間に質問された。バードウォッチャーはいつもカタカナで記録する。帰宅して漢字を調べると、「計里」或は「鳧」と書く。後者は「鳥」の下に「風」の外側という不思議な字だった。

＊首からさげた双眼鏡は野鳥観察以外に役に立つことの方が多い。何しろ知らない都市や村落の中、地図を片手に歩くのだが、双眼鏡を使えば先の方の信号の下の町名表示や道標などを肉眼より相当早い時点に遠くから読むことができるのだ。殆んど必需品だ。

＊会社勤務の現役時代、出張のため東京･名古屋間を数え切れないくらい東海道新幹線で往復した。今も時々私用で小田原・名古屋間を新幹線、主として「こだま」で往復する。だから新幹線のその間の各駅の名前、順番も殆んど正確に言えるくらいなのだが、今回東海道を歩き始めて、自分が今までよく理解していたと思っていた東京・名古屋間の地域は単に新幹線という人工的に作られ限定された線上の極く狭い幅の地域でしかないということがわかった。少年の頃、安城に住む祖父を訪ねて（在来の）東海道線鈍行に何度か乗った。今回の歩きで新幹線には関係ない幾つかの記憶に残る在来線の駅の名前の町に再会した。例えば草薙、藤枝、島田、金谷、袋井など。確かではないが多分昔はなかったのではないかという駅の名もあった。磐田など。そして新幹線は勿論、在来線からも程遠い村落に幾つかの東海道の宿場があった。例えば岡部、日阪、白須賀など。これらの宿場の名前は今回のウォークの予習を始めるまで全く知らなかった。そしてそれらが何れも好ましい雰囲気の場所で、新幹線での直線的往復ではおよそ味わえない経験だった。

＊道中の忘れがたい人々：(1) 旅の最初の夜、仲間と打ち上げを横浜の居酒屋で行った。支払担当の仲間が支払を済ませてから店の中のどこかで財布を落とした。横浜駅で気がついた彼はあわてて居酒屋にもどった。中身がたっぷりのその財布は他のお客が拾い既にお店に届けてあった。「横浜の人はモラルが高い」が彼の感想。(2) 箱根の民宿。電話で予約の時、受けた先方は老婦人という印象だった。宿に着いてみるとその老婦人がお手伝いもなし一人で我々6人の食事を、ワカサギの天ぷらを揚げるなどして用意してくれた。我々一

行も高齢者だがと、年齢の話になったところ、彼女は91歳。驚いた我々の皿洗いの手伝を、という申し出ではぴしゃりと断られた。しかし布団を敷くなどは自分たちでやった。別れ際に写真を撮った。彼女に送ったところ、すぐにお礼の電話があった。(3) 藤枝の宿。仲間の一人はここでウォークを打ち切り泊まらずに帰宅するので、「駅までのタクシーを呼んで」。宿の娘さんが即座に「私が」と言って自分の車で送ってくれた。歩けば数十分かかる距離だった。(4) 白須賀の宿場の手前に潮見坂がある。登り口の道標の表示を読んでいると、すぐ隣の家の老婦人が飛び出してきて是非寄っていけと熱心に勧める。恐るおそる土間に入る。94歳になるという彼女は地元のＴＶや新聞に登場する街道筋の名物婦人らしい。しばらくのおしゃべりの後、記念にと手作りの小さな草履をプレゼントされた。今までに街道を歩く700人くらいに渡したという。

＊今回のプランは自分一人でも実行するつもりだったが、学校山岳部の同期の仲間に話したところ、予想以上に参加希望者があった。もう高い山は無理だが平地なら何とかなるか、という気持ちからだろうか。しかしＴＲＩＰ＃5を終えた時点でここまでの全行程を歩いたのは小生と石和田の二人だけだ。以下仲間たちについて。
石和田は数年前山で転倒事故を起こし、その影響で脊椎手術を余儀なくされ自称「五体不満足」。始めは完歩が懸念されたが、強い意思と若い時に鍛えた基礎体力、多分後半戦の三条大橋までの行程も問題なくこなすだろう。
宮川も全行程完歩に強い熱意を持ち、＃4まで毎回ルートについて綿密な予習をしてくるなど強力な同行仲間だったのだが、不幸にして＃5の直前、心筋梗塞で倒れ緊急入院。発病が＃5の行程中でなかったのは不幸中の幸いだった。今後の体調快復次第では秋からの後半戦に部分参加が期待されるのだが。
高崎は＃1から＃5まで毎回参加の常連だが、数回途中でバテてＧＩＶＥ-ＵＰ。その歯抜けの部分に「自主的追試」を試みるのかどうか。
松尾と鈴木は家庭の事情などあり散発的な参加。松尾は不参加の時、頃合を見計らって携帯で応援をして我々を元気付けてくれる。(2009/6/10記)

注1　ＴＲＩＰ＃1～3　は日帰り3回で日本橋から小田原まで（09年2～3月）、ＴＲＩＰ＃4は3泊4日で小田原から府中（静岡）まで（09年4月）、ＴＲＩＰ＃5は3泊4日で府中から二川まで（09年5月）。ＴＲＩＰ＃6は09年9月末の予定。＃7で三条大橋到着の予定。

［添付資料Ｎｏ１］

諸兄（佐薙、鈴木、高崎、松尾、宮川）

「喜寿の東海道五十三次漫遊録」送付のこと

―お詫びと現況報告を含めて―

今回、「オーション会・夢のプロジェクト」を挫折させ、また、多大なご心配・激励を頂き、深きお詫びと心からの感謝を申し上げます。
お陰様で外傷は殆ど消え、あとは「メンタル・リカバリー」でしょうか。

諸々の思いをこめて此処に「未完」の「喜寿の東海道五十三次漫遊録」を送付します。
老弱輩の「ロマンに満ちたプロジェクト」への思いの一端などを感じ取っていただければ救われます。

メモなど殆ど取らず、ボケ頭の記憶による極めてアバウトな「綴り方」です。
好きなこと、興味のあるところだけ長々と横道にそれたりして、読まれていて甚だ退屈、時間、エネルギーの無駄になろうかと大いに恐れております。
（距離、時間、歩数は佐薙の公式記録、写真は松尾、宮川、佐薙撮影のものによります）
読むに値せず（PC 技術が稚拙な為一層読みにくい）となったら遠慮なくぶん投げて下さい。
それが友情です。

今回の「落ち込み」に対し諸兄から頂いた暖かい友情、身にしみました。
佐薙からは「計画は往々にしてぼしゃる。Don't Mind Take it Easy,いずれ Recovery Plan は作るつもり、オーションの灯は消さないよ」と
鈴木からは「躓いて転んだそうだが、小生の躓きに較べれば細々、君の強運力、信心力に感心する」と
高崎からは「敗残兵になるには勇気が要るのですぞ！頑張り過ぎないように。当面は怪我の回復に努め、もとの男前？にもどれ」と
松尾からは「当分の間は蟄居・謹慎、写経・念仏を怠るでないぞ。そのうち反省会でもやろう」と
宮川からは「疲労が心臓に来なくてよかった。オション会・夢のプロジェクトの灯は消さないで欲しい。何時の日か皆で京三条に立とう」と
（春日井が居たら何んと言っただろうか？「何だ、またやったか、しょうがねえなあ・・」）

60年の間に培われた友情は小生の宝、何時までも何処までも持ち続けたい。
今や「五体不満足」はメンタルを含めて「六体不満足」、己の分を弁えつつ諸兄の後をとぼとぼとついてゆきたい。

2009年10月17日

石和田　四郎

［添付資料No2］

転 倒 始 末 記

［1］発生

（1）9 月 29 日、永安寺で小休止の後、４０分ほど「知立」側へ進んだ、レストラン風の建物の前広場、午後 4 時ごろ、休憩に入ろうとした時、足がもつれて転倒、前額部をアスファルト面に強打した（受身が取れなかった哀れさ・悲しさ・情けなさ！）

（2）その瞬間から意識はあったが出血多量、レストランからも３人ほど夫人が飛び出してきて救急車をという声。(頭を打った直後、４年前の夏、黒部源流への下りで２～３回、道端の岩に頭をぶつけたのを思い出し、ああ佐薙にまた！という思いがすぐに襲ってきた。)

［2］緊急処置

（1）救急車は５～６分で到着か？前額部からの出血は多量でタオルが血染め？になる。痺れているのか痛みは感じない。身体の他の箇所には目立った外傷も痛みもないようだ。（これで４年前に損傷した頚椎までもやられていたら「万事休す」だった。ありがたい）

（2）佐薙、高崎も救急車に同乗してくれて、運ばれること１０分程度か。
両兄が石和田のリュックから常時携行の「医療袋」を取り出し、健康保険証、心筋梗塞に関わり服用中の薬品の名称などの情報を手際よく取り出してくれる。

（3）安城市・八千代病院、処置室にごろごろと搬入？される。(両兄には手を合わせる思い、暫くは隔絶、別次元に入る)
担当医は「沓名医師」３０才代前半か？他に看護師２名。
信州大学卒。「八千代」って千葉にもあるでしょう、千葉の市原には居たことがある・・などと会話を交わしながら処置にかかる。
傷口はスパッと切れているのではなく、言わばザクロかイチジクのように「ぐじゃぐじゃ」になっているようだ。
消毒していると中から黒いアスファルト状のものが出てくるらしい。(石頭はアスファルトを削り取ったか) 初めは３～４針も縫えばというのが、結局、１０針縫ってもらった。

（4）この間、約４０～５０分か。明日 30 日、午前９時再診、あとは自宅最寄の病院でフォローしてもらうようにとのこと。両兄に「大事ではない、明日・３０日の歩行は続けて欲しい、殊に明日の夜は、名港海運の高橋治朗君、川越秀治君がわざわざ都合をつけて待っていてくれる。小生だって手当てのあと合流することも出来そうだから・・」と伝えたいのだが、これが出来ない。(「俎板の鯉」同然だから、差し出がましくは出来ぬ)

（5）処置室の外では両兄が病院の諸手続きはもとより「今回の歩行は打ち切り、高橋君には明晩の夕食キャンセルは連絡済、桑名のホテルは解約した、・・」と事後措置を済ま

せてくれていた。
（６）幸い歩ける。「おでこ」にガーゼをはって電車に乗る。新安城駅から２駅、知立まで。午後６時頃、予約した「ビジネスホテル・知立」にチェックイン。（フロントのレデイー、この３人組をどう観察したかは解らない）
小生、例の通り？血痕のついたズボンと帽子を洗い、タオルを始末。「山ノ神」への連絡は後回し。午後７時、フロントのレデイに聞いた評判のよろしい店に出かける。
TV では「中日と何処か」がやっていて、地元の御仁か？賑やかなこと。
頭だけか？他の症状は現れず。氷を入れた水を３杯頂く。佐薙や高崎が何時も通り酒を味わってくれればいいが・・と願う。
（７）小雨がぽつぽつと降るなかを信号２つばかり歩いてホテルに戻り、午後９時頃、「明日、帰る。理由は戻ってから・・と出来るだけ元気そうな声で」と連絡。様々な思いが駆け巡る。

（８）30 日、午前 7 時、ホテル発。新安城駅下車、当地域特有の「モーニング・サービス」のコヒー店を探す。だだっ広い開発地、急ぐ通勤者、リュックを担いだ風変わりなロートル３人組、なかなかそれらしき景色に出会わず。たまたま犬を連れた御仁に聞く。「あっちはまだ、此方はオープン」と 2.～３00 米先を教えてくれる。土地の事情に詳しい。
店内の風景、男ばかり、新聞を読む人、TV を見る人、・・かみさんは何をしているのか？
（９）８時４０分、病院・外科に到着。直ちに処置室に入るも、今回はスタッフ多数、沓名医師より先輩格の先生、「CT で脳をチェックしましょう」と、有り難いお話。
CT 撮影、脳神経外科（ベテラン？井上医師）で診察、幸いにして、「脳には異常なし」（脳血管の石灰化が少し進んでいるが）の所見。この間、昨日の沓名医師はず～っとついて来て下さる。親切、この上なし。
（千葉、最寄の病院への紹介状作成を待つ間、外科受付のキュートなお嬢さんに「お世話になりました」と声をかけると、このお嬢さん「今朝もお会いしましたよ」と。聞けばリュックを背負ったロートル３人組み、コーヒー店を探してうろちょろしているところを横目で見ながら出勤していたらしい。名前は鈴木麻由さんという。鈴木から尾張は 1/3 は鈴木と聞いていたので覚えた。余談）
（１０）午前１１時頃、感謝のうちに全てを済ませ、新幹線の「三河・安城駅」へ、タクシーで１５分ほどか。（石和田は高橋治朗君にお詫びと御礼の電話、彼は明日、また海外へ出かける多忙きわまるスケジュールなのに、佐薙のプロポーズで今夜吾らと夕食を共にしてくれることになっていたのだ。“アスファルトを削ったか、丈夫な頭だ”、なんて冗談を交わす）
１２時４３分発、「ひかり」で帰宅。（浜名湖を渡る手前で心地良さそうに眠っていた高崎を揺り起こした。例の場所だ。現実はどんどんと新しい事実を生み出し、前へ前へと進む。新幹線の速さか。外はかなりの雨だった）

（１１）石和田は「玄関を開けたときの対策？」を思い描きながら帰宅。
「五体不満足は分相応とすべきこと」「もうこれ以上佐薙や他の諸兄に迷惑はかけられない。特に佐薙には「仏の顔を３度」とは言えない」「折角のオーション会、夢のプロジェクト、誰かが続けて京三条でフィニッシュしてもらいたい」・・「山ノ神」に異議なし。
（１２）「中断して帰る」とだけ連絡しておいたので、山ノ神は娘とあれこれ想像を巡らし、その一つに「ナンチクさんがどうかしたのか？」なんて、のもあったそうで「ナンチクさんよ、許して！」下さいな。

[３]処置後のフォロー（その１）フィジカル面

⑴10 月１日、最寄の千葉市立・海浜病院・外科（紹介状持参のうえ）で診療、消毒・ガーゼ交換。医療費８０円
（２）10 月 2 日、5 日、6 日（抜糸６本）8 日（抜糸４本、これで縫合全糸の抜糸・完了）、治療終了。医療費各日７０円、8 日入浴。
両眼の周りの青地（パンダ模様）、日ごとに薄れ（生きている実感）15 日でほぼ消滅。
10 日以降、1 日 5～6000 歩の歩行を開始。この足よ何たることか！

[４]処置後のフオロー（その２）メンタル面

⑴ 「オーション会・夢のプロジェクト」を挫折させてしまったこと、殊に佐薙には再度に亘り心痛を煩わせ、言葉もない。
10 月１日の佐薙のメール、「小生、安全な形で諸兄をリードしていく資格がないことが示されたわけなので、グループによる東海道ウオークは当然のことながら、やめることにします。これまでのご協力有難う」に彼の受けたショックとダメージの甚大さが現れており、もうどうして良いのか！地獄に落ちても、炎に身を投じても償えそうにないチョンボ！に悔恨の思い尽きず。
（２）その後、次々と諸兄から慰めや励ましを頂いた。
松尾から「まあ暫くは、蟄居・謹慎して写経に励まれるがよかろ。その内、また反省会でもやりましょう。　謹慎　写経　怠るでないぞ」と
高崎からは「洞窟で断食・念仏唱えたい気持ちは分かるが、生産的でないし、まずは早く傷を治すこと。敗残兵になるのも勇気がいるのですぞ。これからはあんまり頑張り過ぎないように生きていきましょう」と
宮川からは「適切な処置で無事帰宅出来てよかったし、何よりも疲労から心臓に来る様なことがなくて良かった。暫くは鬱陶しいだろうが我慢して治療に専念してください。
佐薙兄、責任感の強い貴兄が言う事はよく分かるが、これで大きく燃え盛っていた「オーションの灯」が消えてしまうのはいかにも寂しい。グループの行動はやめるにしても、貴兄は一人で計画を完遂する積もりだと思う。足手纏いになるようなことは出来ないが、せめて最終の三条大橋だけは一緒に「オーションの灯」を掲げて渡りたいと思うがどうだろうか。オーション会一大プロジェクト、せめてもの有終の美を飾りたいものだ。
もしその計画があるなら是非知らせて欲しい」と。

鈴木からは「松尾から聞いた。早々の回復を念じています。躓いて転んだ由、小生の躓きに較べれば細かなこと。改めて大兄の強運力と信心力に感心。東海道は部分参加で大きなことは申せないが何とか京三条に到達したいと考えています。大兄も宮川スタイルでまた出かけて下さい」と。

そして、佐薙から 10 月 7 日付けで「四郎兄　怪我の回復、順調なことを祈る。計画がぽしゃること、往々にしてある。Don't mind. Take it easy.

諸兄　克夫兄からも葉書をもらい「また参加したい」。その他の諸兄からのメッセージも読んだ。そんなこんなで、安城から三条大橋までを小生が単独でやってしまうという頑な気持ちを今も持ち続けているわけではない。Recovery Plan はいずれ諸兄に知らせるつもりだし、特に最終日あたり、参加希望の向きには、打ち合わせをしたい。

しかし以前考えていた＃7の実施時期（10./28~30）は白紙にする。まだアイデア段階だが＃6の歩き残し（安城―石薬師）を＃6・5として横浜早朝発、名古屋または桑名泊の2日行程でこなすことを考慮中。11 月には他の予定も多々あり、＃7が年越しの可能性もある・・」と

メンタル面の回復は、まさに諸兄の励まし、勇気付け、そして今後の計画遂行の如何にかかるか。

数々の励まし、勇気付けに感謝の他はない。そして佐薙の意向、あり難い。

どうか「オーションの灯」を京三条大橋まで運んでいただきたい。

2009 年 10 月 16 日

＜安城市・八千代病院・皆親切　年内に御礼に参上したい＞

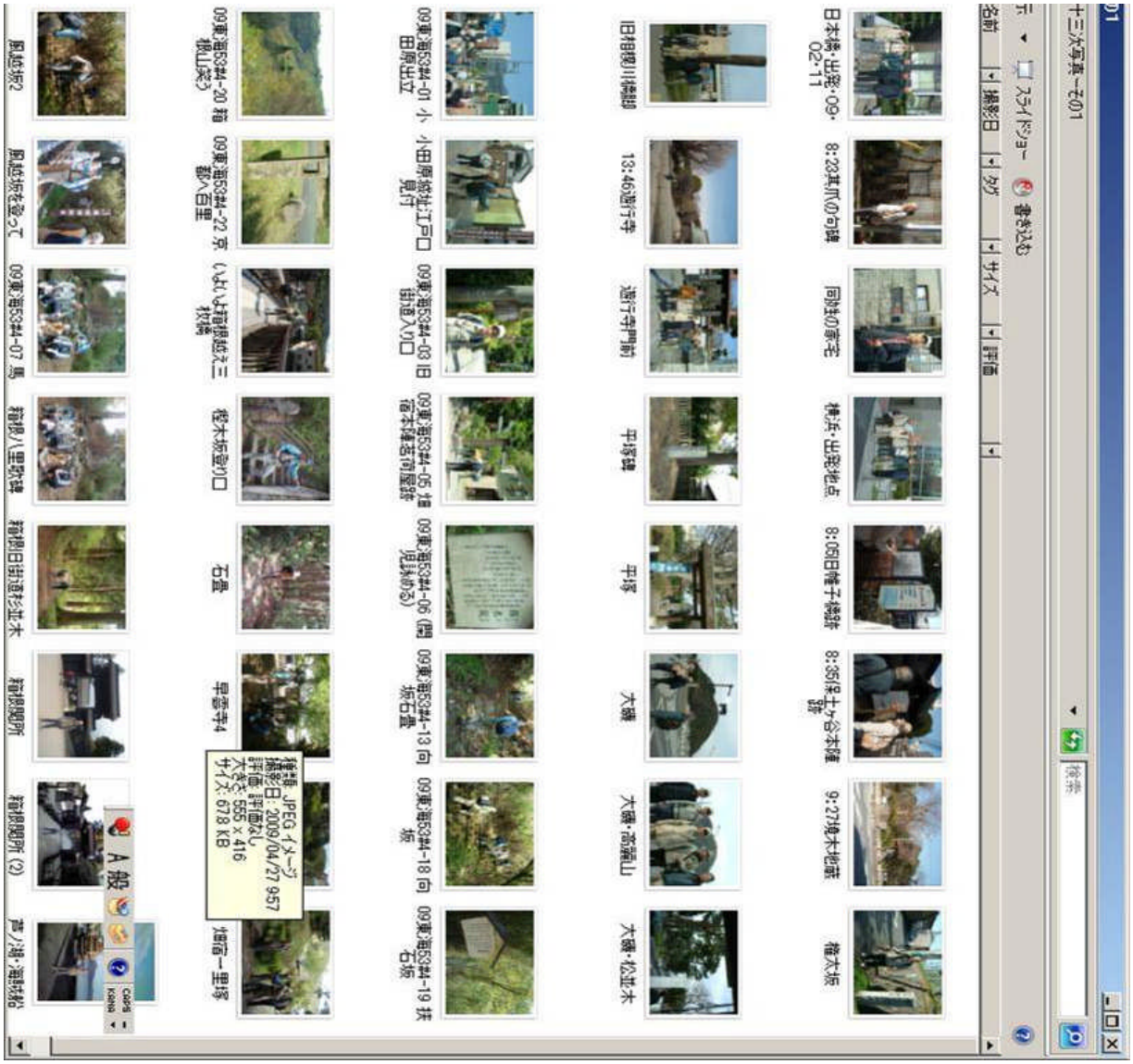
＜　千葉市立・海浜病院・消毒抜糸・お世話になりました＞

＊　佐薙、高崎兄、「おでこ」の右の眉の辺りが少々？

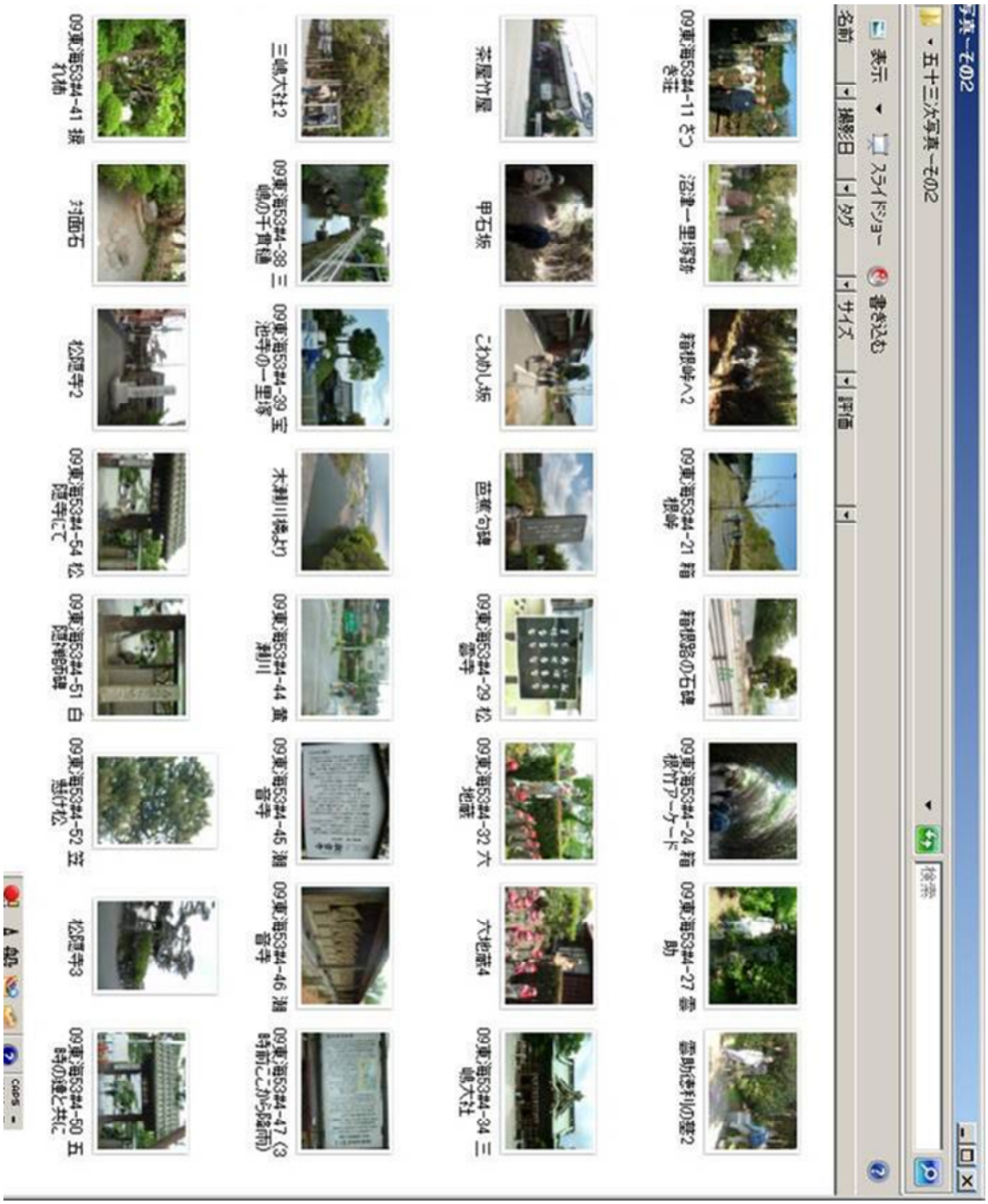
＜2009・10・17 撮影＞

ガーゼ、包帯は取れました。男前はいまいち？

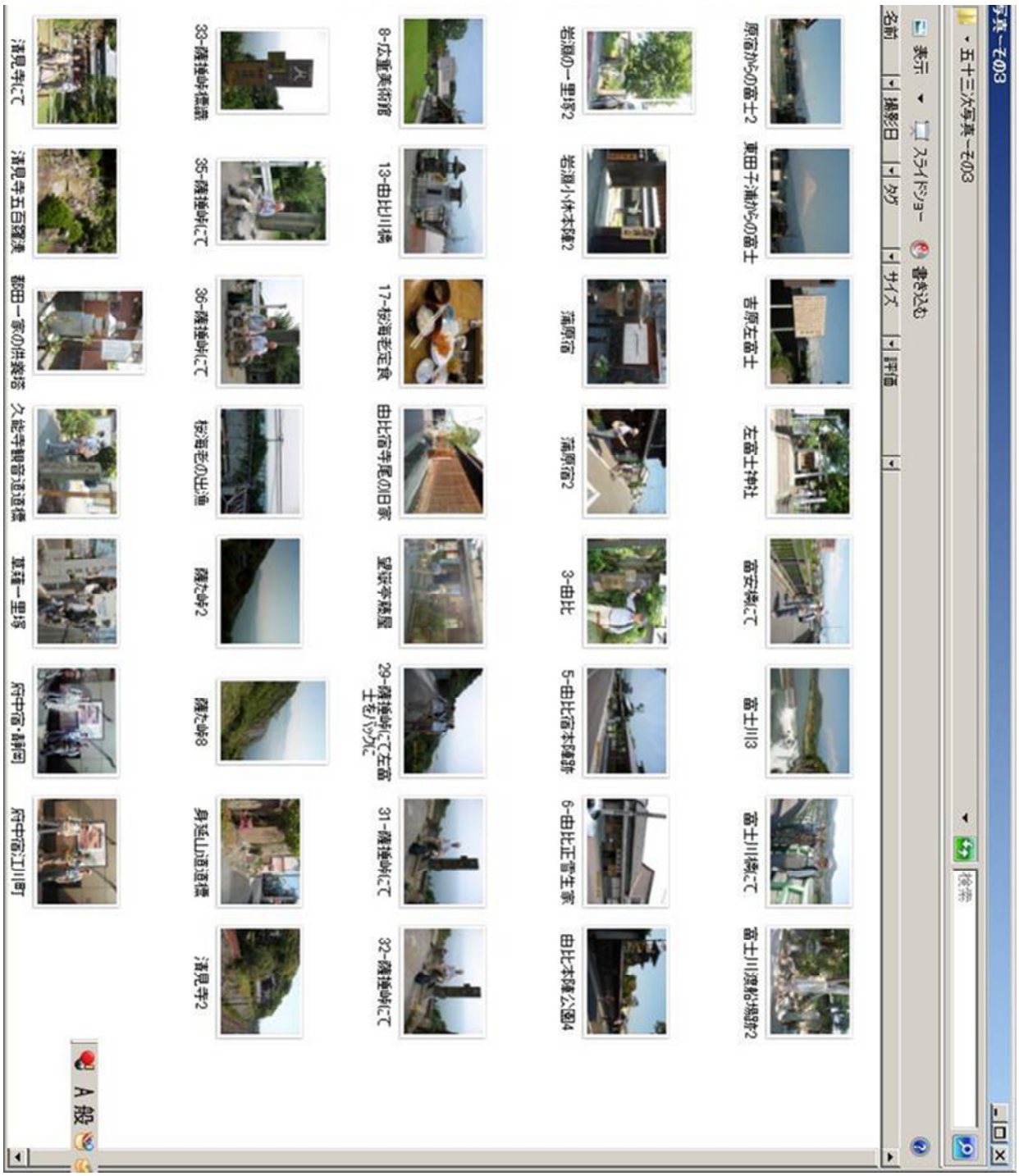
東海道写真―その１　（日本橋~箱根）



東海道写真―その２

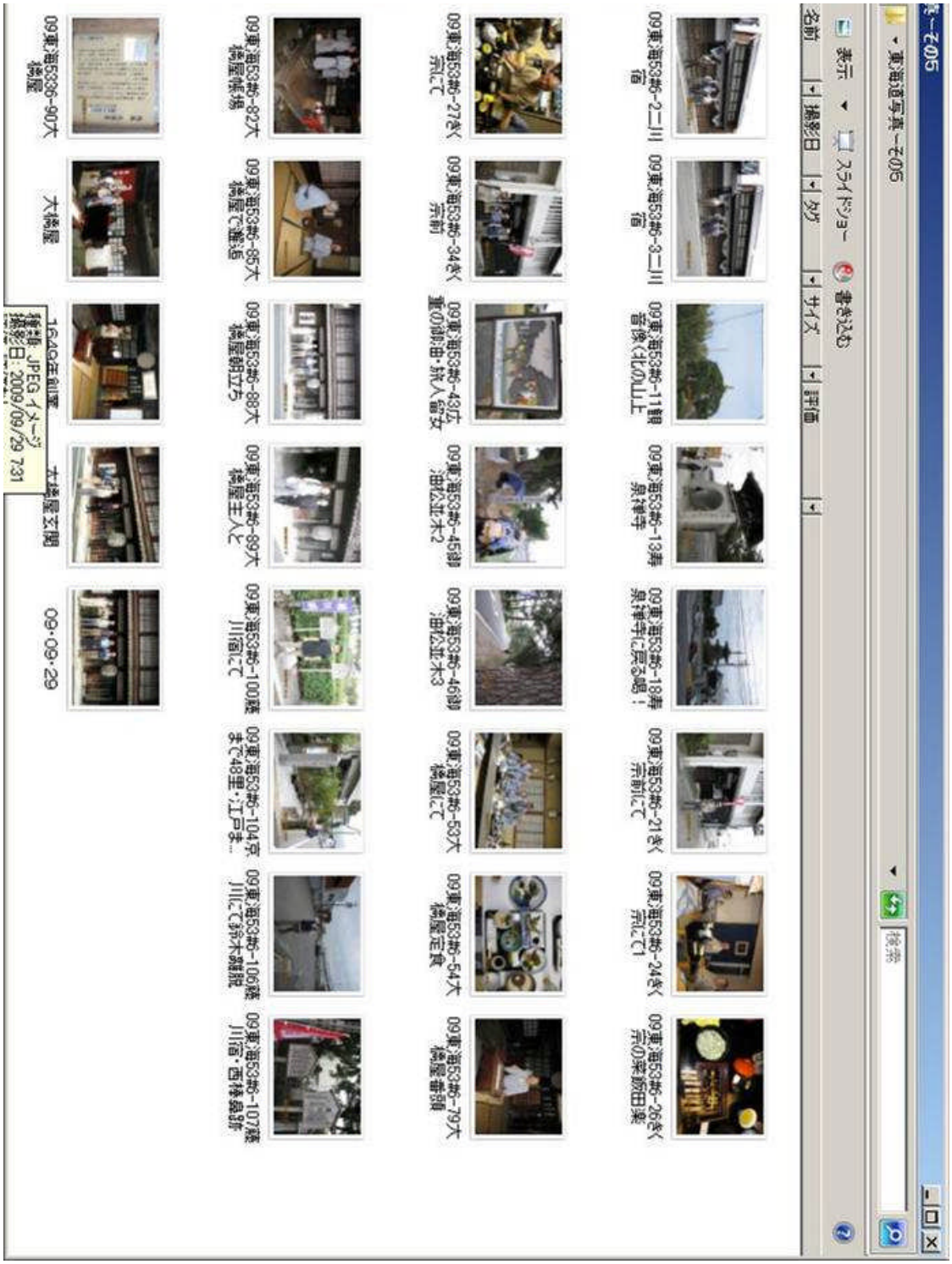

写真~その2
五十三次写真~その2
表示
スライドショー
書き込む
名前
撮影日
タグ
サイズ
評価
09東海53#4-11 さつ き注
沼津一里塚跡
箱根峠へ2
09東海53#4-21 箱 根峠
箱根路の石碑
09東海53#4-24 箱 根竹アーケード
09東海53#4-27 雷 助
雷助供利の墓2
茶屋竹屋
甲石坂
こわめし坂
芭蕉句碑
09東海53#4-29 松 蔭寺
09東海53#4-32 六 地蔵
六地蔵4
09東海53#4-34 三 嶋大社
三嶋大社2
09東海53#4-38 三 嶋の千貫樋
09東海53#4-39 宝 池寺の一里塚
木瀬川橋より
09東海53#4-44 黄 瀬川
09東海53#4-45 潮 音寺
09東海53#4-46 潮 音寺
09東海53#4-47 (3 時前にここから降雨)
09東海53#4-41 坂 れ姉
対面石
松蔭寺2
09東海53#4-54 松 蔭寺にて
09東海53#4-51 白 隠禅師碑
09東海53#4-52 笠 懸付松
松蔭寺3
09東海53#4-50 五 輪の塔と共に

東海道写真―その３　（原～府中・静岡）

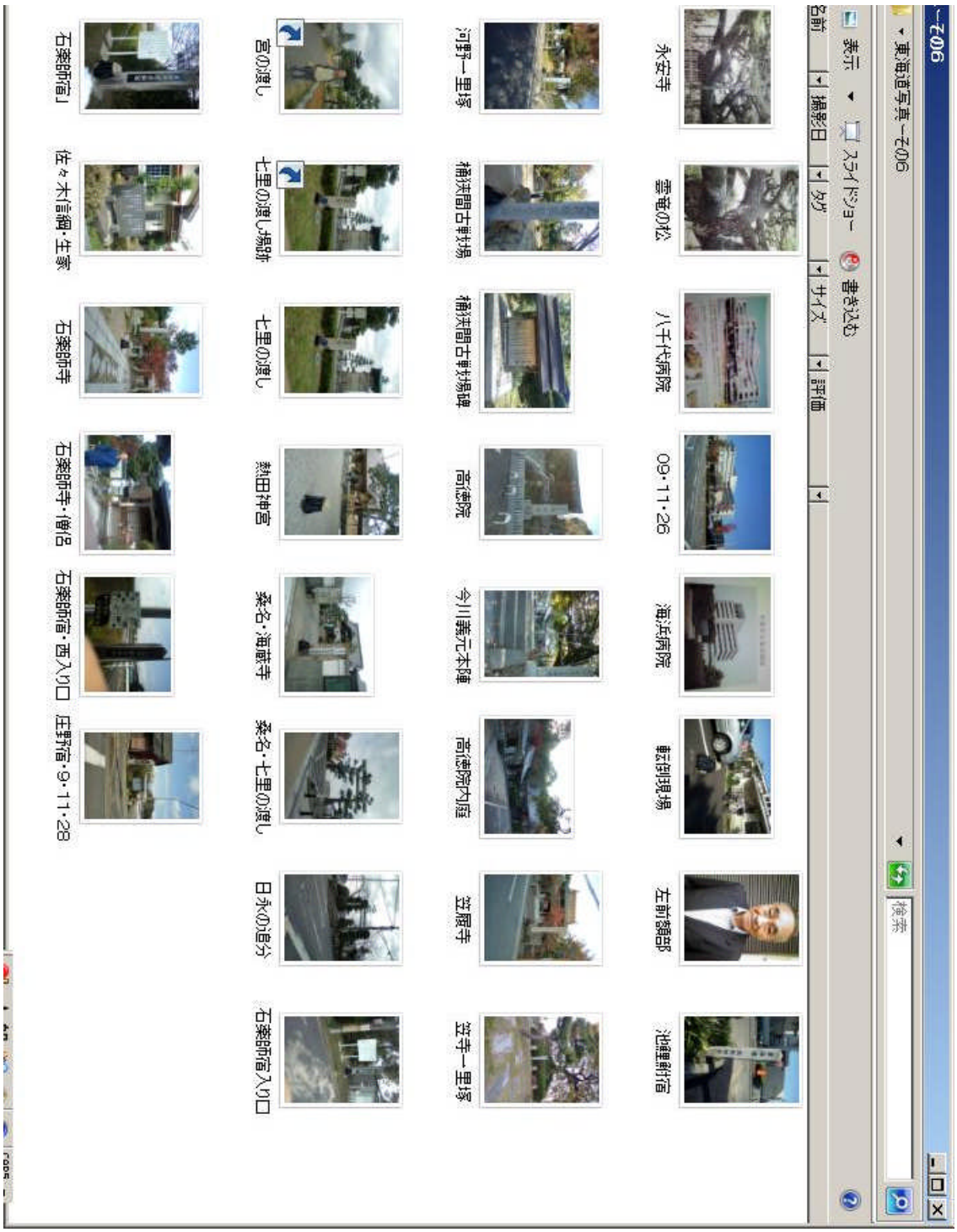


東海道写真―その４　（府中宿・静岡～二川宿）

東海道写真―その５　（二川宿～池鯉鮒宿・安城）



東海道写真―その６（池鯉鮒宿・安城～庄野宿）



東海道写真―その７（庄野・亀山・関宿～京三条大橋）